

# UFOと宇宙

VOL.1/1973

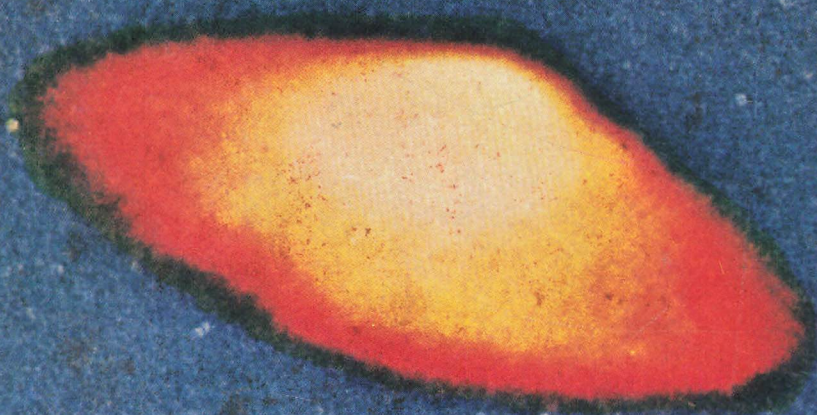
創刊号 隔月刊

7-8月号

# コスモ

世紀の謎——  
UFO＝空飛ぶ円盤

UFO対談 / 小松左京氏ほか  
フランスの怪奇・火の玉UFO  
連載＝神々の戦車(★)



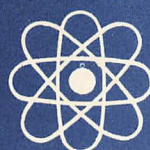


月の光でも……

Minolta

きれいなカラー写真が  
写せる

コンパクト(重さ 350g)

 電子カメラ

- 情報集中ファインダー
- シャープさで定評あるF2.7 ロックールレンズ
- フラッシュ撮影も簡単

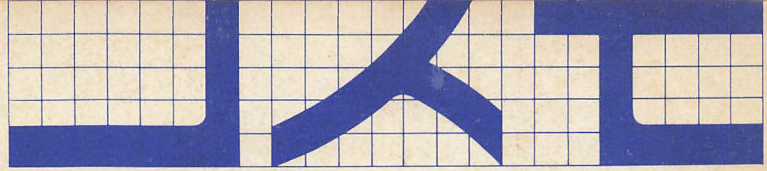


ミノルタ ハイマチックF

標準価格 ¥21,300 / ケース ¥1,500 ブラック ¥1,000高

ミノルタカメラ株式会社 〒105 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル  
〒542 大阪市東区安土町2-30 大阪国際ビル





### 世紀の謎UFO—空飛ぶ円盤——2

UFOは世界中に出現する／ケネス・アーノルドの目撃／戦争中にも目撃された

ラボックの光体群／円盤は他の惑星から来る？／学者の論争／ソ連でも目撃されている。／やはり存在する？

珍しい円盤体験／UFO研究のあり方／未来にかける夢など……

### UFO対談——10

私はUFOを見た——畠山久尚——10

円盤は夢をもたせてくれる——大辻清司——13

不思議な現象に関心を持とう——小松左京——17

円盤は実在する。私は何度も見た——横尾忠則——21

### 浅間山上空に円盤が出現——26

2月24日浅間山の山すそに消えたナゾの物体

### 多条光線を放つ円盤——ゴードン・クレイトン——28

ミナスセラエス事件／フランスのロテガロンヌ事件／ウィンダメアー湖の事件

フランスのピレネー地帯の農家付近に連続出現した奇怪な火の玉群と砲弾型物体！

### フランスの怪奇—火の玉UFO事件——F・ラガルド——34

広がっては、引っこんだ光線。中空で止まる光線……

### ある夜の美しい出来事

バートルド・E・シュワルツ——52

### 科学トピックス——58 月は生きている？／火星も呼吸をしている！

連載——ノンフィクション

### 神々の戦車——(1)——エーリッヒ・フォン・デニケン——59

スイスの考古学者が次々に明かしてゆく南米ナスカ地方の遺跡のかずかず





アメリカのマスカレロ・インディアン保護地の  
インディアン局に勤務する看護婦  
エラ・ルイス・フォーチュンが、一九五七年十月十六日に  
ニューメキシコ州ホロマン空軍基地付近で  
撮影した円盤。





# 世紀の謎

科学が長足の進歩をとげたこの二十世紀にも怪奇な不思議な現象が沢山ある  
空飛ぶ円盤もそのひとつ。まだ科学で解明できないこのナゾの物体の正体は何なのか？  
自然現象か？ 他の惑星から来る宇宙船か？ 果しない宇宙へ人類の足が伸びるに  
つれて、このナゾが解き明かされる日がくるだろうか？

# UFO—空飛ぶ円盤

空飛ぶ円盤というのは正しくはUFO (Un-identified Flying Object) といい、未確認飛行物体とも呼ばれています。つまり地球上の飛行機、観測気球、ロケット、鳥類その他の確認された物体、または流星などの天文学的現象類をのぞいた正体不明の飛ぶ物体（または光体）を意味します。正体不明といっても国籍不明の怪飛行機などをやはり「正体不明」ということも

ありますが、一応飛行機であることが確認されればUFOの部類には入りません。したがってUFOは「これこれだ」と確認できないナゾの物体そのものです。

UFOは世界中に出現する

このUFOが空飛ぶ円盤という呼称でわが国

に広く知られるようになったのは第二次大戦が終わった直後からです。そのころ円盤型の怪物体が日本をふくめて世界各地に出現したという記事が連日のように新聞に出ていました。当時は大体にどこかの国の秘密新兵器だと考えられていましたが、そのような説は次第に影をひそめて、多くの説がとねえられるようになりました。他の惑星から来る宇宙船だという説、鳥そ



他の物体の誤認だという説、幻覚だという説、地上のライトの反射説などです。しかし円盤の写真が世界各地で撮影されて公開され、それらの形が大体に円盤型をしているところから、UFOにはあるボタンが存在することが知られるようになってきました。つまり皿を重ね合わせたような形の物体と、もう一つは葉巻型の細長い物体の二種類です。このほかに五角形のUFOや球型のもの、茶ガマのような形をした物体などいろいろあります。したがってこれらすべてを「円盤」というのは正しくありません。やはりUFOと呼ぶのが適切です。

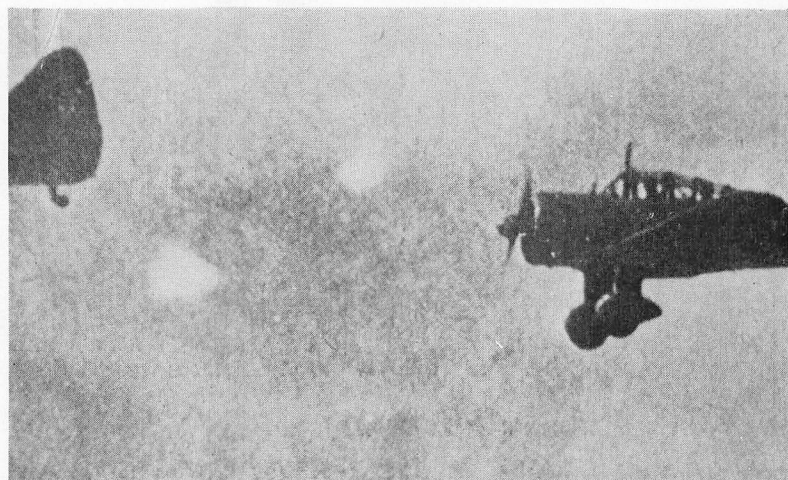


●ケネス・アーノルド

## ケネス・アーノルドの目撃

UFOが出現したという記録はかなり大昔からあります。戦後に始まったことではないのです。たとえばインドや南米の古代の伝説にもこの不思議な空飛ぶ物体のことが出てきますし、その他の国々にも神話や伝説などに天空から降りて来た物体や神々のことなどが出てきます。しかしこれらの記録は科学的実証性がとぼしくて、どこまで事実なのかわかりませんから、ここでは現代の目撃報告だけを扱うことにしましょう。

戦後アメリカで空飛ぶ円盤を目撃して一躍有名になったのはケネス・アーノルドという実業家です。この人はアイダホ州ボイスのある会社の社長で、自家用飛行機のすぐれたパイロットでもあるのですが、一九四七年六月二十四日の午後ワシントン州のレイニア山上空を自家用機で飛んでいたとき、突如九個の円盤型物体が約九千フィートの高度で一列になって飛んで行くのを目撃し、「まるでコーヒー台皿が飛んでいるみたいだった」と語ったことから「フライング・ソーサー」という言葉が広がるようになりました。したがって英語では空飛ぶ円盤のことを一般にはフライング・ソーサーといっ



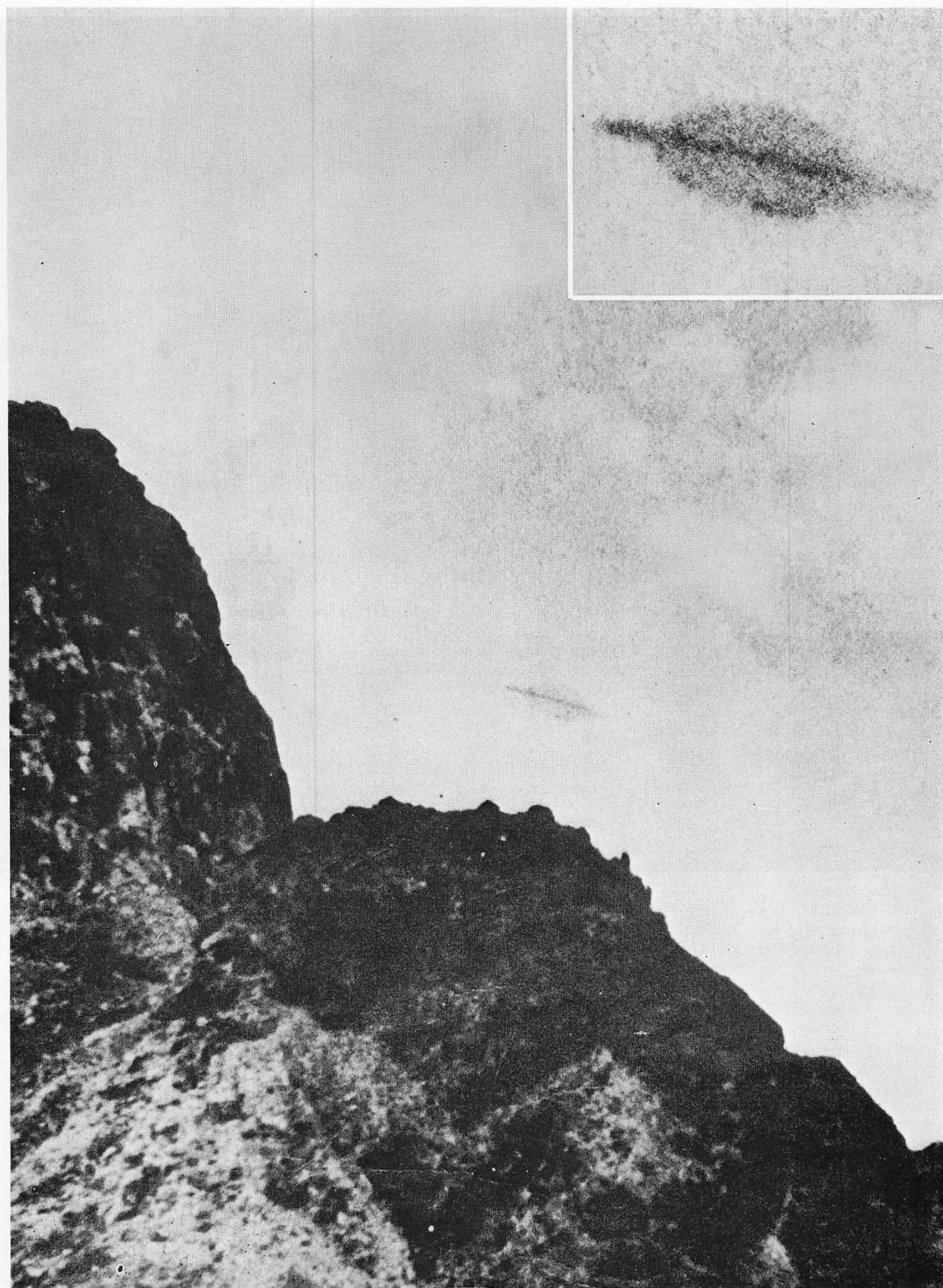
●第2次大戦中に米空軍機の付近に出現した2個のUFO。

います。

## 戦事中にも目撃された

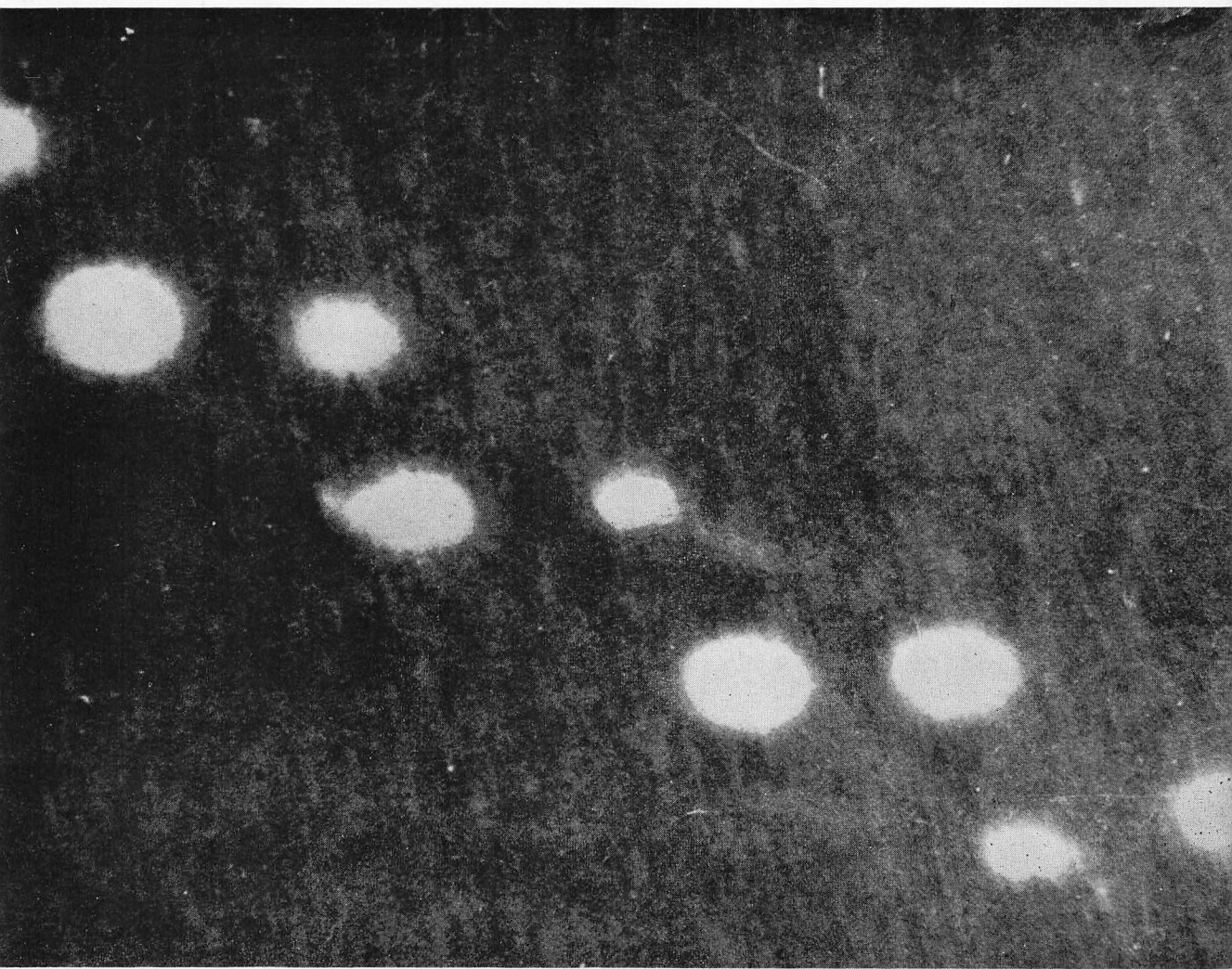
先にも述べましたように、空飛ぶ円盤は戦後になって初めて出現するようになったものではなく、昔から出現していたようですが、第二次大戦中は米空軍のパイロットたちも不思議な物体を空中に望見して、これを「火の玉戦闘機」





●ブラジル海軍撮影の円盤／1958年2月、ブラジル海軍の練習船アルミランテ・サルダナ号が観測船として南大西洋のトリニダード島に接近したとき、同月21日の正午すぎ、同乗していたカメラマン、アルミーロ・バラウナが撮影した有名な円盤写真。右上はその拡大部分。



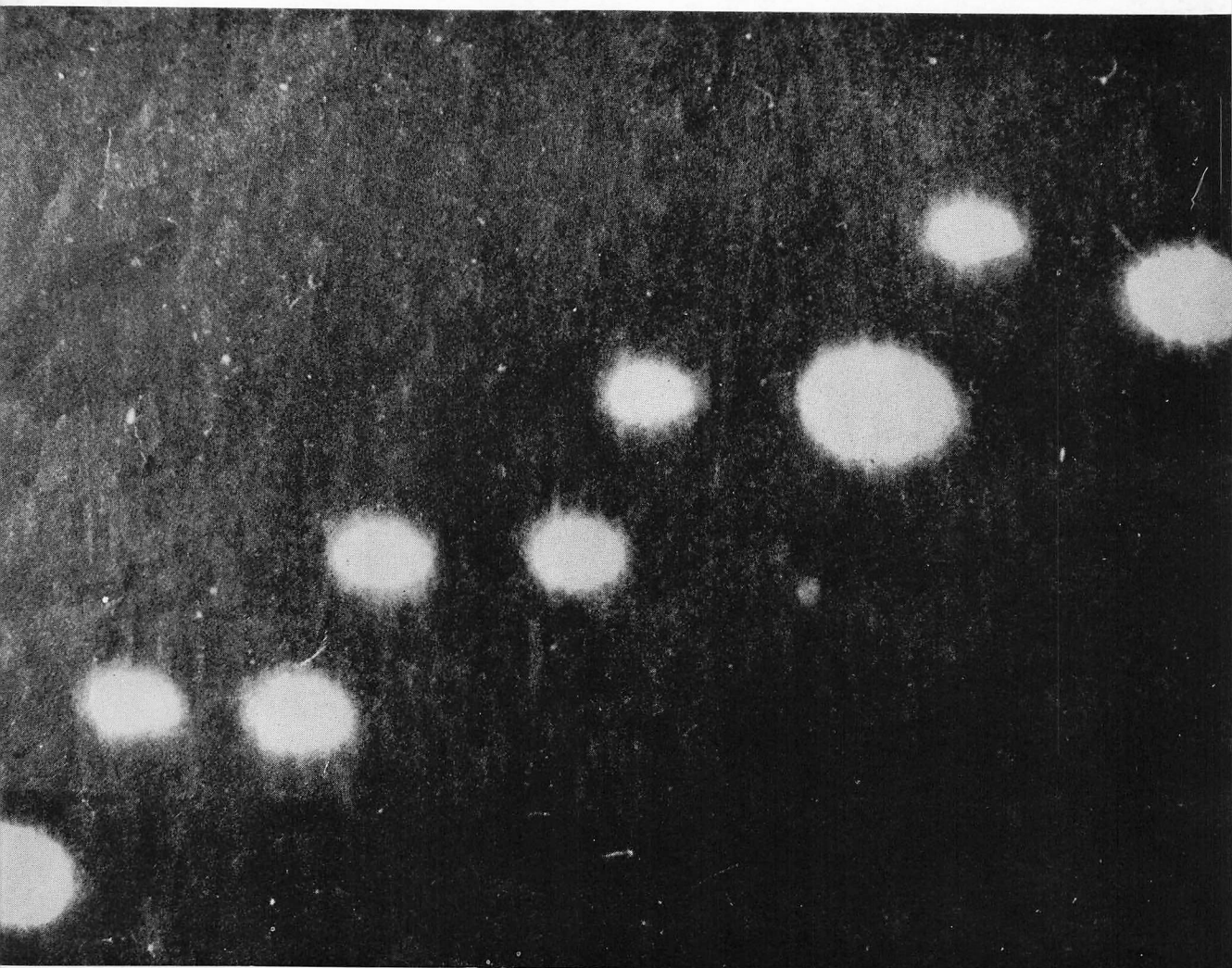


と呼んで恐れました。敵国の秘密兵器だと思い込んでいたのです。このような例は米空軍ばかりではなく他の空軍にもあったようです。また、大地震が発生した地域ではその前後に空中に奇妙な火球が出現するということも昔からいわれています。これがいわゆる円盤なのかどうかは判然としませんが、別な惑星から来る進歩した宇宙人が円盤に乗って地球を観察し、特に地震など起こりそうな土地を事前から観測しているのだという説も出ています。

### ラボックの光体群

円盤を撮影した写真は意外と沢山あります。おそらくなかにはいかかわしいトリック写真もあるでしょうが、ほんものもあります。これらは偶然に撮影した場合が多く、たまたま円盤が出現したときにカメラを持っていたという幸運にめぐまれた人たちの撮影になるものです。特に有名なのは「ラボックの光体群」と呼ばれる写真で、これは一九五一年八月三十一日の夜、テキサス州ラボック市に住んでいた当時十八歳のカール・ハート少年が撮影したものです。その夜同少年は自室の開いた窓のそばのベッドに横たわっていたのですが、真夜中になる少し前ごろ、突然夜空を十数個のオレンジ色に輝く光体が編隊をなして通過するのを見て大急ぎでコダックの35ミリカメラをつかんで庭へ飛び出て連続二枚撮影しました。この写真はのちにユナ





●カール・ハート少年撮影のラボックの光体群

イテッド・プレス社によってアメリカ全国へ流されました。こうして非常に有名な事件となったのですが、空軍はこれを「鳥の群れ」とかたづけてしまいました。しかし実は同夜この町で三人の学者もこの光体群を目撃したのです、それはテキサス工科大学の教授W・ロビンソン博士、A・オバーク博士、W・ダカー教授で、ロビンソン博士の家の裏庭に三人がいたとき、やはりこの光景を見ているのです。彼らもやはり鳥の群れが地上の光を反射したのだろうといっています、実際の写真はもつとはるかに強烈に輝いており、鳥の反射説を否定する要素を帯びています。米空軍の円盤研究機関の長であった故エドワード・ルッペルト大尉はウソともホンモノともいえないといっています。

### 円盤は他の惑星から来る？

以上の他に円盤を撮影した写真は世界中に存在しますが、いまここにそのすべてを紹介することはできませんから、号を追うにしたがって次々と掲載することにしましょう。

さてこの空飛ぶ円盤すなわちUFOは他の天体から来るのだという説もかなり強く行なわれています。その説の根拠になるのは、何といっても無音で想像を絶したスピードで飛ぶこと、その飛び方はきわめて人為的で、ジグザグ飛行、急旋回、垂直升昇下降など意のままであること、種々の色光を放つこと、地震その他の変

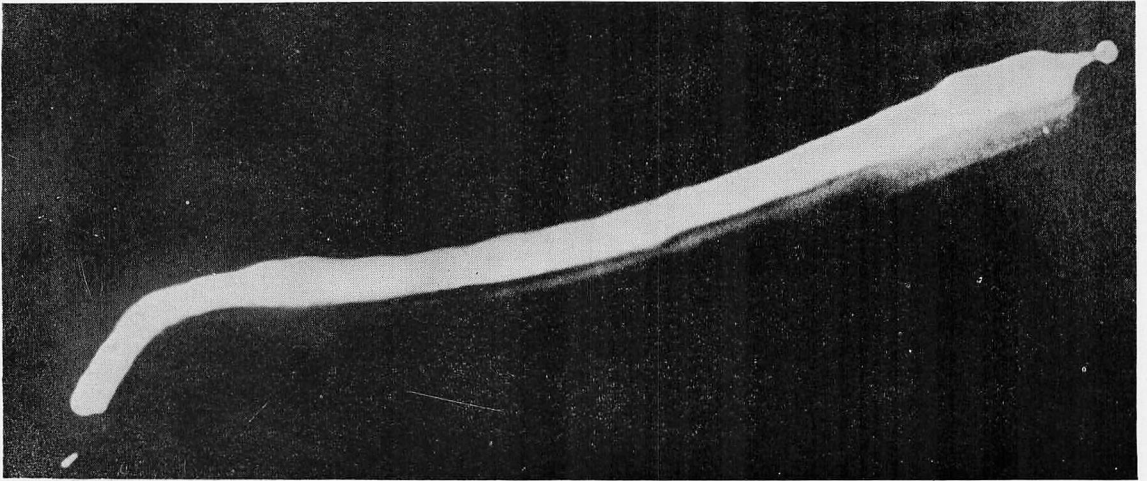


災時によく出現すること、その他です。そうするとその推進力は何かということになりますが、これも多くの憶測が行なわれていて、静電気をエネルギー源とした重力場エンジンではないかというのが有力な一つの説になっています。そして惑星と同じように船体の周囲に重力場を持っているために内部にいる人——人間がいるとすれば——はGの影響を受けることがなく、またすさまじいスピードで大気圏内に突入する際も大気のショックによる影響を受けないというわけです。現代の科学ではまだ説明が無理ですが、この問題に真剣に取り組んでいる科学者もいますので、いつか真相のわかる日が来るかもしれません。

## 学者の論争

ハーバード大学の天文学教授カール・サガン博士はソ連のシクロフスキー博士との共著「宇宙の知的生命」の中で次のように述べています。

「円盤人（円盤に乗っていると思われる知的生物）は賢明で、やさしくて、愛情深く、あらゆる事を知っていて、しかもちょうど親が子供を見守るように、地球上の人類の状態に関心を持っている……円盤にまつわる神秘的な事物は、伝統的な父親としての神を信ずる必要性と、科学の声明を受け入れよという現代の圧力とのあいだの、適切な妥協を要求する」



●カナダの会社員ジャック・フレンチが撮影したUFO。シャッタースピードが遅いため青緑色の尾が長く写った。



●エドワード・コンドン博士

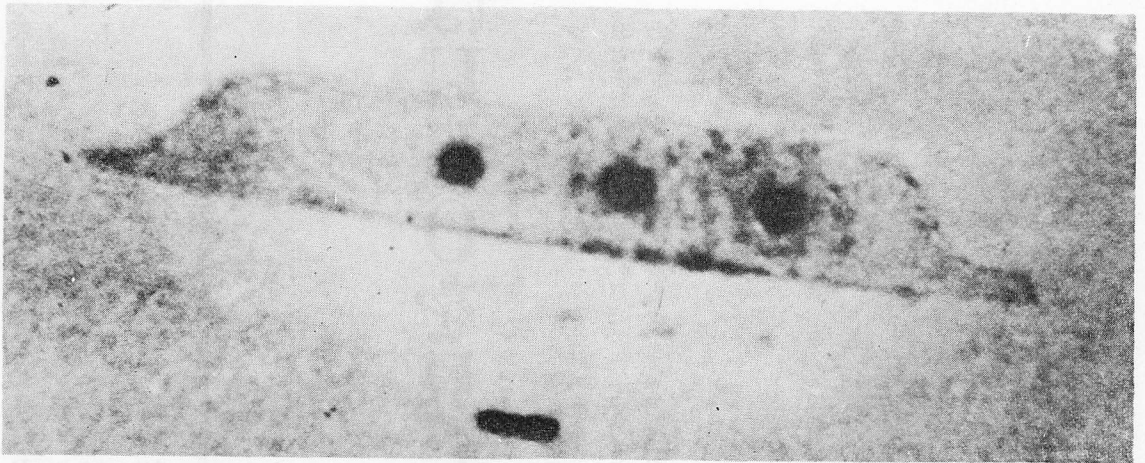
ところが一方、コロラド大学の原子物理学者であるエドワード・コンドン博士は「私が断言したくないことが一つある。それは、あいまいな事象を証明できないからといって円盤は存在しないときめつける態度だ。しかし円盤目撃事件の九十パーセントは気球、雲にあたったサーチライト、その他一般に知られている現象などで説明できると思う」といい、その後の米空軍の依頼によって調査した結果では、円盤の存在に対して否定的態度を示しています。ただしこれも一説によれば、米空軍の圧力によって否定的な言動をなしたといわれていますが、真偽のほどはわかりません。



## ソ連でも目撃されている

しかしソ連でもUFO研究が相当にさかんで、目撃事件としては次のような例があります。一九六五年七月二十六日の夜九時半ごろ、ラトビアのオグレで光る雲を調べていたロベルト・ヴィトルニェク、エスメラルダ・ヴィトルニェク、ヤン・メルデレスという三名の天文学者は、径約百メートルもあるレンズ状の円盤を望遠鏡で確認しています。この円盤のまわりには小さな三個の球体が回転しており、中心部にも球体がありましたが、やがて天空へ飛び去りました。静止していたときの高度は約二百六十五キロと推定されています。「ソ連のリーダーはこの二十年間UFOをとらえてきた」と述べたのはモスクワ航空協会のフェリックス・ズイーゲル博士です。

またレニングラードの八名から成る地球物理学調査隊がカザクスタンの山中で一九六〇年八月十六日の夜十一時に、月よりも五十パーセント大きなオレンジ色の光体が山の上をかなりのスピードで飛ぶのを見ています。「すべてを錯覚と考えるわけにはゆかない。錯覚なら写真の乾板やリーダーにはつきりと写るわけではない」とズイーゲル博士はいい、白ロシヤ科学アカデミー会長のワシリ・クブレヴィッチ博士は「おそらく大気圏外から来る人間が人々の目にふれないようにして地球を訪れているのだろう。そ



●1967年6月28日、アメリカ、ペンシルバニア州ニューキャスルでガブリエル・コゾラが撮影した円盤。長さ約60フィートのこの物体は15秒間空中に静止してから飛び去った。

の人間たちの知的発達はいわめて高度なものになっているので、われわれが太古の祖先を見るのと同じ程度にしかわれわれを見ていないのだろう」と語っています。

## やはり存在する？

UFOは存在するか、それとも自然の現象なのか？ いまもってこれは世界中の論争の的になっていますが、一般人の目撃例のなかには誤認例が多数あるにしても、大勢は存在する方にかたむいているのが現状ではないかと思われるます。もちろん日本でも多数の目撃例がありますし、斎藤雄久氏のように富士山で円盤が雲の中から出て来る光景を8ミリ映画に撮影された例もあります。（この映画はNHK、日本テレビ等で全国向けに放映された）真珠のような白銀色に輝く円盤が雲を突き抜けて出入する現象は到抵トリックとは考えられません。

こうなるとUFO問題は捨ておくわけにゆかず、民間研究家ばかりでなく科学者が本腰になって取り組む段階にきていると考えられますが、日本では諸外国にくらべてまだ科学者の関心が薄いようです。しかし円盤現象が目撃され続け限り、いつかはこの現象も科学の研究対象として取り上げられる日が来るでしょう。そして人々の目が果てしない宇宙に向けられるようになるでしょう。



珍しい円盤目撃体験／UFO研究のあり方／未来にかけの夢など——いま、私たちはUFOをいかに捉えるべきか

# UFO対談

畠山久尚・大辻清司・小松左京・横尾忠則  
聞き手＝本誌編集部

畠山久尚

元気象庁長官・理学博士

## 私はUFOを見た

——先生がUFOを目撃されましたが体験についてお話し下さいませんか。

私が見したのは円盤そのものではなくて、こういう物を見てこれが円盤の一種だという人があるかもしれないといううな、そういう物を見たということなんです。それは今から二十年ぐらい前になりますかね。茨城県に柿岡という所がありまして、そこに気象庁に付属した地磁気観測所があります。隣りの地所には東大の地球物理学教室の観測所もありますが、そこへ行きましたときのことなんです、ちょうど晴れた日の夕方、陽は落ちていましたが、まだ明るいごろでした。

——日時はいつでしょうか。  
それはよくおぼえておりません。用事があ

って行ったのですから、その当時の記録を調べればそれが何年の何月何日だったというところはわかりますが、今はとてもそこまで調べるわけにはゆきません。

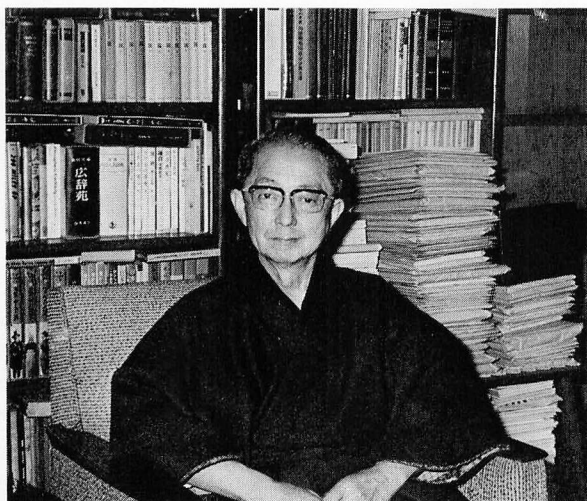
それで、どんな物だったかといいますと、西の方の空に上の方から下の方にむかって光った線が降りて来る、落ちて来るといよりは降りて来るといふ状態でした。それが二条なんです、線の長さはそんなに長くないんです。光った線が二本並んで、垂直に降りて来て、あれあれと見ているうちにそれが今度は両方へ広がってゆきました。降りて来ているうちは何だか見当がつかなかったんですが、その物体がさっと直角に両方に広がって行くのを見て、これは飛行機かなと思いました。どこかの飛行機が日没

の頃に飛行訓練をやっていて、そしてそれが飛行機雲の尻尾を引いていて、その尻尾が割合短い時間で消えてゆくという、空の気象状態がそういうことだったのかもしれない。

### 不思議な白いスジ

それを見たとき東京大学の先生もいっしょに見ていたのですが、その先生も自然現象を見る場合の訓練を積んでいる人でしたからすぐに時刻を見ていました。それを見てその人は『今のは飛行機だったかな。あの光った尻尾みたいなのは、あれは飛行機雲なんだね』なんて話をしていたんですが、そのときお互いに話に出てきたのは、こういう物でも普通に空飛ぶ円盤と





いわれる物の一種になる場合があるんだらうねと話し合っていたのです。その飛行機雲といわれる尻尾が割合短かったのですが、もっと短い尻尾しかできないときだってあると思うんです。それがすつと飛行機といっしょに飛んで行けば、そうだというふうにいわれる場合があるだらうと思うんです。『こういう物が空飛ぶ円盤といわれる場合があるんだらうね』なんて話しておりました。

——そうしますと、それは円盤型に見えたのではなくて——？

ええ、それは円盤型に見えたのではなくて、そういう短いスジに見えたのです。始めは垂直の短いスジですけど、あとはこういうふう

に広がってゆくときには水平のスジになったんです。そしてそれが光っているんです。地平線の下から太陽の光を受けて——。

——音は聞こえませんでしたか？

遠くですから、飛行機の機体も見えないくらいで、尻尾、つまり飛行機雲だけが見えるような状態でした。

——ジェット機のとに出る飛行機雲のような物ですか？

そうですね。しかしそれが長い飛行機雲にならないで、ごく短くしか見えなかったのです。

——短く？ はあ、そうしますと、あとにいつまでも飛行機雲が残るという現象ではないのですか？

ええ、あれではないんです。もつと短いのです。あとに飛行機雲が残るけれどもすぐ消えるという状態だったんですね。

——よく円盤の現象であとに白い細長い雲みないなものが出るんですが、それが奇妙なことに同じ長さを保ちながらずつとくっついてゆくという現象がありますが、しかもそれが短くなったりする現象もあります。

ああ、そういうことがあるのですか。

——それ以外に円盤らしき物をごらんになったことがありますか？

「ありません。円盤といえば、夜なんかによくあるんだけれども、広告なんかでよくやる照空灯というのがありますね。空を照らす電灯ですが、広告でやっているんだと思うんだけれど、

ど、たまたま空に雲があるとそこへあたって、それこそ円盤の形に光ることがありますがね。

そんな物は見たことがありますよ。これは原因が明瞭で、空気がにごっているから光のスジだつて見えているし、そして雲の底にそれがあたってドーナツ型の円盤に見えて、それが動く円盤型の光も動くということになります。そんな物なら見たことはあります（笑う）。これは原因がきわめて明瞭です。何の疑う余地もありません。

### 誤認例も多い

ですけれど、そんな物でもよく知らない人は空飛ぶ円盤だという人があると思います。私は未確認飛行物体というものについてはいろいろな場合があると思うんです。見た人が原因がわからないために、実にいろいろな原因の物が空飛ぶ円盤だといって報告されたり記録されたりしている例が沢山あるんだと思います。

——誤認例がずいぶん沢山あると思われるのですが円盤の写真も沢山撮影されていますが、今日は資料を持って来なかったのですが、どう見ても地球の確認された物でないという物が写される例があります。そこでお尋ねしたいのは、写真に撮影されるという例からみますとやはりUFOが存在するという線が強くなってきましたが、存在するのでしょうか、先生は科学者として、特に気象学的にどういうふうにお考えです



か？

私は円盤が存在するということをあたかもらきめておいて、それをどう思うかと聞かれるのが非常に困るんで、円盤は存在するかもしれないけれども、その実例の起こったときの条件はこういうことであつたというようなその条件をくわしく聞かないことには、始めから空飛ぶ円盤が実在する場合があるんだ、さてそれをどう思うかと聞かれても私には何もご返事することはできませんね（笑う）。そしてそれが確認された物と誤認された物というふうにいわなくとも、誤認している場合があるのだろうと思うんです。大事なことはやはりいちいちの実例について、円盤目撃が起こったときがどういう時であつたかということにくわしく調べておくということです。そして専門家について、これはどういう場合だつたのだろうかということを探ねることが大事な点ではないかと思ひます。

— UFO に関する書物をお読みになりましたか？

私は UFO を主題にした書物が何冊あるということは聞いていますが、読んだことはありません。ただ一般の科学雑誌などときどき出る UFO 記事をひろい読みしたことはありますが、一冊の本をまとまって読んだことはありません。私の考えていることは、いわゆる空飛ぶ円盤という物にはいろいろな場合があるようだなというふうには考えていますがね。そして多くの物は従来わかつていることで説明のつく

物がかなりあるんじゃないかと思ひます。ただそれを見たというときの条件がくわしく記録してないために、そういう説明がつけられていないけれども、そういうことがくわしく見てあれば、これはこういう物だと、割合何でもない、ごく普通に起こっている現象として説明のつく物がかなり多いんじゃないかと思ひます。たとえばさつきちよつとお話したような照空灯のあかりが雲の底にあたつて白く光るというようなことですね。あんな物だつて見そこなえば、それこそ空飛ぶ円盤ですからね。動くのを見れば円盤が空を飛んでいるように見えるでしょうね

他の惑星にも生物がいる？

— 地球以外の惑星に進歩した人類が住んでいるとお考えになりますか？

（笑いながら）それは空飛ぶ円盤とはだいぶ話が違ふじゃありませんか。

— 一説によりますと、円盤というのは別な惑星から来る特殊な宇宙船ではないかといわれているのですが、そのために別な惑星に人間が存在するといふ一つの推測が起こつてくるわけですか。

惑星とは水星、金星、火星、木星というような星でしょう。それらは表面の条件というのが大体に見当がついていて、生物の成育には適さないというふうに考えられているんじゃないのですか、よく知らないけど——。だから知能の

すぐれた生物が住んでいるとは思えないんじゃないですか。

— この太陽系以外に無数の太陽系や惑星があると考えられますが、そういう所へ行きますと……。

— そういう物のなかにはたまたま生物が育ちやすいような条件があるかもしれないね。

— そうしますと、少なくともこの銀河系内の人間の住む惑星は地球だけではなく、まだほかにも存在の可能性があると考えられますか。

— そうなつたらそれは人間であるかどうかわかりませんよ。生物といつていいかどうか、そういうものが住み得るような所はあるかもしれないね。数が多いことですから。それにしたところで、ちょうど地球と同じような条件で同じような人間が今いるというか、あるいはそこからある時間がたつて地球に光がとどいているんだけれども、そのとどく前の過去に人間と同じようなものがいたかどうかというのはどうでしょうかねえ。そういうことはあまり関心がありませんし、調べたこともありません。

不思議な現象を追求すること

— 今後の地球の科学と精神文明のあり方について、ご意見をおうかがいしたいと存じます。先日先生がラジオで放送されたときに、宇宙には神秘的な事が多いので、すべてを否定してかかることはよくないという意味のことをお話し



やいましたですね。

あれは寺田寅彦先生の随筆の中から引用したのです。私がいいなかったことは、従来の物理学ですべての物が説明できるんだというような簡単な考え方ではないということなんです。まだまだ不思議だと思われる事が沢山あるんだけど、それをこまかく、くわしく記録しておくということ、それをよく調べることで、そうすることによって学問の方が進歩してゆくし、わからないことがわかってくるので、不思議だと思われることを簡単に割り切ってあっさり片づける人があるけれども、そういう立場はいけないということなんです。

—— あっさり片づけるのはかえって非科学的で

ございましたらね？

ええ、そう思います。

—— ほんとうに科学的態度というのはむしろ不思議な事を少しでも解明しようということでしょう？

そう、そう。そういう立場が大事だと思いますが、なかなかむづかしいですね。

—— 結論としまして、いわゆるUFOの存在について先生は基本的には肯定的ですか、否定的ですか？ アメリカ空軍には公式のUFO調査機関がありましたし、国々の政府にも公式の研究機関があるように聞いていますが、政府みずから解明しようという時代になりましたからには何かあるんじゃないかというふうに考えられ

るんですが——。否定論者としてはハーバード大学のメンゼル博士とか米空軍の依頼を受けて調査したコロラド大学のコンドン博士というような方がおられますが、有名人でUFOの存在を肯定される方では冥王星を発見されたトンボー博士がおられます。トンボー博士はみずからある夜UFOを目撃されたそうです。その他の有名人でもかなり円盤の存在を信じておられる方があります。先生はいかがですか？

(笑いながら) はつきりとはいえないですね。円盤の存在については肯定的でも否定的でもありません。

## 大辻清司

写真家

# 円盤は夢をもたせてくれる

—— 円盤についてひとつ何か——。

ぼくは特別にUFO問題を調べたわけではありません。なんでこうなっちゃったかわからないんですけどね(笑う)。

—— 円盤をごらんになったことがありますか。

見たいと思っているんですが、見ようと思っても見られないものらしいですね(笑う)。  
以前は円盤問題に興味を持っていた友人が沢山

ありましたが、その人たちはいつのまにか関心が薄れてしまいました。円盤を見るためにはどうすればよいかということをずいぶん考えたこともありましたよ。

円盤じゃなかったらいいんですけど、十五年ぐらい前のことと思いますが、両国橋の一つ上の国技館のそばの何とかいう橋ですが、その橋を車で通りかきましたら、えらく輝いてい

る、星にしては大きな物があって、車をとめてしばらく見ていました。あまり輝きすぎるんで、もしかしたらというわけで友人たちに連絡したけれどもつかまりませんでした。雲が輝くくらいに光っているんです。そんなに輝く物を見たことがなかったものですから、一時間近く見ていたんですが、ちっとも動かず、あとからいろいろ問い合わせてみましたが、金沢で見た

という友人が一人いました。金沢でもえらく輝いていたんだそうです。あれは金星だったよとそれがいうんです。それが唯一の、あわや円盤かと思われた体験です。

それ以来、もしかしたらと思っているんですが、なかなか円盤を見る機会がありませんですね。

## 自分で見ないと確信が持てない

いろいろ円盤をごろんになった方々の話を聞いても、やっぱり自分で見ない限り確信が持てないというところがありますね。もしいろいろと書かれたり話されたりしている現象またはそれに近い物を見たら、本当に信じるだろうと思うんですけどね（笑う）。非常に素朴でしょうが、自分で体験しないと、実感として、または体でわかるというわけにはゆかないんですよ。そういう点で、どういふかな、不信心な方ですね、信仰的に……（笑う）。

## 立証されないとところに興味がある

——円盤に関する書物が、わりと出ています。何かお読みになりましたか。

ええ、昨日一応読んでおこうと思って、ここにこれだけあるんです（書棚にある五、六冊の円盤関係の図書を指す）。あと三冊ばかりアダムスキーの本があります。

——じゃ、もうかなりお読みになったわけですね。

いいえ、読みとばす程度です。

——それらの書物をお読みになりました、どんなふうにお考えになりました？

SFがなみはずれて好きなものですか、自然と関心が向くといえますか、そういうものの一環としてぼくの中に登場してきたんです。そしてぼくの中へのはいり方みたいなものは、円盤が立証されないということに興味があるわけなんです。まあ立証されているのかもしれないが、確定的に間違いないというふうになかなかゆかないところに大変興味があるんです。もしかすると、いづれ会見とか同乗とかいう場合もあり得ると思いますが、まだアダムスキーの体験記は信用できないというか、あのようには書いてはあっても、ホントかなというところがあるんです。もしホントとして、あれが客観的に確かめられたものだったら信じてもいいと思います。私にとってはそこまでゆかないんです。もしあれがホントとして一般に信じられるものだったら、こんな程度の扱いですんではいけないだろうという気がするんですよ。地球以外の天体に知性体がいることは、われわれにとってもこんな大変なことではないだろうと思うんです。それが今の状態でほっておかれているというのは、まだあやふやなんだろうという気がしますね。ぼく自身でそれを確かめるわけにはゆかないし、他人が確かめたことがど

れぐらい確かなのかと思えば、今の程度なら断定するところまでいっていないような気がするんです。

## しかし信じたい

だけど信じようといえますか（笑う）、賭けようといえますか、そんなものは幻想で虚構だとして切り捨てるんじゃないかと、まだまだ賭けるぞ、円盤存在の方に賭けるぞという、そんな気持ちでいるんですがね。話としておもしろいというよりも、そういうことでおもしろいんです。おもしろいというと、研究されている方には申訳ないいい方かもしれませんがね。円盤だけにムキになって向かい合おうという気持ちもないもんですからね。その点、打ち込んでいないマニアというか野次馬の域を出ていないと思っています。

## 確信の持てる写真がほしい

——先生は写真の専門家でいらっしゃいます。いろいろと円盤の写真が撮られているわけなんですけれど、なかにはいいかがわしいものもあると思います。ホンモノもあると思います。そういう写真類をどんなふうにお考えになりますか。

目につく限りの円盤写真はよく見たつもりなんです。が、まったくいいかがわしいというのは





検討もしないで切り捨てて非常にリアルで確からしいという写真を見ていて、これは実在する物を撮ったかと検討してゆくと、トリックとして作れば作れるという気はするんです。作れば作れる写真だと思っちゃうんですから、それをも越えていやおうなく突きつけられるような証拠写真といえますか、そんな写真にぶつからないもんですから、状況がむつかしいからそんな写真は撮りにくいだろうということはよくわかるんですけど、それでももう少しいやおうなく突きつけられるような写真があれば、相当にぼくも確信できるだろうと思うんですけどね。そういう写真があったら見たいと思いますね。

## もつと研究すればよかった

——アダムスキの撮った写真類は、真疑のほどは別問題としまして、相当に知られていますか、これについてはどのようにお考えになりますか。

（葉巻型母船の写真を見ながら）そうですね、これは作り物だと断定はできませんし、だからといって、ぎりぎりの可能性として真実だというふうにもいえませんね。相当に明瞭だし、写真の写り工合として、もし作り物だとすれば、ここまでやるというのは相当に技術的に大変だろうと思いますね。だからもしこれをやる人がいたら大変な技術をお持ちの方だろうと思います。

とにかくもつと精密に詳細に時間をかけて研究していたら、ぼくの中にも否定できない、状況証拠にしても信じてゆく過程があったかもしれないんですけど、実をいうと、そこまでつきつめていないもんですからね、大変申し訳ないというか、一生懸命研究している方に対しては不勉強で、お話できる資格は持っていないと思いますね。まだその程度なんです。先になつたら円盤が実在するという確信を持つようになるかもしれないですね。そうすると今のぼくの関心というのもだいたいいい加減ですね（笑う）

——知名度の高い方で円盤に関心を持たれる方がかなり多いように聞いていますが、円盤の存在について肯定または否定的意見をはっきりお

っしゃる方が少ないんです。信ずるか信じないかははっきりおっしゃるほうが統計的にもいいわけですが——。

断定的に結論を出すのは個人の態度ですからそれはいいんですけど、信じて存在すると仮定するかしないかで見方がずいぶん違うだろうと思いますね。科学の方法が一種の仮定から始まらなくちゃならないのと同じで、その仮定を立てるか立てないかでずいぶん違うだろうと思います。そういう意味では大変希薄なんです、ぼくは円盤の存在の方に一応賭けているんです。迎えるべきものに対しては一応迎えるぞというふうな気持はあるんですが、ただどっちかという点、その辺は少しきびしくデータを見すぎて点があるかもしれません。

## 地球以外に知性体はあり得る

——円盤は地球以外の惑星から来るとお考えですか。

あり得ないとはつきりはいえないと思うんです。UFOがほかの天体から来る物だとすれば、それはあり得ることだろう、ほかの天体に知性体がいることも当然あり得ることだし、それが地球に知性体を見つけて偵察に来ることも十分あり得ることだし、それに人類が同じ能力をそなえたらやはりそうするだろうと考えれば、あり得ることだと思うんです。読んでいる書物の中で見たんですが、ずいぶん昔から地球

を訪問したという遺跡があちこち残っているようです。南米などに……。空からしか見えない記号が地上に残されているらしいのですが、あれなんかもしかして人類の仕事でないと思えば、地球を訪れた知性体があつたはずだと思わざるを得ないんですけど、それが円盤と関係があるのかどうか、結びつけることはよくにはできませんですけどね、そんな事を綜合してゆけば確信が持てるようになると思うんです。

## わからない物の研究

ESP（超感覚的知覚力。テレパシー、透視など）に関する正規の研究機関を日本ではあまり聞かないんですけど、いつでしたか東北大に講座ができるのか研究室ができるのか、何かそんな話を聞いたことがあります、その後どうなったか聞いてないんですけどね。それができると聞いたとき、ああやっとな日本でもかと思つたんですが、それをいつの間にか聞かなくなつたし、存在するかしないかわからない物についてつきつめてゆこうとするのはむづかしいものかなあ、学者っていうのはそういうふうな夢をいだかないものなんかなあと思つちゃうんですけどね。

円盤にしてもそれと同じように、なにかこうはつきりまな板に上がる形にならないと、やらないものかなと思つちゃうんですよ。わからないからこそやる必要があると思うんですけど

ね。ぼくはわからない物体だからこそ関心を持つていっている程度なんですけど、とにかくわからないからおもしろいんだということなんです。

——ナゾであり、神秘的であるところがおもしろいとおっしゃるわけですね。

ええ、そうですね、どういったらいいかな、神秘の形としてそのまま存在しているときは、それはある事だろうと思うんですよ。ぼくはまだそこまでも行っていないということですね。神秘として存在する物ならまだ多くの人が関心を示すでしょうね。

## 円盤人は大変なオトナ？

——別な惑星にすばらしい発達をとげた人類がいるかもしれないということを全然否定できないんですか。

人類というと、地球で発生した人類の先祖がどこかにいて、それが帰郷しているという考え方はできないんですけど、別種の、つまり地球生まれ以外の生物が訪れているという可能性だったら否定しようがないだろうと思います。

確率的にいつて宇宙にはそんなものがあるだろうということが数字で示されていますが、非常に素朴な考え方ですけれども、われわれ人間が存在するなら同じようなものがどこかにいるだろうということは否定できないと思いますね。

ただそれは地球生まれではないだろうという気が

がします。

——ただ円盤を持つてそれに乗って地球を訪問している知性体があるとすれば、それは大変な知性の持ち主だという気がしますね。科学技術においてすぐれているというよりもオトナだという気がしますね。精神的に……。

——テレパシーなどがすぐく発達していると考えられますが、こういうこともあり得ると思われませんか。

ええ、当然あり得ると思います。ただたびたびいうことですが、ぼくの中ではつきりと断定するほどの資料にぶつからないために断定できないという段階にあるわけでした、可能性としてはもう当然あり得ることだろうと思つていますね。それがあり得たとき、その知性体は大変なオトナだなと思うんです。地球人が幼時期にあるとすれば彼らはオトナかもしれません。

## 地球人の幼さを気づかせる？

それと、気になるのは円盤の存在から地球人の幼稚さを逆に思い知らされるということをつも感じるんですがね。たとえば、同じ種から発生した種族の違いといいますか、人種差別の問題なども結局テリトリーの問題が根幹にあると思うんですけど、生物が生きて伸びる原始的な本能に導かれてしか自分たちを主張していないというような、その辺が大変に幼いというふうに考えているんですけどね。



ですから他の天体のすばらしいオトナぶりを見たとき、われわれが自分の幼さに気づくならば、それが一番円盤の役に立つ点だろうと思います。外部に何かがないと気づかないということもいろいろありますからね。比較できるものがあって自分の位置を知るという意味で円盤がそのように役に立てば、人間がすばらしい事につながっていると思います。

### 円盤はわれわれに夢を与える

今の段階で地球人が他の天体を訪問するとすれば、どのように行動はできないだろうと思うんですよ。どういうのかな、他人の領域をおかしてゆくことにためらいがないというか、そういうふうな形でしか行動できないにちがいないと思うんです。その点、円盤の行動というのは

われわれ地球人に対してふさわしい行動のあり方だと思ってるんです。そういうことで大変な知性を感じるわけです。

——そうしますと円盤問題は私たちに夢といいますか理想主義的なものといえますか、そんなものを与えてくれる要素が多分にあるということになりますね。

ええ、そう思いますね。地球人類は行先が見えてきたという思いが大変強いんですが、行き詰まりというんですかね、いくら科学技術が発達したところで、そっちの方が先行しすぎたために、ぼくらが自滅するんじゃないかという思いが強いんですが、そんなときにすばらしい知性体があるというか、目標が見えてくると、反省の資料というか、そんな意味でほっとするものがあると思うんですよ。

そういう円盤の役立ち方で考えてゆきます

と、もう一つの役立ち方としては、よく小説なんかで書かれていますね、たとえばウェルズの火星人が攻めて来る小説がありますね。つまり外敵として現われて地球人が結束するとか、そういう役立ち方のパターンというのが昔からありますが、今の円盤というのは外敵じゃなくてもつとクールな、まさに知的な現われ方で、それが人類をよい結束の仕方に向かわせるならば、これは大変すばらしいだろうと思います。そういう包容性というのは見のがせない気がしますね。

物事をロマンチックにとらえることは、ぼくは決してわるいとは思わないんですが、確実な事しか取り上げないというのも何か精神生活が充足されると思えないし、実生活全体の中でも精神的な部分が重要だろうと思うんですがね。社会になにか欠けたものがありますね。

作家  
小松左京

## 不思議な現象に関心を持とう

——今日は先生に円盤問題についてお話をうかがいたいと思うのですが……

円盤問題というのは大変な問題になって、錯覚であるとか天文学的現象の誤認であるとか、故意のウソであるとか、幻覚だとかいわれ

ているんですけれど、それでもつきつめてゆくと九十何パーセントは誤認であつても最後には十パーセント前後どうしても誤認とも錯覚とも考えられないものが残つて、しかもそれがわれわれの知っている範囲の科学では説明のつかない現象であるということになりますし、あるいは説明できないことはないけれどもかなりいくつかのきわめて大胆な仮定を設けないことにはだめだということになります。

## 自然界はだれでも観測できる

超常現象というのはいろいろな人が神秘的とか超自然的な事だと解釈しているようですが、私はこう考えているんです。科学というのは大変経済的な現象をもとにして、更にわれわれの見ている一般現象の中で最も普遍的経済的なものは何かというわけで追いかけてゆくわけですね。たとえば重力というものは大体に宇宙空間のどこにもある。地球にも重力の法則というものがありますから、地球上ではいつでもどこでもそれが観測できるし存在もしているわけです。それからいわゆる相対性理論であるとか素粒子であるとか——素粒子があると必ずそこにフィールド（場）ができています。そういうことを考えますと、これは人間が存在しようがすまいが数億年前の宇宙のどこにも存在している現象です。

それで、そういう大変経済的な現象というのは地球上でどこでだれがやってもいつでも観測できるし、地球をちょっと離れた宇宙空間でも観測できます。つまりいつでも存在している大変経済的なものなんです。しかもその経済的なものというのは、ある特定の観測手段でもって特定の手続きをやつていれば、いつでもどこでだれがやっても観測できるものなんです。それで自然科学というものはそれをもとにしてできあがってくるわけです。

## 自然史はあやしくなる

ところが物理学というのはその点が大変しつかりしていて、一応普遍科学と呼ばれています。生命現象などは大体物理現象としてつきつめられてきているわけです。それに対して一つのナチュラル・ヒストリー（自然史）ということになりますと、これが少しあやしくなってきました。自然史つまり歴史というのはたしかに自然史の一般法則が出るわけです。たとえば宇宙空間に物質があつて集まっている。これがある大きさになると内部が重力のために原子核反応を起こし始めて星になってゆく。融合反応を起こして星になる。太陽みたいに恒星になってゆく。そうしてそのまわりに渦ができて、その渦のふちの所に惑星ができてきます。こういうような自然の一般法則というのは宇宙空間の大体どこでも起こっているといえるんです。

## 生命発生の惑星を見のがすな

ところができあがつた惑星のどこでも生命が発生するかというと、ご存知のように太陽系の九個の惑星中、地球一個しか確認されていない。少なくともこんな複雑なものを作っているのは地球しかない。あとの惑星中、大体金星、水星はわかりませんが、水星はおそらくだめでしょうし、火星の観測にしてもほとんどわれわ

れのような文化は存在しない、こんな豊かな生命はないし、木星も大気の様子ではそんなに複雑な生命ができるはずはないといわれています。そうしますと、ここで宇宙空間のどこにも恒星ができて、恒星ができるとそのまわりに惑星ができるとしますと、その惑星のどれにも生命が発生するとは限らないということですね。

しかし恒星が一千個あるとすると、その内の一つがまわりにある惑星のなかに地球ぐらいの確率で生命が発生するでしょう。そういうことがいえても、もしかりに一千個あるとして、その内の九百個を観察するとします。するとその中のどこにもないということになれば、九百個の統計でもって宇宙にある惑星には生命が発生しないといつてしまえば、これはちょっとおかしいことになります。

たとえば、われわれは生命発生の長い累積と経験を持っていますから、生命というのは宇宙では最も普遍的だろうといえるんですけれど、水を元にした有機生命体という形のものよりも異なる意識体というものを考えてみることにして、それが太陽系の内の五個の惑星を観測してみます。するとその五個には全然生命がない。そうすると彼らはこの太陽系には全然生命が存在しないと結論づけるかもしれません。

## 特異例に注意すること



そういうふうに自然史になりますと、宇宙の一般法則の積み上げの中からは解答が得られませんが。直接的累積的な大変特異例というものがあつて、九個の惑星の中にたった一つだけは生命が発生している星があるんだと、しかもそれがこんなふうに進化をとげているという大変特異な例を観測しないことには何ともいえないということになります。

ですから物理学、化学あたりまでは大変普遍的な事がいえるんだけど、自然史になつてくるとそのなかに大変強いセレクションが働きます。

そうなりますと、これは円盤問題や超常現象に近いんじゃないかと思われれます。われわれは変てこな現象などをきちんと観測して記録するとよい。というのは記録が残っているのはこの四、五千年にすぎません。しかも正確な科学的観測が始まったのはこの二世紀ぐらいにすぎま

せん。その二百年のあいだにごくまれにしか現れない現象があると思います。すると観測網にひつかかつてこないわけです。たとえば二百年のあいだに一回か二回しか起こらなかった現象があると思います。しかもそれが特異現象であると思います。歴史の中で記録されている事実を自然科学というフィルターにかければ、これは昔の人の妄想だろうとか伝説だろうとかいって、フィルターにかけて捨ててしまったものがずいぶんあるわけです。

これは何度もあつたことで、たとえば例のホメーロスの書いた「オデッセー」のトロイ戦役の話はギリシャ人が考えた完全なフィクションだと思われていたんですね。そして十九世紀の科学的史学は、あんなものを古代人の伝説だとして捨ててしまったんです。ところがホメーロスという人を当時の歴史学会では一種の実在する歴史的人物として検討することにしたので



す。シュリーマンだけなら何かのニオイでもつてどうやらあそこら辺にあるのじゃないかと、ほんとにあてずっぽうでパツとやってみて、あれが（トロイの遺跡が）出て来て、出て来ると初めてあの伝説というのは非常にがっちりした歴史的事実

をふまえた実際の現象だったことがわかったわけですね。

### 不思議な超常現象は沢山ある

以上は歴史の場合なんですけれども、そういうふうに歴史がからんできますと、われわれにはまだ解明されない現象が沢山あるだろうと思うんです。円盤でも現在のところ——円盤現象というのはそれがよその星の宇宙船であるかどうかは知りませんが——どうも今のところあまりにファンタスティックで、しかも科学者が円盤の出で来たところを観察して、あるいはつかまえて、その動き方を見て、これはこううだといえるというのならよいのですが、いっつこで出て来るかわからないし、だれが見るかわからないというわけですが、それが私は定常現象に対して超常現象だと思うんです。

そういう物はずいぶんあるんです。たとえばポルタガイスト現象というのが世界中であちこちにあります。ポルタガイストというのは大変おかしい現象で、いろんな物が家の中でほんぽん飛び上がったり、コップが飛んだりするという記録が沢山ありますし、デューク大学にはそんな事を研究する機関がありまして、ちゃんと観測機械を持ち込んで調べるんですけど、別に重力変異などはない。それにもかかわらず、しっかりした観測者と警官とジャーナリストの前でそういう現象が起こつて、ジャーナリ

ストがそれを記録して新聞に載ったりします。日本でもそういう例がありましたかね。

そういう現象があっても説明できないし、これから大がかりに研究しようとする、突然その現象がバツとやんで、この次どこで起こるかわからない。そういう変てこな現象がいくつかあるわけですよ。しかし直接に産業の発展に役立たない事に多くの金をかけて研究するわけにはゆかない。そういうわけで大変奇妙な現象で明るみに出ないものが沢山あるにちがいないでしょう。

## 超常現象を無視してはいけない

ただ基本的な態度として、そういう現象が大変まれな確率をもって実在している、実在しているとは考えられない、または実在するのではないかと思われるような物に対して、科学があたまから否定してしまわないで、たとえば何パーセントかの関心を振り向けるとか、基本的な態度として、あるかもしれないぐらいの許容度を持つべきだというのが私の超常現象に対する考え方なんです。

## しかしフアナティックになるな

そうした不思議な現象というのはどういうわけか知りませんが、よく人間をトリコにしやすいということなんです。それはかまわないと思

うんですが、フアナティック(狂信的)になってしまふことがあるんです。昔の宗教によく似ているんですが、狂気じみたやり方で何もかも説明するという。まず神というものの存在はだれも説明できないのに、存在することを認めろという。その前提を認めてしまふと、あとは何もかも説明できるという。認めないやつはブツ殺すという。そういうやり方が出てくるというのは大変困るんです。そういうフアナティズムにおちいったら、逆にわれわれの知識とか認識の型を豊かにしたり、人間の可能性や自然現象に対する認識を一般的に豊かにするコースからはずれてくるわけです。

## ていねいな関心を払うこと

そのところは頑張つて、ふんばらなければいけないと思うんです。つまり決して完全に否定はしないで、そういった現象に強い関心をそそいで、いつかこの不思議な現象が解明できるかもしれない、そうするとわれわれの知っている世界のそこが大きくなってくるんだという期待を持つて、それに対していねいな関心を払うことが大切だと思うんです。

そんな事を信じるやつは間違いで、あんな者は相手にしないとか——実際には狂った人が沢山いますから気をつけなければいけません——、なかには大変まじめに実際に見て正直にやっている人もいますし、それにたしかな観

測記録もあるでしょうから、そういうこともひっくるめて気違い扱いしてしまつてはだめだろうと思うんです。

## 仮説を無視できない

おもしろいもので、私は最近「日本沈没」というのを書いたんですけど、これを書く動機の一つになったのは大陸移動説というのがありまして、今から半世紀以上前の一九一五年から二十年にかけて例のヴェゲナーという学者がとなえたんですが、これは大変おもしろいフアナティックな仮説で、それによればどうもとは南北両アメリカ大陸とヨーロッパとアフリカの西部海岸がくっついていていたんじゃないかというんです。これは植物分布、生物分布だけを類推していったわけです。

大変おもしろい仮説で、この説を受け入れるといういろいろな事をすすめてゆけそうなんです。一方では矛盾も出て来て、なぜ動いたかということがわからない。だからこんなものは地球物理学の門外漢がいった説で、おもしろいけれども一つのフアンタジーにすぎないというわけで、すたれていたんです。

ところが一九五〇年代になって地球の古い地磁気を精密に観測してみると、どうも大陸が動いたらしいということがはつきりしてきたわけです。そこで動いた原動力は何かというわけでマントル対流説が出てくると、大変微細な現象



がいろいろ統合的に解釈できるようになる。これがまた最近研究されるとプレート理論というのが出て来て、これがうまく説明できるようになる。こういうわけで、少なくとも大陸が動いたということはほとんどの学者が認めるようになったわけです。

要するに仮説が出てから、それがすたれて、しかもそのカンで出した仮説が果たしてそのとおりだったということが証明できるまで、いろんな事実の積み重ねがあつて、半世紀かかっています。

きちんとした広い観測が必要

ですから、われわれもあまりにファンタスティックだからといって、あきらめる必要はないわけで、特に地球といういつでもどこでも観測できる物をもとにして、しかもわれわれの観測

年代のなかでは大変一部で安定しているものと、その安定している物に対してラビッドに動いている物とがあつて、そのコントラストが非常にはっきりするものなんです。それでたとえばUFO現象というのは存在するものだろうと思うんです。それこそアマチュアが研究するよりほかに仕方がないでしょうが、アマチュアもフアナティックになることなく、できるだけきちんとした広い観測を重ねてゆくことですね。

——先生は実際にUFOをごらんになったことがありますか。

ないんです。ただブラジルへ行っているときに——ブラジルは円盤出現がよくあるんですが——リオのサッカー競技場の上空に円盤が出てきたんです。試合をやっている最中です。そのときは試合を中止して数万人の観客が円盤を見ていたそうですが、そういう例がありました。その円盤に宇宙人が乗っていたと私が断定

するには証拠が少なすぎる。しかし資料からみてその現象が存在したことは間違いありません

## 正統科学と限界科学との融合

——先生は円盤問題を全然別な角度から見ているわけですね。

そういうふうな限界科学の領域というものを付け加えることによって、それはまだ正統科学にはいつてこないのは当然であるとしても、正統派が限界科学を目のかたきにして異端としてつぶしたりすると工合がわるい。といって限界科学が自分を認めないからというので正統派をつるし上げるようなバカなことをしたら氣違いじみた話です。とにかく両方が大きな柔軟性を持つべきだというのが私の持論です。

横尾忠則  
イラストレーター

# 円盤は実在する。私は何度も見た

——先生は空飛ぶ円盤に大変な関心をお持ちのようにお聞きしておりますが、今までに円盤を目撃されましたか体験をひとつ。

そうですね。円盤に関心を持ち始めたのは

二年ほど前です。その動機は睡眠中の夢の中に円盤が現われてきたからです。それまで円盤に対して興味がなかったのにどうして夢の中に円盤がよく現われてくるのだらうというので、そ

れで円盤の本を読み出したわけです。そうすると夢の中に現われる円盤の運動や形が本に書いてあるのとほとんどそっくりなんです。何種類かの円盤を夢の中で見るんですが、それがそれ

どれの飛行ぶりを示すんです。そこでひとつ素人なりに円盤問題をかじってみようかなということから関心がわき起こってきたわけです。

## 最初に見た円盤

子供のころある夜、一度非常に不可解な光る物体を見たことがあるんです。それが潜在的にずっと気になっていました。中学三年生ぐらいのときです。そのうち、どうもこれがいわゆる空飛ぶ円盤だなど思うようになってきたわけです。

そのときの状態をくわしく話しますと、夜の八時ごろだったでしょうか、冬か夏かは忘れましたが、ぼくの住んでいた兵庫県の西脇という町の中心に童子山という海拔五十メートルぐらいの丘みたいな山があるんです。その周辺に町があって、童子山のちよつと下を川が流れています。そのころ夜学の英語を習いに行っていて、自転車に乗ってその川の所へさしかかったんです。友達が五、六人いました。そのときだったかよく思い出ませんが、その童子山の上空に光っている物体に気がついたんです。

## 物体の不思議な運動

そこであれは何だろうということになったんです。最初はみんなが火の玉かなといい出しましたが、ところが、その光が非常にメカニッ

クな光であることと、火の玉のような感じもしない。ぼくは一瞬見たときに花火か何かが今まさに炸裂する瞬間のとまった状態かなと思っただんですが、その時間が非常に長いわけです。だから花火じゃないこともわかったんです。光はオレンジ色で、物体はかなり大きく見えましたね。

それでみんなは自転車をとめて、ずいぶんしばらくながめていました。そうするといきなり左の方にその物体がスーッと走り出したんです。高さは夜でよくわからなかったんですが、百メートル以上でしょうか、大きさは月の半分ぐらいです。ただ先がパツと輝いていただけです。どっちかというともん丸でもなかったですね。

それが音もなくいきなり横にスーッと空を切るように三十メートルぐらい直線に動いたんですが、そのとき物体のあとへ光の尾ができました。その尾は物体が次に停止したときに物体に吸収されるようにして消えてしまいました。

— その尾は眼の残像ではなくて、実際に物体の尾だったのですか。

そうです。実際に尾だったと思います。その尾が物体に吸収されると一段パツと明るくなったような感じでした。するとその物体がまたスーッと移動したんです。同じような間隔で——。結局三度移動しました。

みんなはア然として口もきけない状態で、果然と見ていました。あんな田舎の町は夜八時か

九時になると真暗になりますから、都会と違って見なれている物を誤認するはずはない。三回移動して物体はいったんフワッと明るくなつて、そのまま消滅してしまいました。あとはそれぎりです。

## 円盤の研究を始める

そのことがあってからのち、自分一人になってしばらく目をつむっていたりしますと、そのときの光景が頭の中に描かれて、そのことが気になるような状態でしたが、やがて忘れてそのままになっていたんです。

そして二年前から円盤に興味を持ち始めてそれと同じような運動をする円盤の記事などが本に出てくるものですから、もしかしたらあの物体は円盤じゃなかったかなと思うようになったわけです。

— それ以後、別に円盤をごろんになりましたか。

円盤に興味を持ち始めてからは毎日空を見上げたり、天体望遠鏡を買って月面を観測したりしているわけですが、円盤らしい物はないんです。ときどきそれらしき物を瞬間的に夜空や昼の空に見るんですが、自分が素人なりに円盤の研究をしているために、そう簡単に円盤だと断定できず、逆に否定しちゃうんですよ。何を見てもあれは絶対に円盤じゃないと非常に否定的になるんです。



## 最近もUFOを見た

ところがどうしても否定できないような現象が最近起こったんです。五月の十五日です。これは家の子供の誕生日ですからよくおぼえてるんですがね。高速道路を用賀から乗って六本木へ行く予定だったんですが、三軒茶屋の手前だったか、その辺の場所をよく知らないんですが、とにかく出版社のハイヤーに乗っていて、ぼくの横に編集者がいて、前の席には運転手がいきました。編集者はしきりに食べ物のお話をしていました。

ぼくはボーッととしてその話を聞きながらフロントガラス越しに前方を見ていたんです。すると飛行機が羽田の方へ飛んで行くのが見えるんですね。その飛行機を何となく見ていて、円盤のことなどはまったく考えていなかったんです。するとしばらくして海側の方から陸地にむかって楕円形の白ともグレーともつかない大きな物体がすーっとはいつてきたんです。それまただボーッと見ていたんです。

ところがおやつと思ったのは、それが見なれた形の物じゃないことなんです。飛行機じゃないですね。翼が全然ないんです。ヘリコプターにしては上部に回転翼がないし、尾のシッポもない。そこでハッとしたわけです。えらい物が飛んできたと思いました。遠い距離だったから見間違ふこともあるでしょうが、かなり近いんです。だからヘリか飛行機かの区別はつくはずで

す。それでスーッとぼくは引き込まれるようになったんですが、とっさのことで隣りの人にも声がかけれない。とにかく自分がまずそれを確認してから、その結果それが円盤だということになれば隣りの編集者にいおうと思ったんです。

するとその物体がフロントガラスの真中から横へ少し行った所で、一瞬直角にむこうへ移動しようとするかたちでグッと動いたような感じでした。スピードは遅いんです。すると直角に動いたとたんにちよつと光ったようで、それから消えてしまいました。瞬間的に消滅したわけです。あとはもう全然何も見えません。かなり大きな物体がなくなっちゃいましたから、ぼくはびっくりしてしまいました。それですぐ運転手さんに、今前方に変な物体を見ましたかと聞いたら、ハンドルをにぎっていたから何も見えないう。編集者に『見た?』と聞いたら、『いいえ』と答えて『円盤だろう』と彼がいうんですよ。いとも簡単にね(笑う)。全然話にならないわけです。三人いながら目撃者がぼく一人だったわけで、まったく残念でした。目撃時間は六秒か七秒ぐらいでしょうね。以上が最近の経験です。でも一人だけで見るというのは非常に不幸ですね。だれか親しくない目撃者がいっしょにいた方がいいですね。

## 円盤は実在する

——円盤の本をかなりお読みになつていますが——

日本で発売されている円盤の本、あるいは円盤に関係のある本などは一応読んでいます。その他、失われた大陸に関する本や超古代というような事を扱った本などにも興味がありますね。

——その円盤関係の本をお読みになりました、ご感想をひとつ。

そうですね、一応ぼくは円盤は実在すると考えています。ぼくは円盤を見たから実在を信ずるというのではなくて、そんな体験を持つても持たなくても円盤の実在を信じています。

——円盤は別な惑星からくるものとお考えになりますか。

そうですね、二通りあるような気が最近してきたんですよ。別な惑星からくるということ、もう一つはアトランチス、ミュー大陸が一万数千年前に陥没していますが、そのとき大陸にいた人々が地球の内部に逃げたという考え方も持っているんです。地球の内部に空洞があって、そこに一つの世界を作っているのではないかとという地球空洞説です。それもぼくはある程度肯定しているんです。そこから円盤がくるという考え方です。その両方からくるのではないかと思うんです。

## 地球以外の惑星にも人間がいる!!

——地球以外の惑星に非常に進化した人類が存在する可能性はあると考ええますか。

それは可能性があると思います。だってこの銀河系内だけでも恒星が一千億個あって、生命を持つと思われる惑星が一千万個があると推定されていますから、地球と同じような星がいっぱいあると思いますね。ぼくはどの惑星にも人類がいるんじゃないかという気がするんですよ。

——金星とか火星とかにも？

ええ、月にも人間が住める可能性はあると思います。別の惑星からきたいわゆる宇宙人が月に基地を持つと考えられますね。

## 真相を知れば価値観が変わる

——そうしますと、これは地球の文明にとって大変な事だということになりますが、もしこの問題、つまり別な惑星の地球訪問説が世界的に認められるようになった場合、どういう影響があるとお考えですか。

アメリカのNASAなんかは地球の大気圏内に円盤がはいり込んで飛行しているという事実を知っているんじゃないかと思うんですが、ただそれでは何かの事情があって発表できないと思うんです。その事情というのは、もし真相を発表したら結局人類の長い過去の体験のなかで、これほどショッキングな事件はないですから、大きなパニック状態を起こすでしょ

う。そしてまず価値観が変わってしまうかもしれないですね。

しかしゲリラ的に世界各国で円盤研究グループができたり円盤目撃者が出て、それがアンダーグラウンド的に広がって、知らず知らずのうちに一般大衆が知ってゆくことも考えられますが、大体その方法しかないと思うんですよ。何月何日にワシントンの上空に円盤が六十機現われたというような事件はおおやけには発表できないですからね。だからアンダーグラウンド的にみんなが興味を持って知るという状態になるのを彼らは逆に計算しているんじゃないですかね。おおやけに発表する必要はないと考えているんじゃないでしょうか。

——つまりアメリカ政府なんかは非常に賢明なやり方をやっているというわけですね。

ええ、だからぼくは今の現状でいいんじゃないかという気がするんです。それと円盤が地球の周辺を飛んでいることにどんな意味があるかという問題ですが、これは今世紀またはわれわれ人類の歴史にとって最大の関心事じゃないかと思うんです。一番重要な事じゃないかなという考え方ですね。

そういうことを考えますと、われわれ個人の肉体を形成する一つの人間自身の問題にもなってくるわけですね。肉体の科学、心の科学などみたいなものにまで円盤が問題を投げかけているんじゃないかなと考えているんです。というのは、今のところしきりに円盤が現わ

れますが、それによる被害はほとんどないわけですね。円盤による被害のようなものは円盤関係の本に出ていますが、それは円盤側が好戦的に起こした事件ではなくて、地球人のミスや不注意によって起こった事故で、相手側は好戦的な殺意などは持っていないとぼくは考えているんです。だから円盤をこわがる必要は決してないと思うんです。

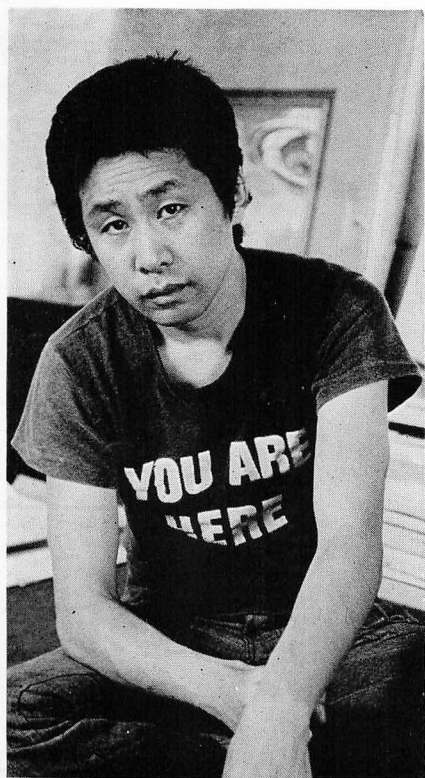
円盤がどこかの惑星からきていると仮定しますと、地球人の想像を絶した科学を駆使しているわけです。われわれの原動力といえればせいぜい電気ぐらいだったのですが、彼らはすでに地球の引力を遮断していて、そこまで科学が発達して、われわれの気がつかないエネルギーを応用しているわけですね。

そのことを考えますと、彼らの惑星のなかの政治・経済とか宗教の問題などはすべて解決されてしまったと思われるわけです。もし彼らの惑星のなかにまだ地球上で解決されないような問題があるとすれば、こんなにすごい科学を持っているからには、おそらく彼らの惑星は破壊してしまっていると思うんです。戦争または科学の力によって——。

## 円盤問題は新しい生き方を教える

ところが地球にまでやってくるということ、かなり科学が発達し、そして人間の心の科学も発達していて、言語によるコミュニケーション





だからみな非常にまじめにこの問題を考えてゆくことによって、人間は本来どうあるべきだとか、人間そのものの問題に触れてくると思うんです。心とか肉体とかの問題ですね。

——まず価値観が変わってくるでしょうね。

ヨンのようなものではなくて、テレパシーによるコミュニケーションを行なっていたり、一瞬にして相手の心が読めてしまうような科学もおそらく応用しているかもしれません。その科学も宇宙の法則を応用した科学だろうと思うんです。

だから彼らは魂の部分でも宗教的科学的な点でも非常に進化していて、新しい超人類じゃないかと思います。そういう人類が地球へやってくるということは、当然彼らが地球人に危害を加えるような低級な人類ではないと考えられるわけです。だからそういう人類が地球の周辺にきているということをまず知覚することですね。それが非常に重要で、知覚することによってわれわれの日常生活における思考のパターンが全部変わってゆくわけですね。その変わることも非常に重要ではないかと思うんです。彼らの応用する宇宙的な法則をわれわれは彼らから

### 宇宙問題の探求は人間を変える

学びたいし、円盤・宇宙人問題を研究することによって、われわれのゆきづまった文明のイデオロギーやイズムなどを超えた何かもつと新しい生き方、魂の進歩などが求められるようになるんじゃないかと思います。

——そうしますと円盤問題は地球上の人間に非常に大きな理想主義的な一つの夢を与えてくれることになりませんか。

そうですね、ただ単なる夢というものでなくて、円盤を研究することによって、地球が終末を迎えている現状から何とか切り抜けてゆけるんじゃないかというヒントまたは方向性を見出すことができるんじゃないかと思うんです。これを非常に興味本位に不まじめに扱うと、ある意味では危険だと思うんです。

ええ、もうすでに価値観の問題はゆきづまりになっていますね。ぼくは円盤を研究するようになってから自分というものをよく研究する機会を与えられましたね。これを一つの宗教にしようと思っていると思うんです。決して宗教じゃないですからね。

地べたを張った主観的な考え方ではなくて、円盤について考えることによって、もう一つの大きな客観的な世界というふうなものを考えるようになりましたね。われわれはみんな一つのある力によって動かされているという考え方は。

彼らの飛行法一つにしても非常に宇宙の法則のようなものを彼らが習得して、それによって飛行しているといえますかね。ぼくにとっては円盤研究がぼくの人生論のような気もするんです。円盤を通じてずいぶん宇宙のこといろいろな興味を持つようになりましたし、自然の現象や人間の心の科学とか、あるいは歴史のようなものなど、以前はきらいだったものに對する関心が非常に強くなりましたね。

今まで宇宙の事とか古代文明だとか、物理だとか、そんなものはほんとにきらいだったんですよ。最もきらいで苦手な学科でした。それが今は一番好きになってきたというのはどういうことかなと思ったりするんですがね（笑う）。こんな問題について考えているときは非常にしあわせです。

# 浅間山上空に円盤が出現

上毛新聞二月二十五日付によると、二月二十四日にナゾの物体UFOを前橋市内の会社員三人が目撃した。その物体はまっ黒で、ものすごいスピードで東から西へ飛び、噴火を続ける浅間山の山すそに消えたという。

UFOの第一発見者は、前橋市総社町総社、今泉電機勤務、小野里邦満さん(三五)で、小野里さんは午前八時

始業後、事務裏所の空地で電気製品を入れるダンボールを燃やしていた。そのときふと顔を上げると二つの物体がものすごいスピードで飛んでいた。灰皿をひとまわり大きくしたほどの大きさで、色はまっ黒、二カ所から青色の炎を噴き出している。それが浅間山の中腹あたりでしばらくの間ピタッと静止し、やがてゆっくりと気球が降りるように垂直に降下して山の稜線に消えたという。

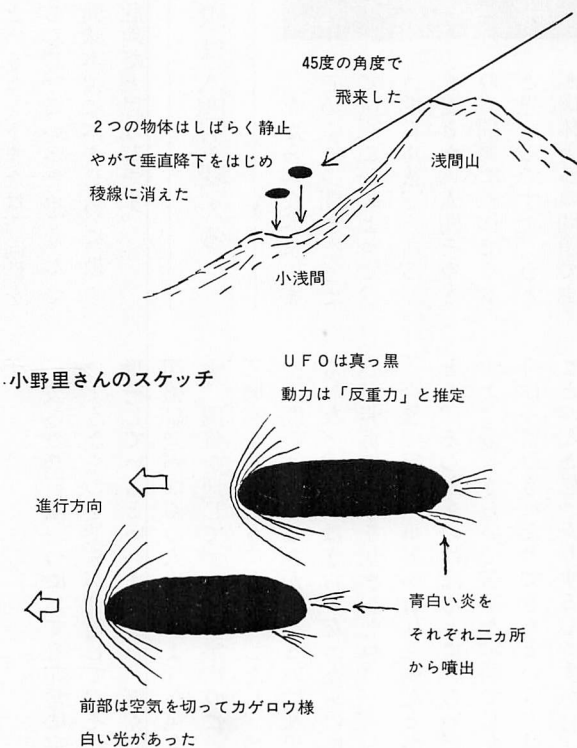
驚いた小野里さんは事務所にかかけもどって同僚の大山一江さん(三〇)、黒沢章さん(二三)の二人に知らせ、そろって外に飛び出たとき、更に別の二つの物体が同じように垂直降下を始めていた。

「はじめは流星かと思ったのですが、屋間のことですし……。飛行機や鳥と見間違えるはずはありません」と、空飛ぶ円盤に違いないと断言する小野里さんらは、これまでUFOの実在を信

じてもみなかったし、興味さえなかった。バカな話をする人がいるもんだと笑いとばしていた小野里さんが「信じてもらえないでしょうが、私はこの目で見たんです」と興奮気味だった。

ところで、それが小野里さんらのカシコと仮定すれば、同じ時刻の午前八時すぎに群馬から長野の上空にかけて飛行した別な物体がなくてはならない。

航空機の総元締めである運輸省東京





航空事務所では「群馬上空には定期空路はなく、計器飛行する場合はこちらでチェックするが、記録はない。考えられるのは民間の小型飛行機（有視界飛行）か自衛隊、アメリカ軍関係だが……」という。

自衛隊では陸上自衛隊相馬カ原駐とん地の当直司令が「二十四日は午前八時から一時間、一機のヘリが二度飛び立ち、落下傘降下訓練を実施したが、該当する物体には関係ない」と否定している。

邑楽郡大泉町にある大西飛行場（大

## ●東京でも出現

以上のほか、今年度に関内目撃された円盤騒ぎは数度発生しているが、その内の主なものに東京・世田谷区の出現事件がある。朝日新聞四月八日付によれば、四月七日午後九時二十五分、東京都世田谷区等々力三丁目の商事会社社長（三三）から東京消防庁に一一九番があり、連絡を受けた玉川消防署員が望楼に上がってみると、南東方向、仰角十五度ぐらいの空に三個の光る物体らしきものがあるのを見つけたという。この社長は実に二時間半も円盤を目撃している。

西勇一さん経営）でも「セスナは飛ばしたが、太田市上空を一時間ばかり。ウチではない」と、これも無関係。

これまでのUFO目撃証言のほとんどが、①雲に映った飛行機の影、②流星、人工衛星、③写真フィルムへの傷などで、その後の科学的追跡で「正体」があげられている。しかし今回の目撃では①飛行機では考えられないスピード、②円盤型、③まっ黒、④航跡（水平飛行から静止し、垂直降下した）などの証言から空飛ぶ円盤かもしれないと今泉電機では一日中大騒ぎだった。

その他にも三月九日には群馬県高崎市で高校生十数名が円盤を目撃、更に三月十一日も同じ群馬県内で多数の人が目撃している。全国ではおそらくまだ多数の目撃例があると思われるが、そのすべてが新聞雑誌等を通じて報導されるわけでもないで、意外な場所で驚くべき目撃事件が発生しながらも、そのまま埋もれてしまうことも考えられる。本誌は今後次第に調査網を広げて真相の解明に努力するつもりなので、読者のご協力をお願いする次第である。

## 特選光学器通信販売のお知らせ

### マニアに朗報！自宅でお好きな機種が選べる

下記5大メーカーの光学器を、お手元のカatalogで比較検討しご注文いただくシステム。ぜひ90年の伝統と信用を誇る東京メガネをご利用ください。

《取扱メーカー》

**アストロ ニコン 五藤光学 ミザール ビリセン**

《取扱商品》

**天体望遠鏡  
顕微鏡**

**地上望遠鏡  
拡大鏡**

**双眼鏡**

他付属品及部品類など、多数取り揃えております。

●総合カタログ(5大メーカーカタログセット)ご希望の方は切手100円を同封してお申し込みください。尚、お買上げ商品は、どこでも無料配送いたします。

いま10,000円以上お買上げの方々全員に 彗星を追う、'73天文観測年表(天文気象年鑑)、新天体写真技術のうちご希望の専門書を一冊無料進呈致します。

お問い合わせは——(株)東京メガネ 光学通販コズモ係

〒154 東京都世田谷区若林1-20-11 TEL東京03(413)8711(大代表) 郵便振替口座 東京134345・私書函世田谷局第33号



**東京メガネ**

支店＝国内22・海外2  
工場＝東京・群馬

彼の話によれば、黄色光線を放射した円盤の投光器は一行にならんでおり、そこから照射された光は輪郭のはっきりした円すい形をなしていたが、それにもかかわらず地面は一面が照らされていただけだった。いつも五つの黄色光の右手に、しかも同じ高さにあった赤色光は、黄色光の列の全体の長さとは大体等しい距離にあった……

# 多条光線を放つ円盤

ゴードン・クレイトン

UFO現象のことをよく知っている人なら、常につきまとう特徴の一つが「光」であることを知っている。実際それは最も重要な特徴なのかもしれない。指向性のある光線、連続的に色光を変化させながら動く光線や光輝、着陸した物体からあたり一帯を探索する直線のレーザー状光線、しかもそれが一、二キロメートルの距離に達することもあるのだ。また空中の円盤から光線に乗って人間が下降したり上昇したりする。「曲がる」光線、金属製とおぼしき物体の表面から出るコロナ状の光輝等々。UFOにまつわるといわれている光現象の範囲には限界がないらしい。現在われわれが知っている以上に光について理解したならば、UFOに関して、しかもその推進法に関してもっと多くの事が理解できるのだから。

多数の別な報告によると、人間の心をコントロールする手段として光線とか光る物や球などを用いる「人間」がいることが強調されている。またトランス事件やその他の事件に見られるように、犬やその他の動物を眠らせたリボーツとさせたりするし、イタベルナ事件のように人間を空中に上昇させたりする例もある。また殺したり不具にしたりする光線もある。

二、三の例で白昼の目撃に関するものがあり、その場合は不思議な光線（それとも他の放射線か？）が上空の奇妙な物体から地上へ放射されている。こうした例のなかにはこのような放射線やUFO自体も見られず、ただ写真を現像してみるとその中に奇妙な物が写っていて、それがどうやら「円盤」または「放射線」らしいことに初めて気がつくという場合もある。もち

ろん、ときにはそれらがレンズのフレアー、二重露出、薬品によるいたずら等の如き納得のゆく説明——しかも証拠のある説明が出てくることもある。しかしここではこうした説明でもどうしようもない実例に関心を向けようというわけで、三件ほど取り上げることにしよう。一つは白昼の事件で、二つは夜の出来事である。

## ● ミナスゼラエス事件

ウォルター・ビュラー博士（ブラジルの有名な円盤研究家）の「一九六八、九年ブラジル円盤事件、第二部」の第三十六には、一九六九年七月十三日付のブラジルの新聞コレオ・ブラジリエンセ紙の記事を載せているが、それによると、ウバルド・ローサス氏が一九六八年九月上旬の夜、ミナスゼ

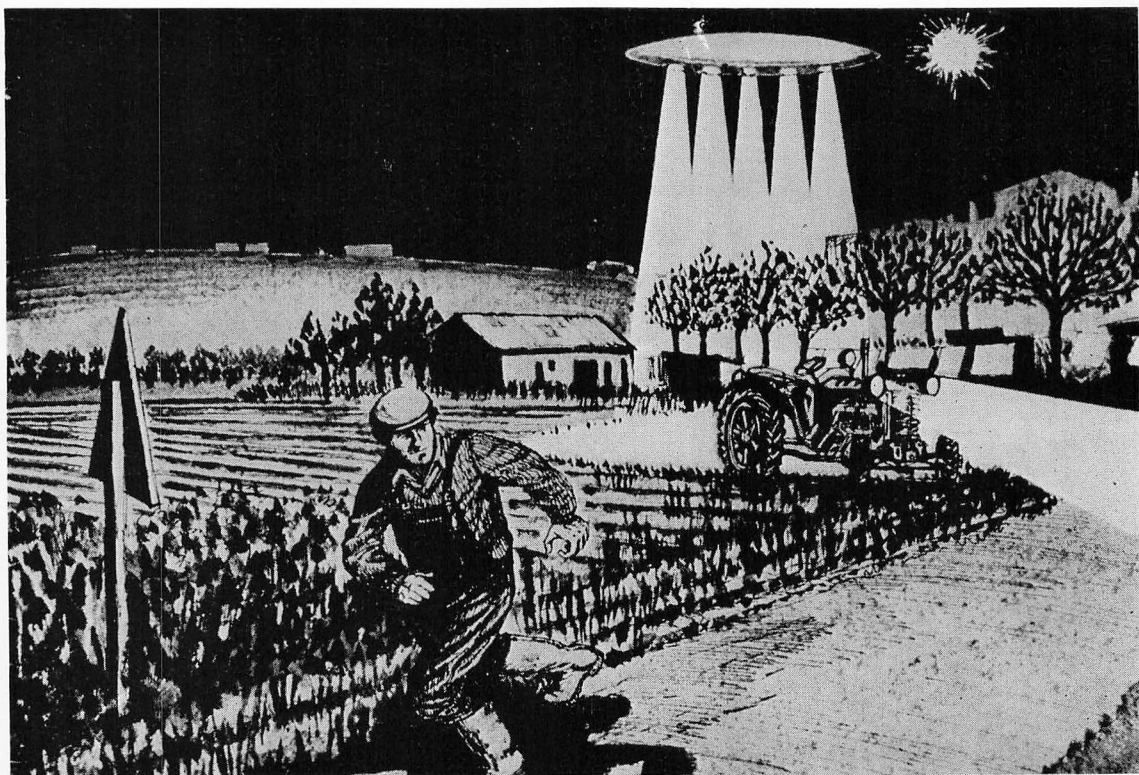
ラエス州コロマンデル付近の道路をドライブ中、レンズ状または葉巻型物体を見たけれども、その物体から強烈な多条光線が放射されるのを見たという

## ● フランスの

### ロテガロンヌ事件

このすばらしい最近の事件の詳細に関しては、ビエール・ペルトン大佐と、フランスの円盤研究グループGEP Aの会長ルネ・フリーレ氏に負うところが大きい。後者が発行している「空中現象」誌第三十号（一九七一年十二月発行）にはフリーレ氏の特別な記事に掲載されている。二名の憲兵隊将校をつれた大佐は事件発生よりわずかに一週間後に目撃者に会い、きわめて明快かつ詳細な模範的報告書を作成することができた。





目撃した日は一九七一年十一月十三日から十四日にかけての夜で、この最初の記事は「不思議な機械に追跡されたロテガロンヌの農夫」という見出しのもとにラ・デベシユ・デュ・ミディ紙に掲載された。場所はロテガロンヌ県マルマンド郡セーシユの北東十二キロばかりの所にある田園地帯のラシヤブルである。

十一月十三日(土曜日)の午後九時頃、農夫のアンジュロ・セリヨは自分のトラクターに乗って約四ヘクタールの自営農場を掘り起こし始めた。この農場は彼の家に隣接し、ラシヤブルとサンアビをつなぐ道路に沿った約二百メートルにわたる前面地を持つっている。

セリヨのトラクターは二個のヘッドライトと一個の尾灯がそなえてあって、そのすべてが点灯されていた。しかも調節できるスポットライトもあった。

午前一時五十分頃(十一月十四日)仕事が終わりがけたとき、彼は一つの光る物に目がひかれた。大きなヘッドランプからくる光のようで、北西約一キロの距離らしい。この光は部分的に樹木によってさえぎられている。だれか他の農夫がトラクターで夜間作業をやっているのだろうと思った彼はそれ以上注意を払わなかった。

しかしそのあと畑の北の境界をなし

ている小川の方にむかってトラクターで丘をくだっていると、またその光が目について、しかも自分の方へゆっくりやってくるのがわかった。地上の光ではない。その光の右側に小さな赤い光も見える。トラクターのエンジンの音のために他の音が聞こえないので、彼は後部に赤色灯をつけたヘリコプターが接近してくるのだろうと思った。

仕事が終わって道路の方へ斜面をくだって行きかけたところ、物体はなおも接近して来るので、もっとよく見ようとして二、三度回り、スポットライトをつけてその正体をつきとめようとした。

しかし物体は彼から約四十メートルの右寄り頭上に来て、トラクターと大体同じスピードで進行してくる(時速五キロであった)。物体の光は白屋のように明るくて、トラクターは強烈な黄色の光で照らされた。どうやら一列にならんだ五つの強力なランプから放射されるらしい。小さな赤色光はまだついていて、黄色光ランプの列の右側約四、五メートルの所にある。

恐ろしくはなかったが、わけのわからぬままセリヨはふたたび道路のそばのあぜの端まできて停止した。するとその瞬間、頭上で静止していた物体がゆっくり降下し始めて、地上十ないし十五メートルの所まできた。急にこわくなって、故障を起こした飛行機が頭

に落ちかかってくるのではないかと思つた彼は、トラクターをニュートラルにし、エンジンもライト類も切らないで飛び降りて、弟のジャンの家に向かつて道路を一目散に走り出した。危急を告げて、必要とあれば助けを求めようとしたのである。

だがトラクターから約三十メートル逃げたときに振り返って見ると、物体はまた上昇していて、もと来たときと同じコースを後退している。そこで弟を呼ばないことにしてトラクターの方へ引き返し、エンジンとライト類を切ってしまった。不思議な物体は五十メートルむこうにいる。ここで彼はひどく驚いた。その物体から音が聞こえないことに気づいたのだ。完全な無音で動いて行くのだ。

右側になお赤い光を放ちながら去って行く物体は今や小川を越えた。すると突然その光は更に強烈になった。新しいランプ類が光を放ったようだ。それから物体は低い丘の頂上を越えて視界から消えてしまった。

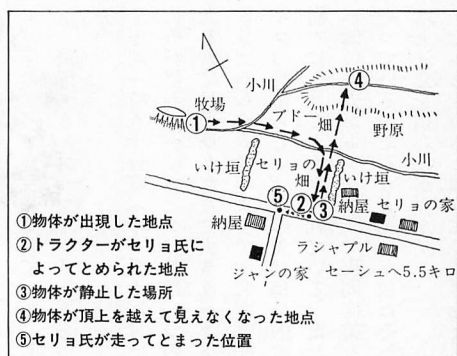
すべては終わったが、後に調査した人々に語ったときよりもおそらくもっとと気の転倒していたセリヨは、もう三十分ほど作業の結末を見たいと思つたけれども、もう働く気がしなくなり、ふたたびトラクターを動かして小屋の方へ引き返し、それから寝た。時刻はちょうど午前二時である。

## セリヨ氏

一九四〇年生まれのアングロ・セリヨ氏はがっちりした体格の男である。彼は健全な精神の持主で、大げさでも控え目でもなく気楽に話す。セリシ憲兵隊長が確証しているように、セリヨ氏は近隣では最も立派な住民として評判が高い。彼はブリーヴの第百二十六歩兵連隊で軍務に服し、夜間に観測し続けることや歩哨の任につくことには慣れている。また彼は良き夫、良き父親としても評判がよい。まじめで勤勉である。彼は翌朝まで事件については妻に話さなかった。これまでこんな現象を見たことはなく、円盤について読んだこともない。空飛ぶ円盤のことを他人が話すのを聞いたことはあるが、信じてはいなかった。彼の話によると、円盤は自分の方へ直進したのではなく、少しジグザグできたのだという。それは「浮かんでいた」と語っている。

赤色の光については、いつも黄色の光から同じ距離の所にあつたけれどもまったく同じスピードで動いているようには見えなかった。彼の意見によれば、物体の長さは赤色光を含めて十メートル程度であつた。

## 現場の地形



その地域は一連の小さな少々けわしい谷に続いており、多くの場所から——特にラシャブルから——高圧の送電線が見えるけれども、それは数キロ彼方である。このあたりの土地——牧草が作られており、ブドー畑と牧草地が少しある。各畑は生垣で分割してあり、この特徴のためにその地域には木が生い茂っているような様相を呈している。

セリヨ氏の畑は北の方へむかつてかなりの傾斜をなしている。つまり道路から小川にかけて下り坂となり、それから地面は丘の頂上にむかつて急な登り坂となる。この頂上で物体が見えな

くなったのである。

トラクターには十二ボルトの電気系統がそなえてある。スポットライト（白色光）は四十五ワットである。十一月三十日にはその畑に磁気は検出されなかった。畑の小麦（十一月十四日からまかれた）の成長の様子や、円盤で照らされた畑の小麦とそうでない畑の小麦に何かの相違があるかどうかを観察するようにとセリヨ氏は頼まれていた。

## 天候

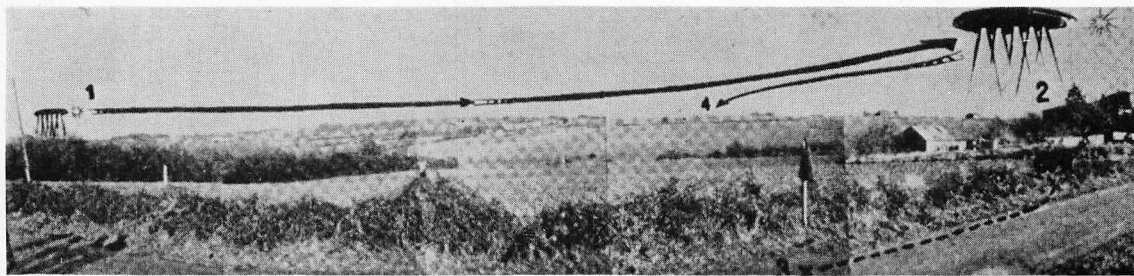
当時の天候は霧が深く、こぬか雨が降っていた。十一月十三日の午後は雨が降っており、翌朝、すなわち事件後の十四日にも雨となった。しかし目撃の頃は風はなく、空は暗くて星は見えず、月も出ていない。（十一月の新月は十八日である）

## 円盤

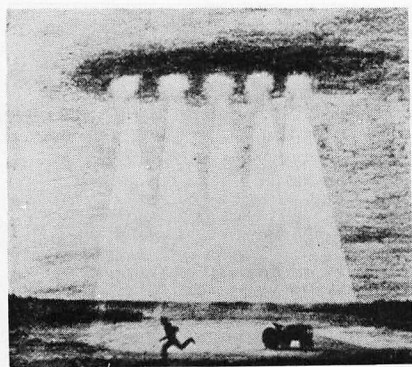
円盤から放射された光はあまりに強烈すぎて、そのため目撃者は各小屋のこまかい輪郭を見分けることはできなかった。彼が気づいたのは目のくらむような照明だけである。しかしそれはほんの短時間だし、事件以後彼は肉体的にも精神的にも影響を感じてはいない。

彼の話によれば、黄色光線を放射し





現場のパノラミック写真（角度を変えて撮った数枚の写真をつなぎ合わせたもの）に円盤と黒線を描き込んだ合成図。矢印は円盤の進行方向を示す。



### 別な目撃者

アンジュロ氏の弟であるジャンも結

た円盤のランブすなわち投光器は一列にならんでおり（少しカーブしていたかも？）、そこから照射された光（複数は輪郭のはっきりした円すい形をなしていたが、それにもかかわらず地面は一カ所が彼らされていただけだった。いつも五つの黄色光の右手に、しかも同じ高さにあった赤色の光は、黄色光の列の全体の長さとは大体等しい距離にあった。

ベルトン大佐はセリヨ氏と会っているときにスケッチしたが、セリヨ氏はよく描けているといった。事件以来彼は夜間に畑でただ一人で仕事を続けている。

婚して家族があり、すでに述べたようにラシャブルでアンジュロの家から道路を二百メートルばかりへだてた所に住んでいる。アンジュロと同様、ジャンもがっちりした愉快な農夫で、全然異常ではなく、フランスのとれた人である。しかし彼は何も見なかった。

デベシユ・ドゥ・ミディ紙の記事にはラシャブルの別な住民の述べた説明が載っている。すなわちテオ・ティス氏で、彼は事件よりも数日前に似たような現象を見たという。しかしこの記事は正確ではない。ティス氏が見た物は巨大な赤い球体で、彼は今までにこれにも語らなかったが、実際には「数日前」ではなく「四年前」だったのである。したがってベルトン大佐はテオ・ティス氏にインタビューしなかった。一方、アンジュロ・セリヨ氏は自身自身の体験と同じ日、すなわち十一月十三日の土曜日に、トゥールトル村の一住民が空中に不思議な光る物体を見ていと述べている。この目撃者はユベール・ヴァンソノー氏で、年令は約四十才、セリヨ兄弟のイトコで、トゥールトル村長の息子である。この村はラシャブルの南東約十五キロの所にあるトンブブー付近の小村である。

ベルトン大佐が質問したところ彼は次のように答えた。

「十一月十三日の土曜日、午後八時ごろに私はトゥールトルの南五百メートル

の所にある自分の畑でライトをつけてトラクターで仕事をしていました。そのとき、サン・バルテルミー・ダジュネの方向に（北西約五キロ離れた別な村）木々のあいだから一つの明るい光を見ました。どうも別なトラクターのヘッドライトからくる光のようでした。それでそのときは注意を払わなかったのです。

三十分後に家へ帰ったとき——家はトゥールトル村のある高台の斜面の中ほどの所にあるのですが——なおもサン・バルテルミーの方向にまた同じ光を見ました。ところが驚いたことにそれは地上の光でないことがわかったのです。地平線より上の空にジッと浮かんでいる強烈な光でした。その物体は大きなヘッドランプのように地面にむけて円すい形の光線を放っています。数分間見たあと、動かないことに気づいてから私はもう気にとめませんでした。

しかし数日後にイトコのセリヨが見た物のことを聞かされたとき、彼が見たのと同じ物を私も見たのだと思いました」

### ● ウィンダメアー湖 の事件

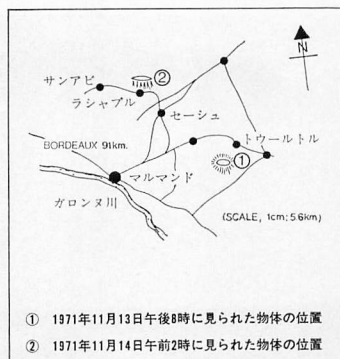
このきわめて興味深い事件は一九六三年八月に発生した。そのとき、現在はBBCテレビのカメラマンである一

紳士がウィンダメア湖にいたのである(イングランド北西部の湖沼地帯)。その氏名はわかっており、事件は本人のBBCの同僚であるC・B・フォックス氏によってもたらされた。筆者はフォックス氏を個人的に知っているが、氏はこの事件が真実であることを心から誓っている。

一九七〇年十二月二日付の筆者宛の手紙でフォックス氏は次のように述べている。

「この写真を撮影した友人であり同僚である人の正直さと誠実さを私が心から信じていることを知っていたのだと思います。彼は一九六三年八月にウィンダメア湖のそばにとめた車の中にすわって、簡単なブローニー判のボックスカメラで開いた車窓から写真を撮っていました。フィルムはコダックノカラー・リバーサルです。この写真はコダック社によって元のリバーサルから作られたものです。元のリバーサルは友人がまだ家の中のどこかにしまい込んでおり、目下探しています。

現像してみると、二個の水平の白い物体らしき物が写っていて、そこから光のスジ(複数)が湖のむこう側の地上に降りそそいでいるのです。ここで強調しなければならないのは、湖の光景を撮影したときに、友人はもちろんこんな物体や光線に気づきませんでした。



このリバーサル写真はデリー・エクスプレス紙に送られ、同紙がその写真を十インチ×八インチに引き伸ばし、そのサイズで白黒のプリントを作ったのです。この引伸写真は物体と光線を非常に鮮明に写し出しましたが、写真部員たちはどうにも説明がつかず、コダック社も同様でした。

数年後、私と友人がBBCのテレビスタジオで一緒になって、UFO問題が話題になったとき、私はこの写真の存在を知ったのです。自分はUFOに興味があるのだといったら、相手はこの写真のことを話して、持ってくるから調べてくれというのです。

私は大抵の写真のキズについてはよく知っています。レンズのフレアー、乳剤の毛状現象、網状のシワ、現像中の薬品による汚染、温度の影響、二重露出等です。しかしこの写真の場合はこれらのどれもあてはまりません。私の体験ではこの写真はまったくユニークなものです。

私が綿密に検査したところ、三つのポイントが出てきました。

1 この写真は決してインチキではないと確信する。

2 光線(複数)はわずかに「タラ」状のゆがみを示しているが、これは簡単な複写レンズの影響をあらわしている。

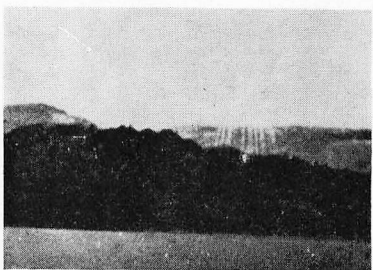
3 二個の水平の白い物体と光線の数及び配置のあいだには、きわめて密接な関係があるように思われる。このことは、薬品または現象のミスとはまったく考えられないことである(これはコダック社によっても確認されている)。

これ以外はまったくの推測です。あなたのご意見をお聞きしたいと思います。

C・B・フォックス  
フォックス氏を通じて私はこの写真を撮った同僚が最近までドイツでBBC



左がアンジュロ・セリヨ氏。右は弟のジャン。

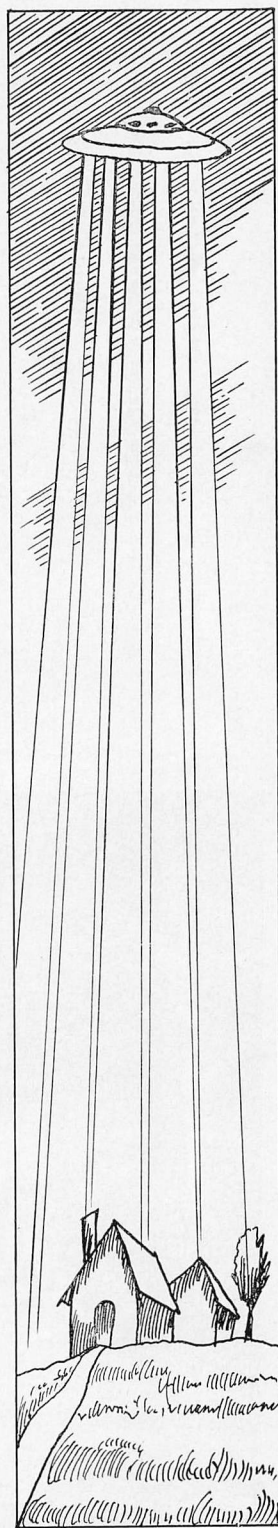


上の写真は1963年8月に撮影されたウィンダメア湖上空に現われたUFOと多条光線。右寄りに光線が見える。この写真ではUFO自体は見えない。

Cテレビの一員として働いていたことを知っている。フォックス氏によれば、氏が知る限り、リバーサル写真の元のはまだ探し出されないという。ところがこれが有望な事件で、遅れないようにしようと思った私はフォックス氏から提供されたカラー写真と白黒プリントをパーシー・ヘル氏に検査のために送った。するとプリントの注意深い検査と検討をした後、ヘル氏は、先に述べられた種々の人為的なミスがこのプリント中の現象にあてはまるような証拠はないとし、この物体や光線が何であるにせよ、写真はまったくのホンモノで、でっちあげではないという結論を出したのである。

なおここで強調したいのは、私はBBCそのものを取り上げているのではなく、たまたまBBCの社員であったにすぎない二人の紳士を取り上げたにすぎないということである。





(51頁より) わからない事がほかにもある。…一時は意識ははっきりしていたんだが、手足や指さえも動かさなかった…数秒間」

—あの夜のことかね？

「早朝の四時と五時のあいだだ」

—それは眠っているあいだかね、それとも起きたあとかね？

「目が覚めたとき…急にぼくはしゃべった…すると一瞬間動けなくなった。意識ははっきりしているんだ」

—いいぞ、いいぞ！

「このことは三、四回起こったと思う…全然何も見えなくなつたが気分はしゃんとしているんだ…わからないな、自分が浮き上がってゆくような感じだった…何といったらよいか…説明するのがむづかしいよ…」

—きみのからださがさまよつたのかね？

「いや、まるで自分の魂がからだから出て行つたみたいだった—どう説明してよいかわからない…自分の動作をコントロールしようとしたがだめだ

つた。まるで自分が死んだみたいだった。けど意識ははっきりしていたし、気分もしゃんとしていた」

—手足がいうことをきかなくなつたんだね？

「そのとおり…二度目に起こつたときは恐ろしかったよ。今度はマヒしたなと思つた」

—叫ぼうとしたかね？

「できなかった。ものをいうことも動くこともできなかった。意識ははっきりしているし、気分はしゃんとしていた。それだけだ」

—きみのからだは？

「まるで自分がからだの上の空間に浮き上がっているような気がするんだ。説明するのがむづかしいなあ」

—手足を伸ばした自分を見ているという感じはしなかったかね？

「それはしなかったよ」

—じゃ、自分が二つに分離したということは間違いないね？

「説明がむづかしいな…どういったらよいかわからないよ」

## 驚くべき真実の事件

以上のありのままの話はわれわれの調査で得た一連の事件の忠実な説明である。目撃者はその話を二度語つた。

最初は手紙で、次にデュパン・ド・ラ・グリヴィエール氏へ、最後にわれわれへである。

この三通りの話において基本的な事実と物語の基礎は一致しているけれども、細部の相違があるとしても驚くにはあたらない。こうしたことはわれわれの理解とは関係のないことである。

事件は三年前であつたこと、目撃者は記録をとらなかつたこと、われわれが同じ状況下におかれたとしたらある程度は忘れてしまふかもしれないような多くの出来事を本人が見たことなどを考えてみれば、矛盾した部分のリストを作るつもりはない。それらの原因は根本的には発生年月の順序、事実の見きわめ、特に忘れることなどにあるのだ。

われわれが常に受けた印象は、目撃

者は自分の見た物を何とかして思い浮かべようとしていること、いろいろな事件が彼の記憶の中でわき出てくるということである。ときどき記憶を失う彼はわれわれの質問を聞こうとしなかった。彼が自分の話を巧みにまとめあげているとは思えず、むしろあちこちを忘れているという印象を受けた。

「砲弾型物体」の到着、振動した標識、それにこれは彼の両親が確証した重要な事実だが、眠れなかつたことなど、これらすべてはこのようにして明るみに出たのである。

彼はこのことを率直に認めた。細心の注意をもって既知の事実には照らして行なわれたわれわれの調査は、完ぺきであり、詳細をきわめたものである。まだもっと深く調査しなければならぬ多くの物事があるし、探し出さねばならない別な目撃者などもあるが、こうした問題はわれわれが今もなお調査を続行中である。

フランスの怪奇

# 火の玉UFO事件

F・ラガルド

フランスのピレネー地帯の農家付近に

連続出現した怪奇な火の玉群と砲弾型物体！

二つのドームに人影の見える

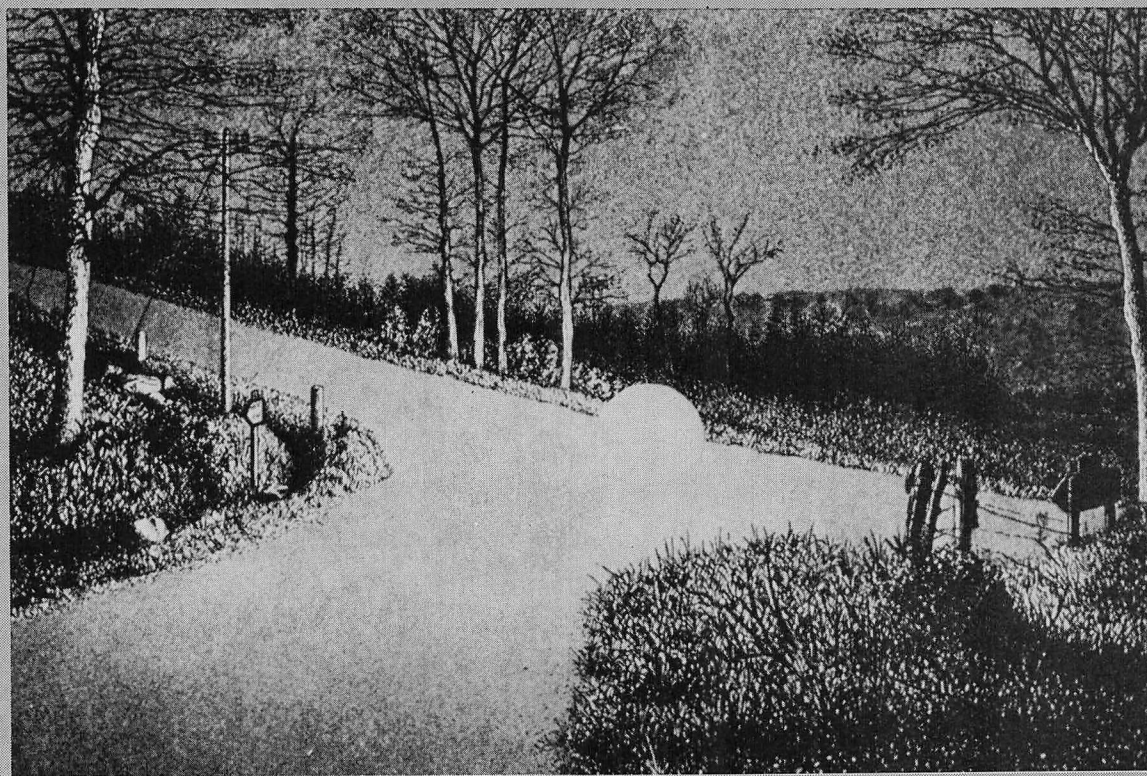
劇的な円盤出現！その正体は？

これはフランスの円盤研究家F・ラガルド氏と

そのグループが徹底的に調査した報告であり

現地を目撃者とインタビューした

貴重な記録である





一九六九年十一月にわれわれはかなり注目すべき情報を含む長文の手紙を受けとった。研究仲間の一人であるデュバン・ド・ラ・グリヴィエール博士は現地で調査をするために派遣された。彼は調査報告と多くの写真、陸地測量部の地図、その他補足的な詳細な記録を送ってよこした。それらを検討してみると、事件は事実そのものであるけれども、その報告には十分に説明のつかないギャップがあるように思われた。もつとくわしい調査が必要だけれども、きわめて多忙な彼はそれ以上のことができなかったのである。

そこでわれわれはこれをその方面の専門家であるエメ・ミッシェル氏に話したところ、それが確実だとすればきわめて重要な事件だと氏は判断し、追跡調査をせよといってきた。そこでわれわれはこれに対して個人的に介入することにし、事件をすみやかに解決するために更に二人の調査員を加えることにした。以下述べる事柄は一人だけのインタビュールによる調査ではなく、各調査員が各自で質問を發してはそれぞれ推測し、それらをまとめあげたものである。これは目撃報告、現場でのスケッチ、町役場で發見された文書類、写真、それに最も重要な資料であるインタビュールの際の一時四十五分にわたる録音テープなどから成るものである。われわれはローカルカラーを

出すためにできるだけ目撃者との会話に重点をおき、物語をなるべく自然なままに保つようにした。

エメ・ミッシェルが望んだとおり目撃者と調査員にはきびしい指示が与えられた。目撃者たちのはっきりした意志により、本人たちの名前は秘されている。きわめて残念なのは現場の地名を洩らすわけにゆかないということである。本人たちは平和に暮らすことを望んでいるのだ。読者はこのことを了解されたい。しかも調査は現在も続行中である。

本記事中のさし絵の内二枚はわれわれが描いたが、他の絵は記録文書写真、スケッチ、その他目撃者から提供された詳細な資料にもとづいて美術の教授であるJ・L・ボンクール氏が描いたものである。

## 現場付近

この事件はすべてフランス、アペロンのある農家付近で発生した。この家は一七六六年に建てられた古い家で、石の壁が厚くできていて、二階建てで、そこに居住の部屋などがあり、ここから遠くまで見渡せる。十もある部屋は大きくて、窓は大体に南に面しており、せまい窓が西北にむいている。母屋の南側には中庭があって、三方に納屋などの建物がある。東側に入

口があり、道路につながっている。西側には裏口がある。

この地所は控えめにできていて、おもに食肉用の小牛を飼ったり、干草、トウモロコシ、小麦、からす麦、大麦などを作ったりするが、家族用のブドウ酒を作るための小さなブドウ畑もある。要するにビレネー中央部の多くの農家と変わらない。

「何を見たかがわかっていて、しかも何も恐れていない」この農家の家族が目撃した光景は次々とかなりの数で続いたもので、それがこの連続事件の混乱の原因となっているのである。したがって目撃者自身でさえも当時の覚え書きや日付などを記録していないために発生した出来事の正しい順序を思い出すことがむづかしい。

## 事件が発生した

一九六六年六月十五日の午後九時三十分ごろである。孫たちの世話をしている七十六才の老婆が一階の自室の窓から最初に気づいたのである。

ばあさんは田舎弁のはきはきした口調で話してくれた。体験を思い出しながら感情が高ぶってくると土地の方言がとび出る。

——おばあさん。その夜あんたが見たものを話してくれないかね？  
「あたしや窓のところにいたんだよー

——ちょっとのあいだね——あたしぐらいの年になると、ときには一息空気を吸いたいからね。だけどこの年まであんな光る物を見たことはなかった、ただの光じゃない——あれは火だった！ 火だったよ！」

——そのときには数個の火が見えたのかね？

「そのとき——そうだね……人間の頭よりも三倍も大きかったよ」

——三つ見えたのかね？ そのときはそんな遠方じゃなかったんだらう？  
「そう、そのときは光る物（複数）がXの近くの上空にいたよ」

地図ではXという土地は一キロ離れている。最初その物体群は約千二百メートル離れた遠い所にいた。それから近づいてきて、Xの上空へ、続いてYの方へきた。これは八百メートル彼方である。Xは山の上にあるその農家から真西にあたる。

ばあさんは続ける。

「すると光る物はYの方へきた。Yで火事があるかなと思った。よくわからないけど、それは動いていた。ずっと見え続けていたよ。べつに変化はなかった。だれでもこの光が見えたはずだよ。やがてずつと近づいてきた……小さな川の上を越えて……」

その球体群は低くなりながらやってきた。地図で見ると六百メートルあったことがわかる。

「だけどあたしやもう何も見えないだろうといった。すると突然それが少し高くなってやってきた。おまえがいっようにAの近くだよ」

「いってばあさんは娘婿の方に話しかける。」

「それからあたしはいったよ、この次はどこへ行くんだろうとね。Bの方向かな? あたしやB地区の人たちを知っているんだよ。知っているんだよ! するとまもなくその火の群れがこちらへ少し近づいてきた。そこであたしやいった。『あの火の群れは何だろう? カミナリは鳴っていないし、あらしもないし——。何をやっているんだろう?』あたしや叫んだ。『あの火の群れ——あたしや年をとりすぎている。あんな物を見たことはない。あんなに動きまわっていて、あたしたちはみなどうなるの?』ブドー畑の隅の上をふたたび動き出したあと——おぼえているかい、あのときおまえを呼んだんだよ」と息子の方をふり返って「あのとき、あたしや恐れたんだよ——だけどもしあれがもつと近づけば納屋の中にはいり込んで、みんな燃えてしまっただろう。家もあたしたちも——。それでこの人を呼んだんだよ」

## 奇怪な火の玉の群れ

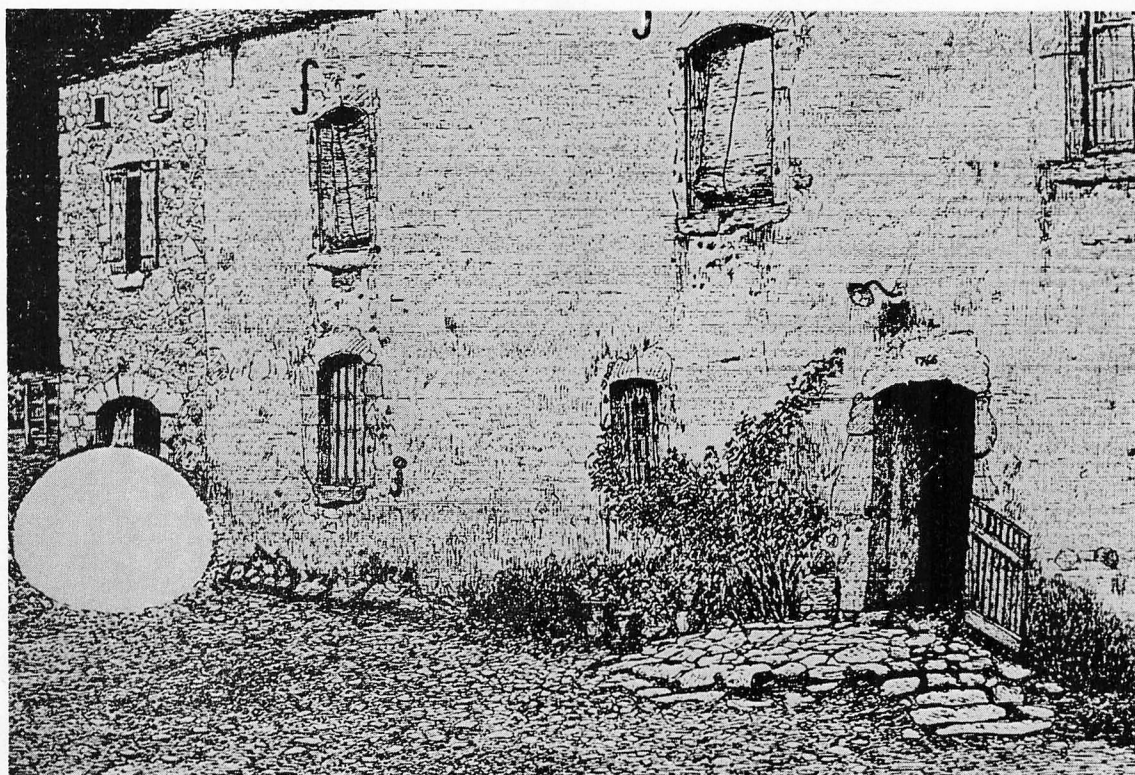
田舎のまったく中の平和な風景の中

の目撃者の家は暗い。彼女の眼前には約千三百メートル彼方に一つの山があり、その最高部は四百五十メートルの高さがある。その山までは畑以外に何も無い。耕作された地域で、百三十メートル下方には谷があつて、その底には流れがある。その流れから、約四百メートルの高さの別な山の頂上にあるその農家へ斜面が続いている。

三十年間くる日もくる日も彼女が知つてきた田舎の夜の暗黒の中で、彼女は「火」と呼ぶ物体を見たのだ。その物体群は消えたり現われたりした。そしてそれが接近するにつれてその動きを目で追つていた。物体群は谷の中に降りたり傾斜を昇ったりし、なまけ容赦なく農家の方へ近づいて、まもなく彼女の眼前に出現しておびやかしたのである。彼女は未知の現象のことを知らなかったのでその正体を見きわめようとした。

「あらしはなかった」という。彼女は超自然的な物または途方もない物を恐れなかった——こんな物を考える力はないのだ。しかし火事という考えはあらゆる土地の人をひどく恐れさせる。そこで助けを求めようとして息子を呼んだのだ。そして、やってくるかもしれない物を恐れてたつぷりと着込んで寝た。これは真実らしい響きをもつ話である。

奇妙なのは、かなり遠方から森、





畑、生垣のような障害物を越えて、この光る「球体群」がやってきたことである。しかも不可解な目的でこの農家を目指してきたのだ。何かの意志、本能、知性があるといえるのだろうか。

実体がなく、ただ光るだけで、機械でもなくプラズマでもなく、その行動が不合理で自発的な一種の鬼火みたいなこの物体について詳細はこれから展開する。

娘婿の話は続く。彼はこの家のある家で、農業を仕事としている人なのである。

——おばあさんがあなたを呼んだときは、あなたは二階の次の部屋にいたんでしよう。ひとつ目撃した物について話してくれませんか。一体どういう事が起こったの？

「おれは窓の所にいた。そのときは何も見えなかった……何もね。二、三分じっとしていた……するとあっちの方に一個の火の玉がいるのを見た。家から十五メートルの所だ！ おれはいつた。『ばあさん、あなたのいうとおりだ——これはおれの義母なんだがね——あなたのいうとおりだよ！』とね」

「それは家の近くで、壁のそばだったんだね？」

「そう、十五メートルむこうだ」

「その物はそこで何をしていた？」

「ああわからんね。そのときは動いていなかった。……二、三分間じっとし

ていた……それからもう何もなかった……。バチンと音がしてライトを消したように見えた……もう何も見えなかったよ」

——消えてからまた現われるまでは長くかかったのかね？

「いや、数秒間だ……二、三秒だけだ」

——形は丸いといったね。

「そう、丸い……うん……下よりも上の方がもっと丸かったな……下側は少し平らだった……上はあなたの絵よりももっと丸かったんだ」

われわれは相手の指示どおりにスケッチを修正した。

——そのとき外に出たのかね？

「うん、おれは外へ出た……見に行っただ……そこへね」

彼はあとでブドー畑の中の立って見ている場所へわれわれを案内するといふ。農家から五十メートル西方の地点である。

——何か起こったのかね？

「おれは一分間ほどそこにいた……一分間だ……その火の玉群は引き返していった……そのときは六個いたな」

六個の球体がいいたというの？

「そう——約一キロメートルむこうにだ——たぶん二百メートルかな……それらは畑の中へ引き返して行った……うまいええいな……とにかく畑だ、畑だ」

シャセーヌ氏がもっとも正確な言葉で質問すると、彼は斜面の側面にある正確な場所を指摘することができた。われわれが立っていた場所から見ると牧場のように見える。

「その火の玉たちはかなり離れてターンしていた……ここからどう話したらよいか……正確には見えなかったんだが……たぶんたがい五十メートルずつ離れていたかな……ちがうかもしれないが、わからない。だがおれはみんながむこうへ動いて行くのを見たんだよ」

この男の息子が手紙で知らせたところによると、球体群はたがい十メートルずつ離れていたという。彼はインタビューのときに口をはさんだが、父親は同意しなかった。要するに球体群は十メートル以上、五十メートル以内の距離を保っていたらしい。

「突然……ああ！ それらは歩行の速度で動いて行った……トラクターのスピードぐらいだね……トラクターといってもローギヤーのことだ」

——一列にならんでいたの？

「そう、一列にならんでね」

——六個の球体が一列にならんでかね？」

「そう、一列にならんで——それらはあそこで円陣になっていたよ」

——一列になって？

「うん、一列になってだ。ならんでね」

——それらがむこうへ動いて行ったときもやはり光り続けていたの？

「そう——そうだ」

——それとも、光が消えてからまた光ったのかね。

「いや……それらは円陣になって、みな光っていたよ」

——むこうへ動いて行くときも光り続けていたんだね。

「むこうへ動いて行くときも、そう……むこうへ動いて行くときも光っていたんだ。おれはトラクター……音が、音はなかった。もしトラクターなら聞こえたはずだ。だって夜間は遠方のエンジンの音が聞こえるからね……だがおれたちには物音は聞こえなかった。トラクターじゃないな——おかしいね——だが、そんなに多くの、とにかく——そんなに多くのライトがあるはずはないよ！すると、ある瞬間に……それがつながって……消えて（このとき息子が父親に何かをささやいた）砲弾型になったんだ」

——その砲弾型の物はもう見えなかったのかね。

「いや、いや……おれはその前にも見ていたんだ」

——いつ？

われわれはこのことを知っていたが、話の筋をこわしたくなかったし、関心を低めることも望まなかったのである。

「おれがちょうど外へ出たときだ」

——やはり同じ方向かね。

「そう、そちらの方だ」

——どんなふうに見えたかね。

「そうだね……光っていたな……光っていた。おれは木が燃えていたと思ったんだが……炎も……煙も見えなかったよ」

——白かったの？

「輝いていたね」

——火球の群れと同じ色？

「そう、火球の群れと同じ色だ……似ていたな……そうだ、同じ色だ」

——それから火の玉はまた合同したのかね。

「うん、あの『機械』にね」

あらゆる事柄が正常なように思われる——まずまずだ。その『火の玉』群は『砲弾型機械』の中にのみ込まれてしまったので、頭をひねりながらも見あきた目撃者は、火事の危険がないことを知って、このものすごい光景に驚きながら家へ帰って床についた。

## 宇宙船かも？

ばあさんと同様にこの目撃者も熱心に話してくれた。

これは六月十五日であることを忘れてはならない。その地域は緑にもえて植物は活気にみちており、その地帯の十分の九は畑と牧場から成っているの

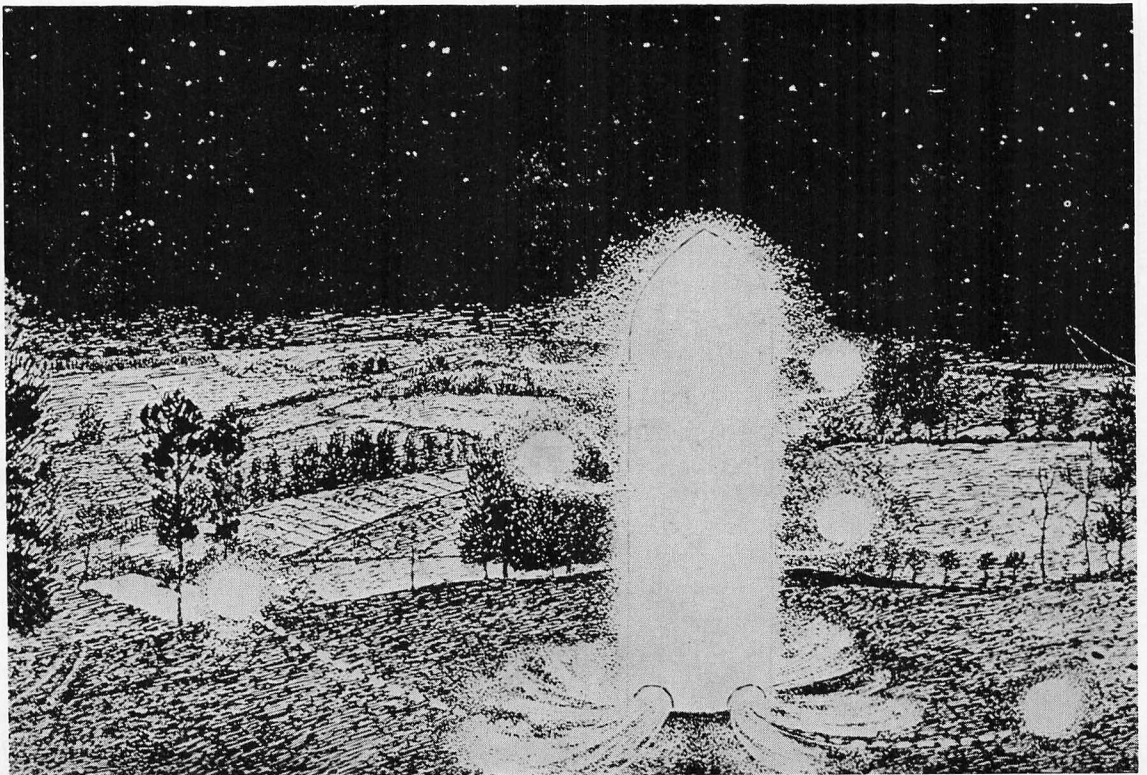
で、火事は考えられない。たといこの目撃者が正確に説明できないにしても本人は火事の可能性を信じてはいない。彼はあの光る球体群を見て心から驚いたのである。この不可解な事実は三度くり返された言葉「おばあさんのいうとおりだ」によって知らされている。そして彼は自分が見た物を理解してはいないのである。

その球体は遠くへ離れて行った。そして驚きよりもっと奇妙なのは、彼は木が燃えていると思った物を遠方に見たのである。彼がそれに対してできる客観的な納得のゆく説明は自分が見た物と合致しない。そこには炎も煙もないのだ。だから燃える樹木ではない。それで彼はそれを『機械』と呼んだのである。宇宙船かもしれないという考えは彼には起こらない。彼がどうしてこんな物を考えつくだろう。

それから彼は六個の光る球体群の行列を見ている。その行列ぶりや、進行が整然としていることなどで彼はトラクターのことを考えて、瞬間窓から見た球体群のことを忘れてしまった。すると球体群は『機械』といっしょになつてしまった。

## 不可思議な現象が続く

あらゆる事がわけがわからず、不合理である。農家の方へ近づいてきた球





体群は光が消えて（パチッという音がしたノ）また輝いた。「機械」と球体群の行列はすべて夜の静寂さの中に発生し、音もなく、非現実的で夢のようであった。

彼は何を考えることができるだろう？「正体を理解することはできなかった」という。

こうした一連の証拠にもとづいてわれわれは事件の順序を日時によってまとめあげようと討議したが、これはまったく混乱してしまった。また別なさまざまな現象が日時不明のまま発生したことも聞いている。シャセーヌ氏がそれを記録しようとしたが、だめだった。息子がそれをわれわれのために要約してくれた。「あとで多くの出来事があったんですよ」

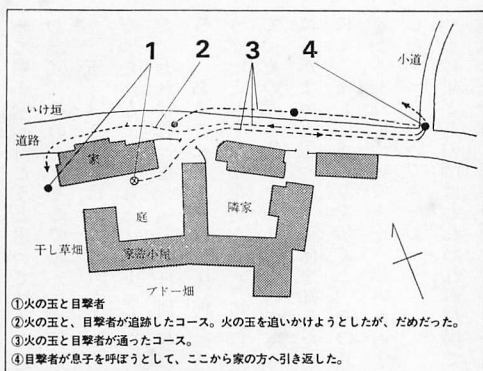
だが一九六七年一月始めまではたいした事は起こらなかったこと、そしてそのころから一九六七年一月十一日の水曜日までに、一連の驚くべき、しかも正確に述べられた事件が発生したことを立証できたのである。

一九六九年までにあいまいで日時もはっきりしないもっと多くの事件が発生したことが明らかにした。二人の調査員はこの調査に協力すると思われる目撃者たちを見つけようとしている。

## なぜ同一場所に発生するか

一九六六年六月十五日の夜に起こった事件の調査をしたあと、われわれは続いて発生した出来事（複数）の総体的な検討を続けたが、それらは日時に關してはまったく混乱していた。現地にいたシャセーヌ氏が一九七〇年五月二十二日に次のような報告をよこしてきた。

「多くの未知の事実がまだ存在していると確信します。それはインタビュールしているうちに急に明るみに出るかもしれません。たとえば、例の父親は一月十五日以前に一個の「球体」を見えていますし、祖母はあれ以来いくつか見えています」



結局、あらゆる事実を集めるのに二日では不十分だと思われる。ここで調査員たちにとって一つのレッスンがある。目撃者たちが「すべてを語る」最初のインタビュールのあとで、彼らが忘れてしまった事件類をビックアップするために現地へ行く必要があるらしいということである。目撃者たちが事件をたいしたことはないと思っているからだ。前後関係がはっきりすれば思わぬ事実が明るみに出るだろう。

——今まで何もいわなかったおばあさんに何か見ましたかと尋ねてみたんだがね。

「ああ、おれは光る物を見たんだ。しかしそれ以上はおぼえていない。とにかくおれは近眼なんですね。おばあさんはあんな物に興味はないんだ」

祖母「たった昨夜おまえはまぐさの中に火（複数）があったといったじゃないの」

あるじ「十五回以上もここへやってきたな。そして一個がひとり二度ほど近づいてきたよ」

——それは他の五個から離れたのだね？

あるじ「そうだ。一個の火の玉が他の五個から離れたんだ……数秒間……それからまた行った。だが二度ほどそれらはやってきた……動いてからまた帰って行った」

——消えてからまた現われたのか

ね？

父親「十五メートルばかり移動したね。その場所を見せるよ」

——それは光っていた？ それとも消えていた？

あるじ「ああ……それは消えたんだ。それ以上は見えなかったよ」

——引き返して行ったのかね？

あるじ「離れて行ったんだ……それが近づいてくるのを見たよ……それからまわって行ったかどうかかわからない（本人は家のうしろをまわったことをいっている）。もう見えなかった。引き返したんだ……それからそれはうしろの方へ移動した……おれには見えなかった……もう見えなかった……それは歩くぐらいの速さで移動して、家の横の方へ行った」

——このことが十五回も発生したのかね？

あるじ「そう、そう……二度ほどそれが家の方へ近づいてきた……二度ほど」

——じゃまにはなかったか？  
あるじ「ああ……じゃまだったよ。家の横の所なんですね」

祖母「あたしヤベッドへ行ったよ。近所の人たちを呼んで目を覚まさせようそれからベッドへ行って寝ようと、ひとりごとをいった」

あるじ「近所の人たちは日曜日に定期市へ行っていたんだ」

祖母「息子はあの物を見つけていたんだよ。だけどあたしや寝た。着物をぬがなかった。ただベッドに横になっただけだった」

ここでわれわれはあるじに尋ねた。

——あなたは一九六七年一月より前にあの光る球体群を見たんだらう？

そのとき何が起こったかね？

あるじ「見たよ。空中に一個の球をね」

——空中に？ 球を？

あるじ「そう、ちょうどあっちの方向だ」

祖母「おまえが見たというあの光る物は畑全体を照らしていたのかい」

息子「だけどあれはあの日じゃなかったよ」

あるじ「そうだ。あの日じゃなかったな」

息子「あのときほど前のことじゃなかった。五、六カ月前ほどでもないよ」

## 道路を進行する

### 火の玉

——しかしわれわれはまだ核心をつかんでいないんだがね。寝てしまった息子さんをあなたが呼んだのは一九六七年の一月六日のことだった。その日には何が起こったのかね？

あるじ「ああ、ああ／＼：おれは外へ出た。家畜がどうしているかを見た

めに牛小屋へ行こうと思って外へ出たんだ／＼。そのときそこで光る物を見た。五十メートルばかり離れたところだったかな。家から三メートルぐらいだ。おれは思った。『あれは何だらう？ あそこにあるのは一体何だらう？』とね。懐中電灯を探しに行つて、その光る物のまわりを歩いてみるほうがよいと思った。正体を知るために：：そしてまわりを歩くと、その光る物もおれについてきた。歩いた道すじをずっとついてきたよ」

その足どりの図はわれわれが現場で調査した一連の事件を浮きぼりにした。

——その光る玉が熱を発していたと感じたかね？

あるじ「いや／＼ いや、何も感じなかったよ」

息子「ぼくが見たやつは直径が一・五メートルぐらいだったな：：いや一・二メートルぐらいかな」

あるじ「そこでおれはもとの方へ引き返した。すると火の玉は最初のとぎと同様に家の方へ引き返したんだ」

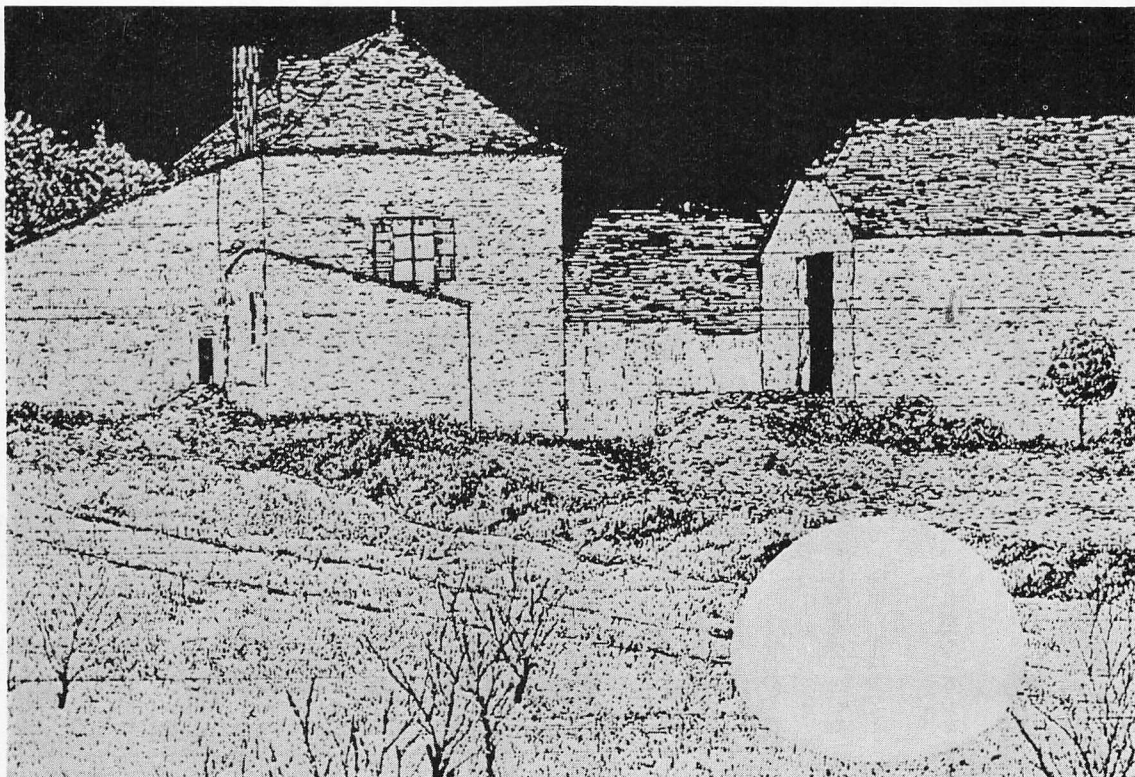
——きみのお父さんはこのときにきみを呼んで、それで起きたんだね？

息子「そう。お父さんが引き返してきたときにぼくを呼んだんだが、ぼくは最初何も見なかったよ」

あるじ「それは消えていたんだ／＼。だがおれはまだそこに立っていた：：そ







して火の玉がまた帰ってきた……そのあとでまた帰ってきたノ」

われわれは息子子の足を少し引っぱりながら、「きみがそれを行かせたのか」と尋ねると、彼は笑った。

息子「ぼくが見たとき、最初は何も見えなかったよ」

あるじ「そうだ、だが火の玉は行ってしまったんだ……もとの位置にはいなかった。おれは立っていた……そして息子に『もどってきたぞ』といったんだ」

息子「だけどぼくはそれを二、三分後に見た……ぼくはそれらの一つを見た……そうだね……窓のすぐ下のところだ。あの小さな登り坂を登ったんだ……それでぼくはいった。『やあ、いま何かいるぞ』とね。

——そこできみはまた階下へ降りてきたんだね？

息子「そのとおりだ。ぼくは降りたよ」

——きみは一度降りたんだから、二度降りたことになるんだろ？　そして何も見えなかったもんだから、また上がって行ったんだね？

息子「そう、そう」

——それで二人がああ砲弾型の物を見たのは今度のときなんだね？

息子「そう、そう」

——きみとお父さんの二人で？

祖母「二人がやってきてあたしを呼んだんだよ。だけど……」

——それで？

祖母「いや、いや、あたしは行かなかった……娘が泣いていた（これは子供たちの母親である）……あたしは娘にいつてやった。『害はないよ！』……それでもあたしは降りて行った……そしてたら火の玉が見えたんだよ！」

ばあさんの感情が高ぶって急に意味のわからぬ方言になる。これで彼女が気が転倒していることがわかる。

## 奇怪な六個の火球

——あなたがたが見たのは何だったの？　そのとき何が起こったの？

息子「ぼくは六つの球を見たんだ」

——それからどうなった？

父親「ああ……そうだね……おれはもううろつくのをやめて、寝たよ」

——あなたは砲弾型の物を見たけれど、それを見に行かなかったんだね？　また家の中へはいって寝たのかね？

父親「いや、いや……もう寝なかったよ」といつて笑う。

——どんな感じがした？　恐れたかね？

父親「うん、そうだな……つまりこういう感じだ……」と彼は弱々しく笑う。

——どんな感じがしたかね？

息子「お父さんはそれにむかって石を投げようとしたんだが、投げなかったよ」

父親「いや……おお、おれは何かをやろうとしたんだが……」

——あんた、ちょっと恐れたんだらう？

父親「ちつとも恐れなかった……あれを見たときに……」

——そのときに懐中電灯を持たなかったのかね？

父親「いや、ポケットの中にあっただろ、だが……」

——それをつけたの？

父親「いや、いや、ポケットの中にはいつていたんだが……全然使わなかった……正体を知ろうと思って火の玉のまわりをまわってみようと思ったんだが、そばへは行けなかった……それであきらめたんだ」

## 砲弾型物体と

### サーチライト

(息子に)——きみにとってはそのときどんな物が見えたかね？

息子「そうだね、ぼくは砲弾型の物を見たんだが、それには三本の枝みたいなものが突き出ていたよ」

——枝みたいなものが？

息子「そう……まっすぐな枝みたいな

……ちやうどその絵に描いてあるような物だった」

——そして火の玉は？

息子「周囲に三本の枝がついていた。そしてあるとき一個ずつの火の玉がそれぞれ枝のところへきた。一本の枝に三つの火の玉がきたからみんなで六つだ……砲弾型のでっぺんところにサーチライトがあつて、それがあの窓を照らしたんだ。部屋全体を照らしたよ……ぼくはあの反対側の窓をあけておいたんだ」

——散るような光線かね？ それとも集中した直線状の光線かね？

息子「ああ、集中した光線だった。とても集中していたよ」

——それがきみの部屋を照らしたんだね？

息子「そう、照らしたんだ……照らしたんだと思うよ！ まるで昼間のようにだった」

——しかしそのときは自分の部屋へ帰っていたんだろ？

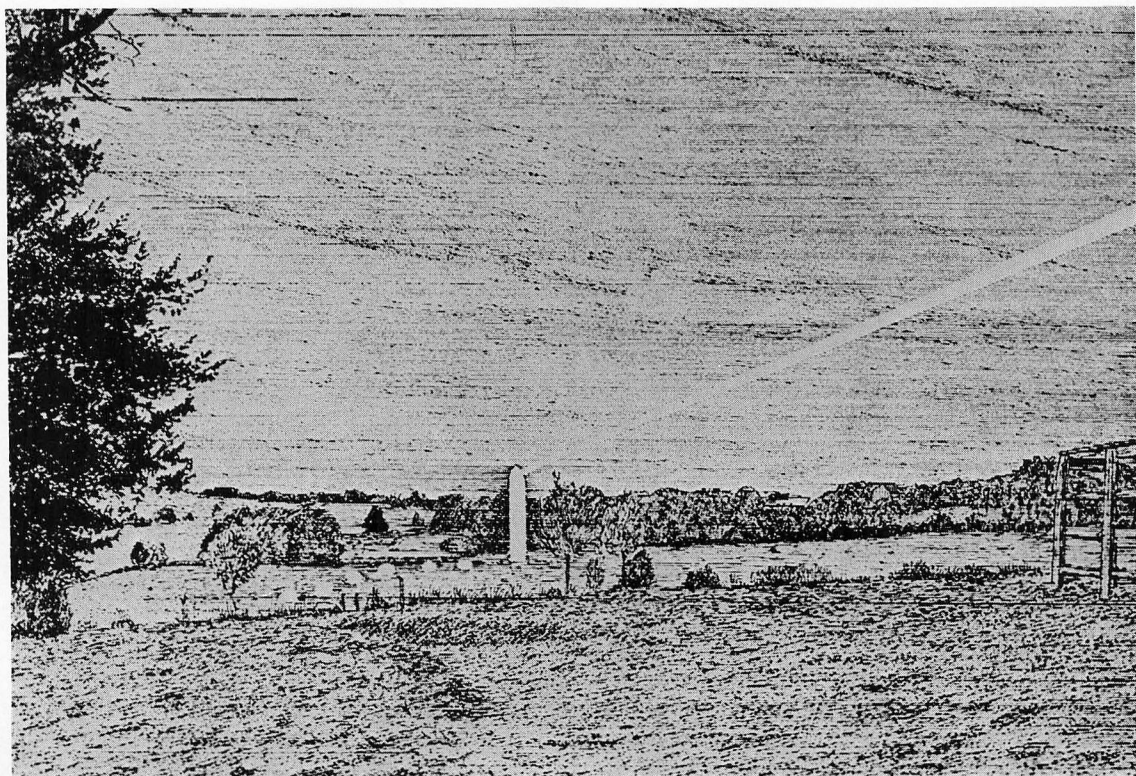
息子「うん、ぼくは帰っていたよ」

——それで砲弾型の物はまだそこにいたのかね？

息子「その日、それが逃げるのを見なかったよ」

——それで、それがきみの部屋を照らしたんだね？

息子「そう、照らしたよ……明るくなったり暗くなったりした……回転して





いたよ……回転し続けていた」

——ビーコンみたいにくるぐる回転  
していたの？

息子「そう……ときどき次の部屋を照らしていた……回転し続けていた……だけでもう十一時か十一時十五分ごろだったなあ」

——そんなに變だとは思わなかつたかい？

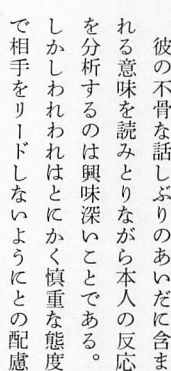
父親「うん、変に思わなかった。あれは何だろうとみんなで話し合っていたよ」

息子「すると突然光が全部消えてしま  
った。それ以上は見えなかった。行っ  
てしまったのか、まだそこにいたのか  
わからない」

## 裏をかいた

息子「次の日の夕方ぼくはまっ先に外へ出たんだ。すると青緑色の光が見えたが、かなり遠方だった。野原の地平線近くだ。それからお父さんがやってきて、二人でいっしょにまたあの砲弾型の物を見たんだ。九時ごろか九時半ごろだったね」

この連続事件において息子はその現象に出くわしたのである。重要な目撃証人となるように呼ばれたときはまだ何も見ていなかったし、一九六六年六月の夜の話をほとんど信じていなかったのである。父親が物体を見たという



のが息子の最初の反応だった。だが今彼の番になると、興味ある目撃者となった。そして後の事件で彼は車に乗って道路ぞいに現象を追跡した。この現象が彼を多くの思いがけない場所へ行かせることになったのである。

父親はこの異常な夜の事件のまっただ中にいた。今まで現象から遠ざかっていたために彼がただ不思議がっていたにすぎないとしても、そして恥ずかしさのために公然と認めないにしても、今度は恐れたのである。彼が正体を見きわめようとしてこっそり近づこうとした、そして彼の行手をさえぎって二度も略路をだめにしてしまったこの火の玉は彼をまごつかせてしまったのである。

彼の不骨な話しぶりのあいだに含まれる意味を読みとりながら本人の反応を分析するのは興味深いことである。しかしわれわれはとにかく慎重な態度で相手をリードしないようにとの配慮

から話を強制するようなことはしなか

った。こうした反応は内奥の想念の外  
的な現われであり、言葉にはならない

にしても眞実で事実をあらわしている  
のである。『火の玉』の出現に關して  
は彼がこれを純然たる物理現象——な

たとえば「火」だと間違えてはおらず、本人の想念は「生きもの」とみているように思われる。本人は「前側」が問題であって、「うしろ」からそっと裂

び寄れば気づかれなかつただろうと考  
えており、そうすればもっと何かがわ

かるだろうと思つてゐる。彼の計画は二度も妨げられたし、話の様子からして彼が全然もくろまなかつた小道を横切ろうとしていたことがわかる。

あの六十メートルは彼にとってずいぶん長く思われたにちがいない！

「あの光る物は小道にそっておれのあとをずっとつけてきた、ずっとだ……」

「これは終りのない進行であるような印象を受ける。しかもそれは彼にと

つてとても一分以上もかかることではなかつたろう。歩くにつれて彼はその物体にむかつて小枝か石を投げつけようという考えさえ起こしている。

しかし火の玉が近づいてきたとき彼はそうすることを恐れた。これはその物体から何か未知の反応の恐怖が起ったためである。彼はそれを「火」

と思つており、それ自体の意志で動く  
と考へていたからである。

それにもかかわらず彼はそれに打ち勝とうとした。そして相手を「驚かせ」チャンスが見つかるかもしれない

小さな畑の小道のことを考えた。彼はそこへ達したが、入口の所で物体を見たにすぎない。自分が近寄って行ったのではないという。これで終りとなつ

て彼は自分のゲームをあきらめ、**勝**ち誇った。火の玉は家まで帰って行く彼についてくる。

人を恐れさせるような現象に直面した二人の女性にも同じような恐怖または狼狽の様子があつた。火の玉の出現が始まつた瞬間から農家は宙に浮いた

おびやかしのために不安な感じに満たされた。そして父親が呼び出したとき水門が破裂した。妻は激しく泣き出し、自分はタフなのだと考えがちの祖

母は娘をしっかりとつけてとり乱させないようにしたもの、実際にはさほど安心していたわけではなかった。

その後状況を分析してみると、シヤ

セーヌ氏に対して息子が次のようにいっている。「もしわれわれが不意を襲われなかったら、もっと多くの物事を見ることができたと思う。だけどあの

火の玉たちはわれわれがひくひくしていたのを知っていたようだ」これはインタビュ―全体から突然出てきた感情であるらしい。そしてこれが目撃者た

ちの沈黙の大部分の原因であつたのである。

## テレパシーの応用か

われわれはこの「火の玉」の奇妙な行動を見のがすわけにはゆかない。これこそこのような詳細な分析を行なうための最初のチャンスであろうと思われるからだ。その出現の理由は今のところ未解決のままである。今もなお行なわれている長い詳細な調査の続行中に、たぶんそれがわかってくるだろう。というのは、われわれはUFOに関する知識において一つの分岐点に達したという感じがするからだ。遠からずわれわれが正しいかどうかはわかるだろう。

父親はただ一人だった。しかもこの「火の玉」を見ている。彼がしゃべらないのはそこにだれもいなかったからである。彼は行って懐中電灯をとってきて、小道を歩いて家のまわりを歩き、背後から「火の玉」に襲いかかるうとした。そして行動に移ったけれども小道の所へ達すると「火の玉」はそこにいた。見たところ彼を待っていたようだ。そこで彼は計画を変えねばならなかった。相手は彼の意図を予測していた、計画を妨げたらしい。われわれはこの一つのチャンスを見のがせないが、しかし正確に言えば、同じ事が同じ状況下でまた起こったのである。そのとき彼が畑の小道へ近づくの物を

体はこぼんでいる。このような考えは大胆かもしれないが、われわれはその「火の玉」が目撃者の意図をすでに知っていたと考えざるを得ない。本人は言葉を発したわけではない。したがってこれは彼の想念を読みとったテレパシーの問題である。ファンタスティックな説かもしれないが、この物語のすべてが大体不合理なのである。しかもこれは十分に真実と思われる事件なのだ。

しかもこの「火球」は何か動機のあるような様子で行動したように思われる。そのために分析するのがいっそうむづかしいのである。火の玉が父親の行動に影響を与えたがっていたと推測するのは危険かもしれないが、彼の予定の計画の遂行を二度も妨げたことは認めねばならない。そのため父親はふたたび家へはいつて息子を呼んだ。これが考えられる動機だと思つてよいだろう。息子は一度でもコンタクトしたならこの現象のほんとうの目撃者になるところだった。そうすればこのUFO現象は広範囲な目撃事件となり、他のUFO事件で知られているような余波を息子に与えることになるだろう。

これ以外に犬の問題が残っている。事件当時に二匹の犬が家にいた。犬たちは中庭で眠っていた。家から十五メートルばかり離れた家畜小屋のドア

の近くである。

父親は寝る前に一階の窓から空を見つめていた。そのとき彼は「砲弾型物体」と「火の玉」群の行列を見たのだが、これを彼は「ショー」と呼んでいる。そしてその内の一個が家に近づいてくるのを見たのである。そこで次のような質問をしてみた。

——あなたが火の玉群にむかつて大をけしかけたときに、犬はどうしましたか？ あんたはそのときそこにいたんでしょう？

父親「おれはそこにいた。犬たちは庭の端のあのドアのそばにいた。二、三メートル離れていたな。そのときおれはあの「ショー」を空中に見たんだ。そこでおれは思った。『何が起るんだらう？ 庭へやってくるのかな、それとも家の中へはいるんだらうか？』とね。それで犬たちについてやつたんだ。『追っかけろ、追っかけろ！』すると犬たちは追いかけて柵の所まで行つたよ」

——ブドー畑の隅の所まで？

父親「そうだ。ブドー畑の隅の所までだ」

——それでも犬たちはそんなに近づいたんじゃないでしょう？

父親「そうだ。一メートル半ぐらいかな……一メートル半だ」

——犬たちは光に照らされなかったの？

父親「そう、そう……おれは始めに犬を見た。するとすぐ光が消えたよ。

## 犬たちは恐れなかった

どうもこの犬どもの反応を推測することはむづかしいが、家畜に対してやつたかもしれないように主人の一言で「火の玉」に対しても飛びかかろうとしたことは認めねばならない。犬たちは恐れているようではなかった。これは彼らに見える物が異常でなかったためで、怒り狂うほどの物でなかったからだ。これは一つの重要な証拠となるかもしれない。

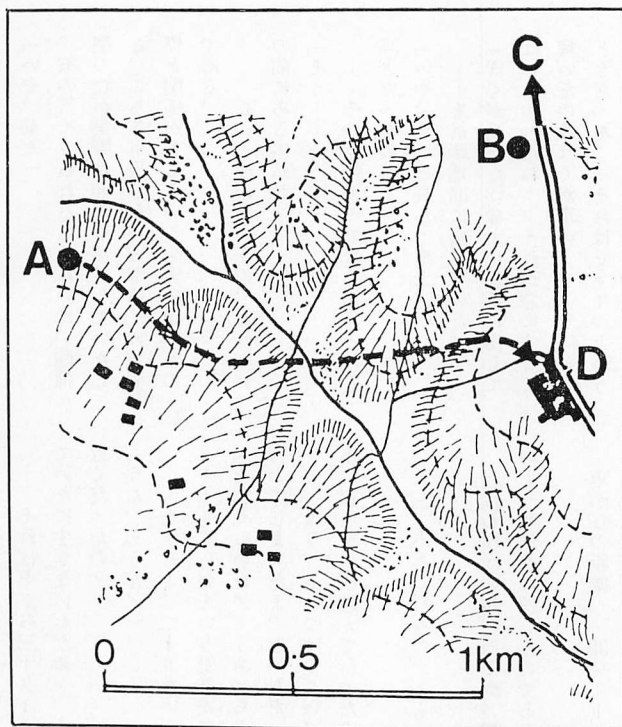
## 砲弾型物体は二個？

一九六七年一月六日木曜日の事件についてはすでに述べた。それはちょうどその後の一月十一日水曜日に頂点に達した一連の目撃事件の序曲であった。

われわれが確かめ得たところでは、一月七日、九日、十日に「砲弾型物体」と「火の玉」群が西方にふたたび見られたけれども、これは特記するほどの事件ではない。

われわれは一月十一日夜の事件に関して息子とのインタビューを再開したが、偶然にも一つの新しい事実を発見した。「砲弾型物体」がその位置を





A. 砲弾型物体の位置と火の玉群の進行したコース  
B. 砲弾型物体の位置 C. 車で行ったコース D. 農家

えたかまたはそれが二個あったということである。

息子「水曜日にぼくは砲弾型の物が家のそばにののを見た……以前の物と同じかどうかはわからない。車に乗る前にそれが西の方にののを見たからだ……車に乗ってから北の方にののが見えた……同じ物かどうかはわからないよ」

——くわしく聞こうじゃないか。水曜日にきみは他の物体を見たのと大体同じ場所その物を見たんだね？

息子「そう。とにかくぼくは毎晩外へ出たんだが、そのあいだは出るたびに

光る物を見たんだ」

——いつも大体に同じ位置に見えたのかね？

「うん。水曜日もそれを見たんだ……その日ぼくは外へ出た。横道の方へやってくる火の玉の群れの一つがいたんだ。するとそれは広い道路のまん中とまった。それでぼくは家へ引き返して二階へ上がった。するとその火の玉がまだ道路のまん中にあるのが見えるんだ。そこで車に乗ることを思いついたら……」

その晩の夜歩きの話にはいる前に、息子の話のポイントに注目する必要がある。

ある。この地域ではその季節になると人々は夕方早く寝るのである。あちこちで暗闇の中を灯火がついては次々に消えるのが見られる。目撃者によると火の玉群は近隣の灯火がすでに消えてしまったあとに始まったのである。

## 現場検証

われわれはシャセーヌ氏の車に乗って、息子の車が走ったルートをたどって行った。約三キロの距離である。

——その晩に起こった話を話してくれない？

息子「ぼくは車に乗った。すると横道の方から火の玉がやってくるのが見えた。広い道路のまん中にどすんと降りたんだ……それからまた動き始めた。その火の玉はぼくの車と同じスピードを保ちながら車についてきた」

——うしろからついてきたの？ それとも前方を動いたの？

「前方にいたよ」

——きみの車に先行したのだね？

「そうだよ」  
車が発する。

## 砲弾型物体の大きさ

「ぼくが砲弾型の物を見たのは、あの標識の反対側だった。それでぼくはちょうどその場所とまった。エンジン

をとめて……そして砲弾型の物を見た……その所だ……ぼくの左側だ……すごく大きく見えただ」

——その池の前かね？

「いや、そこじゃない。そうだな、そこから十メートルぐらいだね」

——どこから？

「その標識から……十メートルぐらいか、もうちょっと先かな」

——あの木よりも大きかったの？

「うん、ずいぶん大きかったよ……そしてぼくの前を走っていた火の玉はそこでとまっていた……広い道路のほとんどの端の所だ」

——池のそばのあの木が見えるかね？ それとその前にある別な三本の木が……

「三本の木、うん見えるよ……ぼくはそこで火の玉を見たんだ……そこに一個の玉がいた……白い玉だ……ぼくの前方を動いていたのと見たところ同じ物だった……その池の上にいた……まもなくそれはそこにいた。それでその玉が砲弾型の物の中へふたたびはいるうとしていたのだという印象を受けた」

——きみはその三本の木とあちちにある一本だけの木の位置から見て砲弾型の物がどのあたりにあったと思う？  
「そうだね……ぼくのいる場所から見て、あの一本木の前だったね」  
——あの一本木の横かね？

「いや、前だ」

彼の答にみられるためらいは、砲弾型の物が実際は非常に接近していたこと、こちらが発した質問が遠くの境界標と関係があるという事実によるものである。

———ここ池のあいだの、われわれの前にある木かね？

「そう———そうだ」

———その砲弾型の物はあの木と同じ高さだったの？

「いや、ずっと高かったよ」

———それは地面に接していた？

「ぼくが受けた印象では地面に接してはいなかったね……それが急にすぐく輝いたのはぼくが車のドアを開いたときだった……それはヒューッという音を出し始めて、それから飛び上がった」

この間ずっとわれわれは広い道路のまん中にいた。目撃者のいた位置にいて、そこから見られたと思われる物体を想像したのである。続いてわれわれは牧草地へ行き、目撃者は砲弾型の物がいたと思われる場所でわれわれをとめた。

———砲弾型の物と地面とのあいだは二、三メートルあったのかね？

「いや……ちょっと待ってね……約二メートルだね」

———人間ぐらいの高さかね？

———それは車から三十メートル離れていたにすぎないんだね？ そんなに近くだったの？

「うん、そうだ」

———とすると、二十五ないし三十五メートルぐらいという意味だね？

「それぐらいだ……あっちの方向へ行ってしまったよ、あっちだ」

———ほう、そいつはすごい！ あの木の頂上を飛び越えて行ったのかね？

## 巨大なロケット？

われわれはいろいろと測ってみて次のような結論に達したのである。

|         |           |
|---------|-----------|
| 車からの距離  | 35メートル内外  |
| 砲弾型物体の径 | 2.5メートル内外 |
| 地面からの距離 | 2メートル内外   |

———それほど近くにいたのなら、物体の高さを推定することができるだろう？

「ぼくには巨大な物に見えたよ」

われわれは広い道路の端へ引き返した。一本の木が約三十五メートルむこの端に立っている。目撃者はその木とくらべて物体の大きさを測り、われわれは彼の話にしたがって、結局その砲弾型の物体が十三・六メートル内外の高さがあったという結論に達した。

## 砲弾型物体の特徴

———それじゃひとつきみから三十五メートル離れていた砲弾型物体についてくわしいことを話してくれないかね。きみがドアを開く直前だ。

「その砲弾型の物体はすぐく輝いていて、先端がとがっていたよ……周囲にえび茶色のボーツとした輝きが出ていた」

———てっぺんの所に？

「てっぺんの所だ」

———そのまわりに火の玉群がいたのかね？

「うーん……いや、いなかったな……そのまわりには腕も出ていなかったよ……沼地の上にはいたあの火の玉、ぼくがすぐく速く飛んでくるのを見たあの火の玉がいたね。そしてそれが砲弾型物体の中へまたはい入るのだという印象を受けた……だが断言はできないな」

この目撃者は前述の二回にわたる説明で述べた、しかもこの火の玉と同様に砲弾型物体の中に溶け込んでしまったように思われた別な「火の玉」のことを忘れていた。われわれはこのとき彼にこの火の玉のことを思い出させるのを忘れてしまった。天候が悪いので書類を広げるのは適切でない。この質問中でなく別なときに彼は砲弾型物体

が完全にスムーズな表面をもっていて窓や入口などはないと述べている。

## 強烈な白色の輝き

———このえび茶色の輝きだが……きみが到着したときには輝いていたのかね？

それともあとになって輝いたの？

「いや、いや、ぼくがそれを見たとき、それはそこにいたんだ。先端のまわりにえび茶色の輝きが出ていたよ」

———砲弾型物体は白色だった？

「そう、白色だ」

———火の玉群と同様だったの？

「そう……だがもつとすぐく輝いていたな……すぐく輝いていたよ」

———底の所は？ 底のまわりに何かが目についたかね？

「飛び上がったときに目についたよ」

———飛び上がる前は何も目につかなかったかね？

「そう。飛び上がったときにモヤのように見えたね。緑色がかったモヤだ」

## 砲弾型物体はかたむいて飛び上がった

———飛び上がったときは垂直だったかね？

「始めは明るいモヤのようで……それはぼくがちょうどドアを開いたときだった……ものすごく輝いてきた。そ



れから車のタイヤがきしむようなキューツという音をたて始めた……と同時にものすごく輝いてきて、信じられないほどのスピードで飛んで行ったよ」

——どんなふうにして飛び上がったかね？

「そうだね、かたむいたね／」

——かたむいた？ 最初は垂直で、次にかたむいたの？

「いや、いや、垂直で離陸したんじゃないよ。かたむいたままこんなふうにして飛び上がったんだ」

——直線の軌道に乗って？

「そう」

——それがかたむくところを見るとできなかったんだね？

「そう、そう。始めにかたむいたんだ。かたむいてゆくときにそれを見たんだ」

——ぐらついたのかね？

「うん、ぐらついたよ。ひとりで回転したよ。（それ自体が回ったことを意味する）一方へかたむいたんだ。そして飛び上がった……こんなふうにな……こんなふうにな／」

——四十五度の角度で地上でこんなふう静止していたのかね？

「そう。そんなふうだ……こうじゃないんだ」

——いいかえれば、その砲弾型の物体の先端は軌道の方向にむいていてじゃないんだね。

シャセーヌ氏は手紙の中でこの飛行の模様の詳細を分析して、この物語の興味深い点を指摘した。彼はいう。

「始めごろの事件に関して参考になりそうなものはありません。ロケットが垂直に離陸して、それからあらかじめ決められた高度でかたむきながら一定の軌道に乗ることは今日だれでも知っています」しかもロケットの軸はその軌道の方向と同じになる。しかるにこの目撃者はこのようなことに言及してないし、自分がたしかに見たとおりの物について述べているように思われるのである。

## 車と火の玉は

### いつも同じ距離

——そうすると砲弾型の物体はかたむいたまま離陸したあと、きみの前にはまだ火の玉がじっとしていたというわけだね？

「そう、火の玉は……いたよ」

——どれぐらい離れていた？

「ああ／ そうだね……ぎつとあそこにマイル標石が見えるだろ？ ちょうどあれぐらいの距離だった。あの標石のそばだ。そこでぼくはまた動き始めた——自分でエンジンを切ったのかどうかは今おぼえていない——とにかくぼくはまた動き始めたんだ……あの火の玉だが……ぼくは十メートルばかり

動いた。すると火の玉もまた動き始めたんだ」

シャセーヌ氏はまた車を動かして走行距離計を調べてみた。マイル標石の所まで行ってみると百五十メートルを示していた。

——そうすると火の玉は目撃者の車から約百五十メートルほど動いたことになる。目撃者は話を続ける。

「ぼくは前進し続けた。そのときは時速七十キロだった……夜だった」

——その火の玉は直径が一・二メートルだったんだね？

「そう、せいぜい一・二メートルだ」

——その玉は色を変えなかったかね？

「うん」

——同はドライブを続ける。

——どの辺で時速百キロに達したかね？

「もっと行ってから教えてあげよう……スピードメーターは百と百五十キロのあいだだった。火の玉はいつも前方で同じ距離を保っていたよ」

——それは九日の水曜日のことだったんだね？

「そうだ、水曜日だ……ぼくが車でトップスピードに達したのはそのあたりだ……このあたりでぼくは百キロを楽に出していたな」

——たいした加速じゃないか／ そのスピードを長くは保てなかったのだろ

う？

「うん、数秒間だけだ……速度を落とすと火の玉も速度を落としたよ」

——その玉はずっと前方にいて、同じ距離を保っていたのかね？

「そうだ、ずっと同じ距離だ」

——ずっと百五十メートルかね？

「百五十メートルだ」

われわれは広い道路に出た。

## 自動車のエンジンや ライトが自動的に停 止した

「ここだ、ここへきたときにエンジンがとまったんだ……そして円盤がそこにいるのを見た——あそこから降りてきた」

——じゃきみはどこでとまったんだ？ 分岐点の低い方の所かね？

「そう、そこがぼくの車のとまったところだ」

われわれは広い道路の分岐点から二十五メートルの所にいた。

「エンジンがそこでとまった。それでぼくはエンジンも何もとまったままこの位置までバックしたんだ」

——ライト類も消えた？

「うん、ライト類も消えたよ……ね、あらゆるものが突然停止してしまったんだ。エンジンやライトやその他すべて

てのものが……スターターをいじってみたが、ビクともしなかったよ」

以前の説明で彼はルーフライトのスイッチを入れたが、だめだったといっている。

——それで火の玉はまだ前方にいたのかね？

「火の玉は広い道路のまん中でどしんとはね上がった。あのまん中で」

彼の以前の説明では、火の玉はみぞを飛び越えて、約四メートルむこうの車の右手の畑の中にとまったということだった。

## 円盤と乗員が出現！

彼は恐ろしく感じ始めたようである。というのは

「そのとき円盤を見たんだ！ それは降りてきた、低く……その所のへきた」

その円盤は北西から南東へかけてやってきたらしい。以前の説明では目撃者は右側の窓をあけて見たことのない楕円形の物体を見たといっている。そうだとすればそれは彼の右手の方へ通過し、南東へ飛んで行ったはずである。この話の筋が似ているとしても細部はあちこちで異なっている。このことはまたあとで検討してみることにしよう。目撃者は背中にひや汗をかいていた。



——その円盤だが、それはどこにいたかね？

「右手の二十メートルの所だ……草原の上空だ……地面から三ないし四メートルの空間にじっとしていた。ブジョ

うしろの表面に？」

——いいかえれば、きみが円盤がくるのを見たときにライトは反対側にあつたんだね？

「そうだ」

——どんな色だった？

「赤だ」

——じゃ、上側には？」

「上側には二つのドームがあつたよ」

——きみの方から見てその二つのドームは飛行方向に対して横にならんでいたの？ それとも縦にならんでいたの？

「そうだなあ、あの二つのドームは……ふん……こういうふうに見えるかな……一つは前にあつて右側だ。そしてもう一つはうしろにあつて左側だ」

——じゃ、ななめだね？

「そう、そのとおりだ」

——その二つのドームは円盤の楕円形に対してななめに位置していたのだね？

「そう」

——そのドームの位置からみて、うしろのライトは二つのドームのあいだにあつたのかね？

「うん、そういえばそうだね」

——ところできみの描いたスケッチによると、ドームがとがっているようになっているが、とがっていたのかね？ それとも……



「いや、とがってはいなかったよ」

——丸かったの？

「こんなふうだ」(さし絵を参照)

——それで内部だが、何か見えただけ？

「そうだな、内部は……緑色の光が輝いてたようだったな……二つのドームの内部に……ね、これについてはあまりたしかじゃないんだ……ずいぶん暗かった。内部にも外側にも一種のモヤミたいなものがあつた……どっちかわからないなあ……二つのドームの内側か外側か。とにかく二人の……二人の人間らしいものを見たんだ……宇宙飛行士だ。二人とも飛行士のような白でふちどった緑色の飛行服のようなものを着ていたよ」

——二人の人影があつたんだね？

「そう……二人の人影だ……だけどずいぶんぼやけていた」

——人影は動かなかつた？

「そう」

——頭の形が見えたかね？

「うん……たしかにヘルメットがあつたなあ」

——頭の形が見えたんだね？

「うん」

——目か何かは見えなかつた？

「見えなかつたよ」

——服は見えた？

「ぼやけていたなあ……ああ、そうだ、そうだ、見えたよ。白でふちど

した緑色の服だった。そして内部は……緑色のライトで照らされているみたいだった」

——円盤はじつとしていたの？

「ただよっていたね。こんなふうに……右から左へ」

——縦ゆれしていた？

「それがきたとき……降りてきたとき……こんなふうに降りてきたよ」

——横ゆれしなかつた？

「そう。そしてこんなふうに前後にもね」

——縦ゆれと横ゆれの両方かね？

「そう……そこにとまっていた……わからない……たぶん数秒間だ」

## 目撃者はマヒした

——そのあいだ車のドアをしめていたのかね？

「そう、そう……窓をあけたかもしれない……それとも円盤が行ってしまったからあけたのかもしれない……そのとき熱い空気を感じたね。ほとんど……動けないくらいだった。たぶん数秒間は手足も動かなかつた」

——マヒしたのかね？

「一種のマヒだ……おじけたのかどうかわからない。そのときはたしかに恐れれたからね」

——その熱い空気というのは放射線のためかね？

「あそこに標識があるのが見えるだろう。ぼくは聞いたんだ……その熱い空気があの標識を動かすのが見えたよ」

——あの標識かね？

「そう」

——あれが震えたんだね？

「震えたんだ、そう、そのとおりだ！」

——こっちの標識はどうだった？

そこには二つの標識がある。一つは同じ側の、われわれの向い側にあり、もう一つは広い道路の反対側の左手にある。振動で震えたというのは左手の方の標識であつた。

「わからない……ぼくはこの標識を見ていた……その標識が動いたのを見たような気がするんだ」

——何か音を聞いたかね？

「飛んで行くときにヒューッという音が聞こえたよ」

——砲弾型のときと同じような音だった？

「そんなにするどい音じゃなかったな」

——もつとやわらかい音？

「飛び上がって四十ないし五十メートルほど上昇してから、またサツと降りてきたんだ……」

——そのヒューッという音は変わっていったかね？ それとも同じ高さの音だったの？

「いや、その音は始めはやわらかく、それから大きくなったよ！」

——円盤がふたたび降りてきたとき、音が大きくなった？

「それは何ともいえないなあ……だが、とにかく飛んで行く前にそれを見たんだ……五十メートルほど上昇するのをね、それから落ちるようにサツと降りてきた……そして地上二、三メートルの所に急にとまったんだ……するとものすごいスピードで東の方へまた飛んで行ったよ」

——円盤が飛んで行ったときに色が変化したかね？

「全体がすごく輝いたなあ……まるで炎のように」

——飛び上がる瞬間にもものすごく輝いたんだね。どんな色だった？

「白……白みがかった黄色……黄色に近い白かな」

——下部は？

「全体が輝いていたよ」

——いわば円盤をとりまく光輪だね？

「うん」

——きみの車のライト類は？ みなスイッチをオンにしたままかね？ それらはひとりでについたの？

「そう……それにスターターも作動して、車は正常に動いたよ」

——きみがふたたび始動させたときにスターターは正しく作動したんだ

ね?

「そう、万事うまくいったよ」

## 熱い放射線

——きみの時計はあとでどうなったかね?

この質問に対しては目撃者は答えなかったが、以前の質問では正常に動いていたといっている。われわれが気づいたのは、彼はしばしば自分の記憶を失うこと、思い出そうと努力しても別な話になってしまうことだが、これはわれわれがそこまで逆もどりしないだろうという気づかいのためだろう。

「ぼくは熱い空気を感じた……まるで暑い気候のときのように」

しかしそのときは一月の夕方だった。

——その放射線だが、たとえばこれを真昼の太陽光線にくらべると、同じくらいの強さだった? それとももっと強かった?

「ああ、うんと強かったな。すごく強い熱波だったよ」

——その放射線はからだをつき通すぐらいだったかね? からだの中まで熱くなった? それとも熱く感じられるような空気がからだの周囲にあったかね?

「ぼくの皮膚が……顔の皮膚が……まるで顔が焼けるみたいだった」

——じゃ、それは空気ではなくて何かの内部の熱だね。空気ではなかったの? 空気が吹きつけるのを感じなかった? 皮膚を感じた?

「そう、皮膚だ」

そうするとこれは放射線だったのだろうか? 熱放射線なのか? たぶん電磁気的なものか? ある種の波動の影響に似た、内部影響だけでも外部の表面に与えた刺激である。

## 円盤の出発

「それから円盤が五十メートルほど上昇して、また降りたとき、ぼくはそれが着陸するのかと思った……すると地上三メートルばかりの所に急にとまって、それからまた飛んで行ったんだ」

——急に? それとも次第にゆっくりとスピードを落として?

「いや、いや、まったく急にとまったんだ」

——情性がないとすると、異常なことでだ。

「そうだ、円盤が落ちるのかと思ったよ。それで今度はやったなといったんだ」

——それで、きみの車のライトがついたのは正確にいつだったかね? 円盤が行ってしまったとき? それが見えなくなったとき?

「いや、それはかなり離れていたよ」

：かなりのスピードであっちの方へ飛んで行くのが見えただ。それから上昇したよ」

——そうすると、それは北北西の方向からきたんだね。

「行ってしまったよ、こんなふうにな。それから少しかたむいて、こんなふうに行ってしまった……まるで横になつてすべるように」

——横になつてとは、ドームが横になつたのかね?

「横になつてだ」

彼はくどくどしい説明を続ける。

「円盤が五十メートルほど上昇したとき、停止しなかった。とまらないうでまた降りてきた。左の方へターンしているあいだにまた飛びあがった。すごいスピードで東の方へ行ったよ」

——飛んで行ったらすぐに熱い空気はなくなったのか?

「うん、その瞬間に何もかも正常になったよ」

——そのときどんな感じがした? ほつとしたかね?

——ほつとしたね……車のライトもついたよ。ぼくはスターターを押してみた。すると車は動きだしたよ」

——円盤がどこへ行ったか見ようとしたかね? それとも敗北を認めようとした?

「いや、ぼくは家へ帰ったよ」

——この標識は金属的な音をたてた

といったね?

「ああ……それは震えていたよ……それはたしかだ……あの標識は振動していた」

われわれはその標識をもっとくわしく調べてみた。

## 標識の検査

われわれは目撃者が道路の右側にとまっていた場所にいる。約二十メートル前方には広い道路との分岐点があり、右から左へわずかに登り坂となっている。われわれのいる道路はエナメルを塗った高さ約一メートルの鉄板のパネル類で標識が立ててある。これらは方向を示す矢印のついた長方形のものである。このパネルはわれわれが立っている場所から簡単には見えない。われわれのいる右側のパネルは一部分が草むらに隠れている。振動したというパネルは牧草地の土手にそつたみぞの底の所に立ててある。調べてみるとそれは亜鉛びきの鉄の支柱にとりつけてある。二つの支持金具はワッシャー付きのボルトでとめてあり、そのため標識にかなりのガタがあつて、手で前後に少し動かすことができる。したがって振動説は完全に認められるのである。

ところが目撃者に近いわれわれのいた側の標識は二本の鉄の支柱で地面に

とめてあって、横の動きを調べ出すことは不可能であった。三年もたっていれば磁気効果を調べることは不可能である。

——事件当時にあった標識がこれらかね？ それ以来変わっていないんだろう？

「そう思うよ」

## 砲弾型物体のナゾ

われわれはふたたび動き始めた。走りながら、二つの異なる場所に出現した「砲弾型物体」のナゾを解明しようとして、次の会話から何とかしてその位置をつきとめようとした。

——二つの砲弾型の物があつたとすれば、きみは車の窓からその両方とも見ることができたんじゃない？

「うん、たぶん見えただろう。だがぼくはその一つを見ただけなんだ」

——きみが車に乗って走りだしたとき、その砲弾型の物はここにいなかったんじゃないか？ それともいたの？

「うーん——」

——きみが火の玉を追跡して走っていたとき、その物体を以前に見ていたんじゃないか？

「そう、見たよ」

——この位置で？

「あっちだ」

——そうすると、それ以前の日に出現したのと同じ位置じゃなかったんだね？

「そうだ」

——しかし水曜日にきみはそれがいつもの位置にいるのを最初に見なかったんだろう？

「そうだ、それがその日にもくるのを見たよ」

——それがくるのを見た？

「うん、そのとおりだ」

——それと同じようにかたむいていたかね？

「かたむいていたよ」

——垂直軸に対してかたむいていたの？

「そうだ。それがくるのを見た……」

——接地するのにどんなふうによつた？

「そいつは北の方からきた。いや北西の方かな。右から左へジグザグに動いていた」

——ジグザグに？

「うん、ジグザグに——よくわからないな——ハエミたいだった」

——その場所まで？

「いや……よくわからないな……ときどき左右に動いたよ」

われわれには、目撃者がその動くのに気づかないうちに、それが広い道路の端へ移動したのか、それともその特殊な夜に二個の砲弾型物体が出現したのかは全然わからない。一方、それ

が着陸する様子の記憶は、本人によみがえって、彼はゆっくりとした接近ぶりを話すことができた。

## 事件後の激しい睡眠

——さて、これらの目撃後にどんな事が起こったを話してくれないかね。きみはその後眠るのにこまったといっていたが——。

「そのとおりだ。その後数日たってからだ」

——その後数日たってから？ 目撃したのは一月の始めごろだったから、そのころに眠れなくなり始めたんだね？

「そうだな……よくわからないな……たぶん一週間後かな……正確に思い出せないね」

——どんなふうにかかった？

「突然にそうなったんじゃないよ。……次第にそうなったと思う」

——なるほど。

「それから三月なかばごろにまた次第に治ってきた……そうだね……二十四時間中二十時間は寝たかもしれない。とにかく少なくとも二十四時間中十八時間は眠ったと思う」

——医者にはかからなかったの？

「両親はみてもらえといっただけが行きたくなかったんだ」

——両親は心配したんだろう。

「心配したよ……だけど眠る必要があったただけだ。騒ぐ必要はなかったんだ……目撃したときは……両足で立てないほどだった」

——目が覚めたときはどんなに感じた？

「まったく普通だ」

——普通？ 全然弱ってはいなかった？

「うん、弱ってはいなかったよ」

——まったく普通だったんだね？ ただ一つの相違といえば、もっと眠ることだったんだね？

「そう、正常だ。よく眠ったよ。そんなに眠ったのは初めてだ」

——それは一月十五日から三月十五日まで二カ月間も続いたんだな、相当に長い期間だ、

「ぼくにわかってるのは眠りさえすればよいということだった」

——眠るまいとしてみたかね？

「うん。日曜日に一度だけ……夕方の七時から八時までは眠るまいとした……立ったままでも眠ったかもしれない……」

——コーヒーを飲んでるときでも」

息子が夜の八時にベッドにはいることは異例なことである。

## 意識は正常で

## 体が動かない

息子の話は続く。

「どう説明してよいか(33頁へ続く)」



飛行体がどこからともなくやってきた。私はただその輪郭と、振り子のようにあっちこっちに広がっては引っこんだ光線を見た。その光は空中で止まり……

# ある夜の美しい出来事

バートルド・E・シュワルツ

シュワルツ博士はニュージャージー州シーダグロブにある

エセックス地方病院センター脳波研究所の顧問であり、有能なUFO研究家である。

沈黙しているコンタクトタイ（宇宙人とコンタクトした人）である北ニュージャージー地方のX氏を調査していたところ、私はいくつかの興味ある無関係な資料にぶつかった。それは彼が一九五〇年代後半からの旧友である二名の人について言及したときである。この二人は現在中年であるが、北ニュージャージー地方と東部ペンシルバニアのポコノ山脈における彼らのUFO体験を私にくわしく語ってくれたのである。

その一人B・Cは五十三才のセールスマンであり、彼はまた工業と経営学における大学教育歴をもっているが、一九五八年には六カ月から九カ月の間、円盤問題で非常に活躍した男である。その期間中彼は、あるかなり世間に知られた北ニュージャージーのコンタクトタイの事に夢中になっていたが、その主張するUFO体験のいくつかは、彼にいわせれば臆面もないインチキであり、他のものについては不可解としているようである。B・Cはまた自分自身が、いくつかの関係ありとされているUFO事件を目撃している。彼は四つの異なったエピソードを鮮明に思い出した。彼がもと私の郷里であるモントクレアの出身であり、だいたいに近隣の地域に住んでいた事は、この調査研究を容易にしてくれたのである。

B・Cと彼の妻及び他の家族は三回

ほど私のオフィスにおいて精神医学的インタビューを受け、また長距離通話を幾度か受けたが、それにより彼は頭がよくて正直であること、また精神病のケもないことがわかったのである。彼はずっと軽い糖尿病にかかっている——それは食事療法と飲み薬により快方にむかっている——が、それでもUFO体験は彼の体調が全体に良好のとき起こったのである。彼は常にすば抜けた視力と聴力の持主である。次に掲げる体験の数々は年代順にまとめたものである。

## ●ラジオ

私と妻は、WORのニュース速報を聞いていた。それはいつもの番組を数分間中断して放送されたのである。だが他のだれもそれを聞かなかった。私たちはニュージャージーのモントクレアからブラキミンへと車を走らせていた。そこでは毎週円盤会議が開かれていたのである。私がいつもの番組に聞き入っていると、アナウンサーが割り込んでいった。「英国民はイギリス本土において一機の円盤と交信し、その塔乗員と会談する協定を結んだそうです」

私は妻を振り返って愕然とした。私が彼女に、「今ラジオでいった事を話してくれないか」とたずねると、彼女は私がそれを聞いたのと全く同じ様に

答えたのである。

私はブラキミンに到着したときこのことについてたずねたのだが、そこにいた者たちはその異常なラジオショーを同じ様に聞いていたにもかかわらず、彼らは私たちが聞いた事を聞かなかったのである。私は自分の聞いた事をほとんど信じていることができなかったし、あのような体験をした事は、後にも先にも全くなかったのである。いたずらだとするならばそれは全くありそもないことであつた。

## ●●死の光

B・Cは二つ目の事件に移った。そのコンタクティの十二才になる息子は脳腫瘍で死にかかっていた。両親は医者をあきらめて「宇宙人」からの助言を応用していたのである。少年には死期が迫っていた。友人のロブと私は何かできることはないかと思つて、そこに出向いたのである。

私たちは台所にすわっており、少年は他の部屋に看護婦と共にいた。その看護婦は二十四時間の勤務についていた。病気の少年がそのとき急に叫び、母親が部屋に駆け込み、そのあとを私たちが追った。看護婦は彼の脈をとったが、遅かった。少年はケイレンを起こしていた。そのとき一筋の光が彼のベッドの上に現われはじめたのである。それは青い光で始まった。それは

壁から八インチ(約二十五センチ)ほどの所にあつたのだが壁自体には何らの光をも投じていなかった。それは一本の光の棒のように見えた。そして脈動し、白くなり、薄れていったのである。全体的な光の明示は約一分半続いていた。

看護婦は医者呼びに出ていった。ロブと私はびくびくした。少年がやわらいだとき、光線は白かつたのである。医者がやってきたときまでに光はなくなり、少年は元氣になつていった。私はその光を見たとき、それが私についてまわると思われる視覚的幻影でないことを確認するために視点をわきに変えてみた。だがそれは依然としてそこにあつたのである。私はロブに彼が最後の数分間に何を見たかたずねたが、彼はそれと同じことを私に話したのである。

一条の光が見えた夜、私は光り輝くユニフォームに身を包んだ四人の男を見た。彼らは約三百フィート(約九〇メートル)離れた牧場の丘の上のにいた。彼らは柵の後の暗い木の茂みの前に立っていた。月の明るい夜である。彼らは登り道のふちに立ち、あざやかに輝いていた。もし彼らが飛行練習生であつたならばそれは非常に奇妙でありまた高価な悪ふざけであつたことだろう。病気の少年の母親は私たちといっしょであつたし、その他の子供達は、これを装うにはあまりに幼すぎ、小

き過ぎた。父親(コンタクティ)は家の中にいたし、私たちが最初やってきたとき会つた他の皆も家の中にいた。父親は病氣にかかつている彼の息子を嘆き悲しんでいたことだろう。当夜はひどく寒くはなかった。

この出来事はロブが自分から確認した。そして死にぎわの少年にさす同じ光が、X氏夫妻によつて少し違つた時間、同様な状況下において見られた。彼らはこの情報をみずから提供したが、これには全く当惑していた。

X夫妻は、少年が完全にめくら(すなわち明暗の区別がつかない)になり、脳腫瘍でダメになる前、他の人々が光柱を見たとき主張しているときに彼が自分の周囲に多くの人間が見えた事の次第を思い出した。少年は、「彼ら(幻覚の怪物か?)はオリオン星からの者で、自分を連れ去りに来ているんだ」といつたのである。母親もX夫妻も父親や家族がオリオンとかそのような概念には馴染みがなかつたので、少年がどこからこんな情報を受けつたのかまるきりわからなかつたのであつた。

少年を訪問した人々はみんな彼の死を前にした冷静さとその知的な輝きに感銘を受けた。若干十二才で、また目が見えないにもかかわらず少年は様々な分野にわたつて話すことができた。そして多くの人々が彼に会いに遠くからやってきたが、その中には、あると

きなどワシントン特別区から来た高位のジェスイット僧がいたが、彼は長時間にわたり、私的にその少年と会見した。

X夫妻の話は、少年の母親の三時間にあつた精神医学的インタビューによつて十分に確認されたのである。彼女の物語と体験には、ほとんど透明に見えたり、おまけに宇宙飛行士のように(アポロ16号のその月面歩行はインタビューの聞テレビ放映されていた)はねまわるように見える、光り輝く「人間」にまつわるエピソードが含まれていた。母親の話とB・C、ロブ、X夫妻らが述べた話との間にくい違いはなかつた。

母親は他の個人的なUFOあるいはUFO関係の体験を長々と述べた。彼女は、精神病でも何でもなく、あけつぽろげで正直で、協力的な知性ある中年女性のように見える。彼女とその他の人々のインタビューからみて、ごまかしの要素や、予想される重い精神病は、名の知れたコンタクティである彼女の夫も含めてそんなものは別問題であり、それ自体一つの悲劇的な物語であろうと想像することは筋が通つているように思われた。

いやな生活体験にもかかわらず、その女性の子供たちがみな世間でさしきわりなくうまくやってきたのは興味あることである。母親は、正當な根拠のある、昔の家族ぐるみのUFO体験

を現実的に扱っている。もっと後にな  
って述べた彼女の夫の個人的体験  
——彼女はこのことをごまかしと信じてい  
るが——をも含むUFO資料について  
も、彼女はちゃんと現実面において取  
り扱うのである。もし彼女がそういう  
方向をとっていなかったら、彼女の  
子供がひどいノイローゼになることな  
くすごすことはできなかったであらう  
と推測できるのである。

光の体験に巻き込まれた人々のだれ  
も降神論者でもなければ心靈現象にも  
通じていない。とにかくそのような事  
にはなじみがないのである。

電話での会談上、病気の少年の診察  
医は、光のエピソードの事など知らぬ  
と主張した。おそらく彼の妻君が、あ  
の公表されたコンタクトティーの途方  
もない物語にはなはだしくまどわされ  
たために彼はこれらの主張されたUFO  
関係の出来事に関連するものはみなた  
わごととしてかたづけしてしまったので  
あらう。

超心理学者カリス・オーシスは多  
くの臨終体験を注意深く分析してきた  
が、その中のいくつかはおそらくこれ  
と類似したものである。彼の実例によ  
れば、死ぬ一歩手前の人間は幻を見る  
が、それは他の人にはめったに見えな  
いだけのことなのである。彼の例のど  
れ一つとして、立会人が様々な状況下  
において様々な幻影を見るような事は  
ない。しかしながら、オーシスはフイ

ジカル・リサーチに対してケンブリッ  
ジ学術協会による面白い実験を引用し  
ている。コーネル氏は白い衣服を着て  
幽霊に仮装し、次に交通のはげしい道  
路から見える明るい墓地の中で歩い  
た。彼は次にある混雑した劇場で映画  
が上映されている最中にスクリーンを  
横切って歩いた。そしてそのあとで輝  
く布を用いて野外パーティーの場で仮装  
をしたのである。劇場の観衆の三十二  
パーセントはまったく彼に気がつか  
なかったし、気がついた者でも彼を幽霊  
とは思わなかった。野外パーティーに  
おける十六人の観察者については、た  
だパーティー一人（彼はアルコールの  
影響下にあったかも知れなかった）  
がコーネル氏を幽霊と見間違えたので  
ある。

UFO資料と、特に宇宙飛行士のよ  
うな歩き方をする光り輝く姿を見ると  
いうUFO関係の多くの目撃経験の両  
方に対する適応性は光柱と同じく明白  
である。消極的に予想する人はだいた  
いそういう経験を経験する人は否定  
しがちだが、それだけさらに意味深長  
にリポートされるはずのものを何が残  
しがちである。それで、UFO経験は  
そんな無意味なものも報告するなんて  
などとしれば嘲笑をうけるので、控  
え目に報告されるケースが、悲しいこ  
とにオミットされている奇怪なデータ  
の範囲にまでもわたり、誇張して報告  
されたケースと同じくらい多く存在す

とすることがあり得るのである。  
オーシスの話にはUFOを暗示する  
ものはみじもないのに、人によって  
はUFOと超心理学との可能なつなが  
りについて考えるかもしれない。しか  
し可能性を考えたり問いを発しない  
で、いったい解決の糸口など見い出せ  
るものだろうか？

## ●●● 峡谷

B・Cは次に個人的な目撃を思い出  
した。

この事件は死の光を経験したときか  
ら六週間ほどたったある冬の夜遅くに  
起こった。雪が降っていた。私たちは  
東ペンシルバニアのボコノ山脈のある  
孤立した地域にあるエアリ山ロッジの  
近くにいた。私たちのグループは火の  
燃えさかる部屋にいた。そして仲間の  
一人を催眠術にかけて実験することに  
きまった。うっとりしたとき彼は、そ  
の地帯でUFO活動があるだろうから  
私たちに峡谷に行くようにといったの  
である。だがだれも直通ルートを知ら  
なかった。ロブと数人の他の人々、二  
三人の夫人と私は峡谷に向かった。雪  
が降っていた。あのコンタクトティーは  
私たちと一緒にではなかったし、私たち  
のやっていた事や突然私たちが計画し  
た事などは全然知らなかった。私たち  
は淵に立ってロブとホテルの事務員が  
何がそこにあるか見に降りている間中

谷川をのぞき込んでいた。彼らが峡谷  
の底のきれいな場所に十二フィート  
（三・六メートル）ほどはいったと  
き、一人の男が、おそらくそばの茂み  
からだろう『ロブ、きみと一緒にいる  
のはだれだね。恐がることはない』と  
いったのである。ロブと事務員は恐怖  
して走りもどって来た。ロブはほとん  
どに衝撃を受けていた。そのとき光体  
の運動が始まったのである。

光が地面から飛び上がり、垂直に打  
ち上がった。頂上はするどかった。そ  
れは約十二・十五フィート（約四メー  
トル）の高さであった。それからとが  
った先端は下がってきて、楕円形の白  
い光となった。それは突然垂直の矢に  
もどってそして消えてしまった。それ  
は何とも驚きだった。私はそんなもの  
は一度だって見たことがなかった。も  
しこれがいたずらならば数千ドルもか  
かったことだろう。翌朝ロブと数人の  
他の仲間が足跡を探しに降りていった  
が、鹿の足跡があるだけで何もなかつ  
た。峡谷の底を流れるがごとく続いてい  
る。地面は柔らかで雪が少しある。光  
の仕事が始まる前に雪はやんでいた。  
男たちは木の先端が破壊されており低  
い大枝の皮はくずのようにひき裂かれ  
ていたと報告した。何かが打ち上がっ  
たのに違いない。

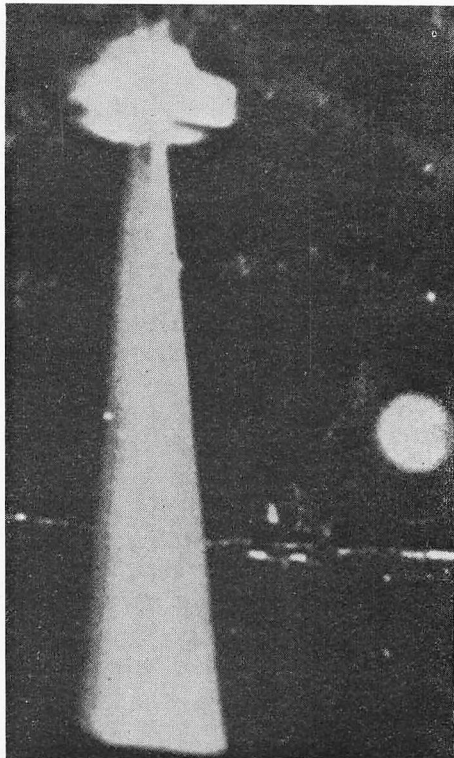


# アーチボルドの円盤写真

これはB・Cによって述べられた四つの事件の最後のものである。

これらの写真は一九五八年にペンシルバニア州のアーチボルド近くで私が見たものを示している。ロブと写真家と他の数人と私は夜遅く車で走りまわっていた。だれかが円盤活動が起こるからアーチボルドに行くようにと私たちにいったのである。それは月のようなクレーターが沢山ある孤立した露天掘りの採鉱場で、夜は気味の悪い所である。まわりには湖などはない。地方の町からやってきたアマチュア・カメラマンが写真をとったのである。彼は三脚をもっていなかった。

「飛行体はどこからともなくやってきた。私はただその輪郭と、振り子のようにあちこちに広がっては引っこんだ光線を見ただけである。その光は私たちの方へはやって来なかった。光線は空中で止まり、二度と地面にまで降りることはなかった。音はまったくなく、それはたった二三分続いただけである。私たちは何の予告も受けなかった。肉体に感じる影響は全然ない。それは真夜中ごろ起こった。地面に雪はなく、月の美しい夜であった。



私の友人のロブと二人の者が私と一緒にであり、同じ事件を目撃したのである。ロブと私は一年半ほど経ってから一連のプリントを得、すぐにそれが私たちが実際に見たものであることを認めたのである。FBIがネガを取りにやって来たが、その写真家はすでにそれらを安全な貸金庫に入れていたのだと話を聞いている。彼は後になってから、求める人にそのプリントを流したのである。あいにく私は正確な日付やカメラ、フィルム、タイミングなどのくわしい資料をもっていない。これは私の生涯で、そのような近い距離から円盤を見た唯一の時である。あるときなど数年前だが、モントクレアで私はすばやく動き、めずらしいジグザグの偵察飛行を演じる数個の星のような物体を見た。

B・Cの写真は、UFO写真家であるオーガスト・C・ロバーツに渡された。彼は本物とにせ物とを含めて一万五千枚以上のUFOとUFO関係の写真を持っている。ロバーツはB・Cの写真四枚が以前発表されたものであることを認めたのである。その写真は一九六六年ワナキー貯水池（ニュージャージー州）上空に出現した円盤の騒ぎとごたまぜにされてしまったのである。あの四枚の写真は一九六七年にどこかで発表されたのだ。もつと後になってそれらは最近のワナキーの目撃事件と結びつけられたのである。一連の写真の第五番目の部分のみが発表されるべきである。完全な五番目の写真は、まだ未発表であるが、これはオーガスト・C・ロバーツのファイルからのものである。丸い白い部分（人工のものか？ UFOか？）に注意してほしい。

ロバーツによれば、その五枚のUFO

写真とは別の写真家によって特別なUFO刊行物の編集長に提出されたのだが、その人物は匿名を希望したという。いっしょうけんめい探したあげく、ロバーツはワナキーの写真をとったという写真家をついにつきとめたが彼はこの男があつた写真を全部とったのか、一部分撮ったのかについては決定的に証明することができなかった。最初にその秘密の写真家は、彼の以前の同業者二人が（その一人もまた光線が水面を打つを見た）職を失ったので自分の写真を認めるのを拒否したのである。

ロバーツは写真家を職業としており、円盤写真では先駆者であるが、彼には透明に見える円盤の光線が技術的な方法でどうやって複写されるのかわ解できなかった。第五番目の写真はおそらくワナキー貯水池上空で撮られたものであろう。ロバーツによれば、背景の山と水とが実際の場所に一致しているからである。これは他の四枚の写真とは似ていない。その上ロバーツは、これらの特殊な円盤写真はニュージャージー州のホプタコング湖近くから報告されたUFOすなわち一九六六年にオットー・ブライランドによって発表され各新聞に出された絵と似てはいないかと思っている。

B・C、ロブ、彼らの妻そして他の人々が一九五〇年代後半からどれも同じ四枚組の写真を所持しているし、そ

してこれらの円盤写真が、彼らがその UFO を実際に見たとき、彼らと一緒にいたアマチュア写真家から直下に入手したものであるから、ワナキの円盤写真とされている四枚が実はワナキのとはまったく違い、もっと以前のボコノにおけるそれであることは十分ありそうなことだ。ワナキ記事の原文は、その写真家が彼のネガを没収されることを心配していると述べていて、この記述が、B・C やロブが自らもたらしした話と符合しているため、いろんな仮説が考えられる。すなわち、その写真家は、自分の体験に恐れをなしてしまい、そしてその円盤が何だろうと彼の写真を盗もうとやっきになるような事ならすべて恐れを感じたのである。しかし安全な数年間が経過した後、彼はそれらがかなり世に知られてタイムリーであったワナキの騒動からのものであるというふれ込みで雑誌に直接に売りつけることにより利用したかもしれない。あるいは彼は間接的に働いて、より大きな真実性と可能な利益との両方を得るために地方の仲介人（多分第五番目の興味をそそる写真を撮した男だろう）を通じて扱い、そして自分で匿名を広げてしまったのかもしれない。

そんなにも多くの人が自分たちの UFO 経験の話をするのをいやがったりまた容易におびえたり嘲笑に屈したり、職を失ったりする人がいるのは不幸であるが理解できる。だがこれは問題のほんの一部分であり、不可解で不合理で心を傷つけるような円盤問題の局面と真剣に取りくむならば、そういつた必ずしつこくくつついてくる種類のものもいつか明るみに出すことができるのである。

この例にみられるように、最終的な解答は望み得ないけれども、多くの欠点があるにしてもこの証拠が有しているすごい性格のためにある種の報告の下調べをすることが正当であるように思われる。おそらくこのケースは戸棚や机の引き出しに隠されている、資料という財産を説明しただろう。このような場合における多くのデータはそのまま受け入れることはできないが、それでも無視することは愚かであり、探究をすればそれは挑戦である。

H・W は病気の少年のハイスクールにおける友人であるが彼はコンタクトの父の父親が宇宙人と会って援助を受けるために牧場にその少年を運んでいった事の次第を思い起こした。少年は脳腫瘍でめくらになっていたので宇宙人を見ることができず父親は叫び声を上げて彼の息子をひっぱらいたのである。これにより H・W はその父親をいかさま師と感じた。だが、この不幸なエピソードを表面的に詮索しただけでも、もっともともらしい仮説が他に二つ考え

られるのである。(1)その父親は宇宙人の幻覚と妄想をもっていた。(2)その父親は実際何かを見たのであり彼の体験を少年に分かつことができないのに腹を立て失望したのである。

私が数年後に行なった匿名の物理学者（プリンストン在住の哲学博士、長年ある大学の物理学部における教授と学部長を務めている）とのインタビューは、ニュージャージー郊外の峡谷（公表されたコンタクトの家の近く）における直径三フィートの無音の円盤を見たという彼の似たような体験を確認した。その円盤はおよそ十五分から二十分にわたり変光し、六フィートから八フィートの距離で観察された。それに関連した人の知性、費用そして技術的な困難さのために、いたずらであるということとはありそうにないように思われるが、それを完全に除外することはできない。実は、その物理学者はこの経験を彼の生活と職業に重大な影響をもたらすものと考えているのである。それは彼の好奇心を刺激した。しかし数年間彼が UFO 体験をもつ多くの人々とインタビューしてきたにもかかわらず、彼の同僚は彼の私的な UFO 体験が含まれていないことを知らなかったのである。峡谷におけるエピソードは、またあのコンタクトの死につつあ

た息子の友人である H・W という若者にも目撃された。H・W、彼の義理の父（新聞記者）そして彼の義理の母親、彼らは皆あのコンタクトの公表した奇怪な話すべてをよく知っていたが彼らとのインタビューは、その物理学者の話を、いくつかの省略（つまり、H・W はさらに詳細を語ったのだー『小さな光体が円盤からでてきてそして旋回した』）を考慮して、確認したのである。記者と彼の妻は、私の大学時代のルー・ムメイットのハイスクール時代の同級生であり、私をよく知っている彼の両親（精神科医と主婦）の友人に当たる。X 氏夫妻とコンタクトの以前の妻はそろってこの事件の要点を思い起こした。そして彼らは、そのコンタクトが十分な手腕も電気学の知識も財力もあるいはそんないたずらを行なうのにうまく適するような友人もないので、もしそうだとすればどのようにして模造品をつくることができたのかわからなかった。これらの人々（そして私が別の事である時に見た数人の警察官でさえ）によれば、このコンタクトの後でやったインチキの数々は容易に発見されおまけに非常に粗雑なものであった。

ロブは私がインタビューした時、目に見える位のショックを受けた。そして彼は X 氏が所持する変化した

リチョンぎれていたりする光線を伴った例のUFO写真を調べた。ロブはX氏の写真など一度だつて見たことはなかったが、それらは彼が一九五八年ペンシルバニア州アーチボルド付近でB・Cと共にいた時実際に見たものと、そして彼自身が持つ一連の写真とに似ていたのである。ロブがその時語った種々のUFOの経験は異常であつた。例えば、彼は幾度かの機会に、起きて着換えて全く予期もしない場所にドライプするようになると夜中のテレパシクな印象を受けとつた、そしてその場所では彼は似たようなテレパシクな印象を受けたと称する他の数人の者に会つたという。その時ある場合など、

ほんの短い時間が経過する内に彼らは皆光を放射する木ぐらゐの高さにあるUFOを見たのである。彼はまた別の時(複数)にいろんな場所にテレパシクに導かれていつたが、そこで彼は水分をなくしたカラカラの野菜や果物や木の実を発見しそれらに水分を与えるとすぐさま体裁を取り戻して味も新鮮な食物になつたという。これは乾燥あるいはフリーズドライの野菜が市場に出回つて利用に供されるずっと以前の事である。ありうる不利な評判が彼の職業に及ぼす影響のために彼の名前が使用されたりインタビュースれたりすることさえいやであつたにもかかわ

らず、彼と彼の妻とはかなりの話をしてくれた。他の面白い一致は、はるか遠くのニュージャージーからやつてきたロブが、私らの夏の別荘の所にいる私の妻の友人の隣人の、義理の兄弟であつたことだ。彼女のおかげで、このインタビュースが整理されたのである。

ロブと彼の妻の簡略な精神医学的資格検査は、UFOに適するどんな精神病理学も示さなかつた。彼は会社では成功した、また尊敬されているビジネスマンである。しかしながら、この場合も他の多くのUFO関係の目撃談におけるのと同様にして精神医学的調査を続けたのは望ましかつたと思う。どんなデータでも追加すればその主張や精神動力など超常的要素とのつながりの正しさに光を投げかけるかも知れないのだ。肯定でも否定でも、どっちにしろ将来の可能性を秘めたその情報は決定的でありうるのだ。それは短時間の暗示的なインタビュースによるどうなつてもいいようなやり方や、ウソ発見機を用いた検討、電話によるインタビュースなどで解決するよりも、はるかに複雑な問題である。臨床的な暗示による方法がこの推測を確証する。すなわち時間をかければかけるほどその印象は確実になるのである。

私が研究したもう一つの例で申し

立てによればFBIによつて没収されたというUFOフィルムを含むものがあるが、それは一九六二年九月二十日木曜日早朝に起き、(パシフィックヘラルド紙六二年九月二十一日号とその続く号)そしてふたたび金曜日の午前三時四十五分にニュージャージー州ホーソン地区のブレイエンの石切り場において夜警のウィリアム・ストック氏によりおよそ二十五分間空に光り輝く物体が見られた。後者のエピソードは四人の警官により確証された。

続く数回の機会に多様な光を放つ明るい物体が朝早くストック氏及び他の多くの者によつて石切り場で再び見られた。一人の写真家がその輝ける物体を約十八フィートのカラー映画フィルムに撮つた。そして彼が後にその夜警に語つた所によれば、フィルムはFBIから来たのだと主張する者達により没収されたという。ストック氏は語る。『その物体は空間にぶら下がり、何の音もたてず、あたり一帯を照らし、端から端へ、上昇したり下降したり、ジープのヘッドライト光線から出てきたり、素速い運動をした。石切り場から機械を抜けて整列された数千の赤い微粒子があつた。これに続く一日半の間私が近づいたり触れたりする物すべてにスパークが生じた(静電気だろうか)。私は医者には見て

もらつてない。』この体験談は一九七一年一月十四日ウィリアム・ストックの電話のインタビュース、彼の以前の隣人ロディー(ニュージャージー)との直接インタビュース、彼の以前の雇用主の息子との電話インタビュース、及びその雇用者の息子によつて親切に与えられた、当時のいくつかの話のリーディングにより得られた。ストック氏はずっと信用と責任ある職についている。精神医学的資格検査の時彼は過去あるいは現在の情緒面における病を有利にするような証言をしなかつた。

トーマス・オルセンは一九七一年一月三日メリーランド州バルチモアでの東部UFOシンポジウムの彼の講演、『百六十のUFO報告の共通の特色』において、一九五六年十月九日オハイオ州スプリングフィールドにおけるUFOエピソードを報告している、『それは幾度もはねて、まっすぐ飛び、鳥のように群れる赤い物体を伴ない……』

#### 参考文献

- 1 M・J・キンビオン・UFO二十世紀最大のミステリー(一九六八年ニュージャージー州シナミントン)第十二章「他の異常なる人物、北ニュージャージーのX氏」六十一頁
- 2 カリス・オーシス「医者と看護婦による死床観察」一九六一年ニューヨーク、超心理学財団八十二-八十三頁
- 3 ブラッド・ステガー、オーガスト・C・ロバート共著「外宇宙からの敵・九十枚の驚くべき写真」一九六七年ニューヨーク、アワードブックス、二十四頁



## 科学トピックス

月は生きています？

### ●月に噴火口を発見

従来月面のクレイターは火山活動によるという説とイン石が衝突してきたという説の二通りがありましたが、アポロ17号が月探査の第4地点であるショーティ・クレイター付近で二つの噴火口を発見して、これにより過去に月面に火山活動があったことが決定的に証拠づけられました。またサーナン船長とシュミット飛行士はオレンジ色の土で覆われた広い地域を発見したため、NASA(米航空宇宙局)の科学者は火山から噴出したガスが岩石を酸化させてできた酸化鉄の色かもしれないといっています。そうだとすれば月には酸素が存在した時代があったことになり、これまでの月の歴史はかなり変わ

ることになります。

### ●怪光も発見

またアポロ17号のシュミット飛行士は、暗黒の月面に怪しい光がチラチラしているのが見えるのを目撃したとヒューストンの宇宙センターに報告しましたが、翌日(昨年十二月十一日)には司令船のエバンス飛行士が北西部のクレイターで更に二つの怪光線を見ました。このナゾの「光」の正体については原因が不明です。

### ●月面地震計が波動を記録

アポロ12、14、15号が月面に残した三個の地震計の内、14号の地震計は一年間に千八百個、12号は六百個の微小な地震を観測しました。このほとんどは不規則ですが、一部分の地震は一月の周期をもっているといわれています。と考えると考えられますが、そのエネルギー源は不明です。し

かしこれからみても月は死の天体ではなく現在も生きていっているという説が有力になるうとされています。

### 火星も

呼吸をしている！

### ●マリナー9号が水蒸気と火山活動を発見

今年二月に火星に接近したマリナー9号による観測の結果、火星には火山活動によってできた多くのクレイターが存在していること、水蒸気の影響を確認して、南極地帯に大量の水が氷結しているらしいことがわかりました。しかも高い山頂付近に明るい白い雲が集まっていることも判明して、米国立地質研究所のマザースキー博士は、今でも火山活動が続いている可能性があると述べています。これまで火星は死の惑星と考えられてきましたが、マリナ

ー9号の観測により、地球ほどではないが月よりも活動的な惑星であることが明らかになりました。

### ●火星に生物が存在する？

マリナー9号はかずかずのすばらしい発見をしましたが、そのなかでも特に目立つのは分光計が南極上空に水蒸気のあることを確認したことです。水が存在すれば生物が存在する可能性もあるわけで、

このためマザースキー博士は、火星はこれまで生物に適した環境かどうかを調べる程度であったが、現在は生物自体の存在を調査する段階にはいったといっています。

ただし今までに知られている火星表面の温度は地球のそれよりもかなり低温のため、生物がいるにしてもバクテリア以下の生物ではないかという憶測の域を出ていません。

### ●まだナゾが多い

しかしまだ多くのナゾも残っています。たとえば火星の赤道付近には暗い色の部分がありますが、望遠鏡で観測してこの暗色部が季節とともに変化して広がったり狭まったりすることがわかっていいます。なぜそうなるのかはまだ不明のままです。また火星全体が赤く見える理由も未解決です。

### ●異常な状態が発生中？

結局マリナー9号が地球へ送った多数の写真を分析した結果、火星には明らかに活発な表面変化が進行中で、月面のように化石みたくに凍結した惑星とは考えられないとアメリカのジェット推進研究所はいっていますし、何か異常な状況が発生しているのかもしれないと同研究所のロバート・ダーブ博士も語っています。

連載 ノンフィクション

# 神々の戦車(1)

エーリッヒ・フォン・デニケン

南米の奥地に眠る太古の  
不思議な遺跡のかずかずは、  
現代の考古学で解明できない  
ナゾを秘めている。  
これらは遠い昔に  
別な惑星から来た“人間”と  
関係があるのではないだろうか。  
南米を探検して  
このナゾに取り組んだスイスの考古学者  
エーリッヒ・フォン・デニケンは  
次々と驚くべき事実を明らかにしてく。  
これはUFO問題に関連した  
すばらしいドキュメントである





神は宇宙人であったか？

世界中には考古学、歴史学、宗教などのありふれた説では解明のつかない不思議な廃墟や信じられないような事物がある。

世界中の宗教の聖典に、火のような戦車に乗って飛来し、またやって来ると約束する神々の物語が含まれているのはなぜだろう。引力のグラフィックな説明のついた宇宙船による旅以外の

何物でもない記事が古代のサンスクリットの経典に出ているのはどうしたことでだろう。

二万トンの重量があり、階段や傾斜路や装飾物などが附属した四階建の巨大な石造の家をどのように説明したらよいだろう。一体いかなる巨大な力がそれをひっくり返したのだろうか。十七世紀に発見された地図の驚くべき正確な内容！

## 宇宙のアリ

地球の地殻は約四十億年前に形成された。そして科学でわかっているのは人間らしきものが百万年昔に存在したということだけである。その巨大な時間の流れから七千年の人類史という小川をなんとかしてせきとめてきた。

創造物の模範？である人間は現段階の発達をよげるのに四十万年を要している。他の惑星が同類の知的生物の発

達に対してもっと好意的な条件を与えてくれなかった理由を明確にするための具体的証拠を一体だれが提供できるだろう。

無限にきわめがたい宇宙でもろろの発見をなすことによって、人間の微小さを認める時が今や来ている。その時こそわれわれは人間が広大な宇宙の中のアリにすぎないことを悟るだろう。

## 序

この書を書くには勇気を要したが、これを読むのにも勇気を要するだろう。この書に述べられた諸説や証拠物などは堅固にかためられた伝統的な考古学のモザイクにあてはまらないために、学者はナンセンスと呼ぶだろうし、いっほどの価値のない書物群の目録の中に加えてしまうだろう。また素人は人類の過去に関する発見が未来に関する発見よりもっと神秘的かつ冒險的でさえあるという考え方に直面するとき、身近な世界というカタツムリの殻の中に引込んでしまふだろう。

それにもかかわらず一つの事だけは確かである。人類の過去に関して筋道の通らないものがあるということだ。しかもそれは数千、数万年前にさかのぼる過去である。その過去は、人工の宇宙船に乗って太古の地球を訪れた未知の

「神々」で充滿している。信じられないような科学技術の業績が過去に存在したのだ。今日われわれが部分的に再発見したにすぎない莫大な知識が存在しているのである。

われわれの考古学にも筋道の通らないものがある。数千年前の蓄電池が発見されているし、ブラチナのフラスナーのついた完全な宇宙服を着た不思議な「人間」も発見されているからだ。また十五の文字を持つ数字も発見されているが、これはいかなるコンピューターにも記録されないものである。しかしこんな物を作り出す能力を古代人はどうして得たのだろうか。

われわれの宗教にも筋道の通らないものがある。あらゆる宗教に共通している特徴は、宗教が人類に救済を約束しているという点である。太古の神々もこのような約束をしている。しか

しなぜ神々はそれを守らなかったのだろうか。なぜ神々は太古の人類に超モダンな武器を用いたのだろうか。なぜ彼らは人類を破壊しようとしたのだろうか。ここでひとつ、一千年以上にわたって発達してきた種々の主義思想の世界が崩壊しつつあるという考え方になれることにしよう。

数年間の正確な調査の結果、われわれが気楽に休息していた心中の大建築物はくずれ落ちてしまった。もろもろの秘密の社会の図書館の中に隠されていた知識は再発見されつつある。宇宙旅行の時代はもはや秘密の時代ではない。われわれはすでに月に到着している。星々を目指す宇宙旅行は、われわれにかわってわれわれの過去の深淵を測っている。神々、僧侶、王、英雄たちは暗黒の裂け目から出現する。われわれはその秘密をあばくためにそれらに挑戦しなければ



ばならない。というのは、われわれはほんとうに望むのなら何らのギャップなしに人類の過去に関するすべてを発見する手段を持っているからだ。

現代の各種研究機関は考古学的調査の仕事を引きつがねばならない。考古学者たちは超高度な装置を用いて過去の荒廃した場所を訪ねねばならぬ。真実を求める僧侶たちはすでに確立されているあらゆる物事をふたたび疑わねばならぬ。

薄暗い過去の神々はわれわれが今日初めて解読し得る無数の足跡を残している。今日非常な話題となっている宇宙旅行の問題は単なる問題

二十世紀の世界市民たるわれわれだけがこの宇宙で唯一の生ける人類ではないと考えられるだろうか。別な惑星からきたコピトが地球の博物館に陳列していないために、「この地球こそ人間の住む唯一の惑星だ」という答はいまだに合理的で納得のゆくもののように思われている。しかし最近の諸発見や研究などによって出てきた諸事実の慎重な調査を行なうとともに、多くの疑問が次々とわき起こってくる。

## 第1章 宇宙には知的生物がいるか

ではなく、数千年前の人々にとって現実の問題であつたからだ。こうした大気圏外の知的生物がだれであつたのか、いかなる惑星から来たのかを私がまだ知らないにしても、われわれの祖先ははるかなる過去に宇宙からの訪問を受けたのだと私は主張したい。それにもかかわらず私はこの「不思議な人々」が当時に存在した人類の一部分を絶滅させて、新しい、たぶん最初のホモサビエンスを創造したのだといいたい。

この断言は革命的なものである。これにより今までまったく完全だと思われていた心という建築物が建っていた土台はくずれてしまう。この断言の証拠を提供しようとするのが私のね

澄んだ夜に肉眼で見ると、約四千五百個の星が見えると天文学者はいふ。小さな天文台の望遠鏡でさえ約二百万個の星を見させてくれるし、近代的な反射望遠鏡ならば更に無数の星々から来る光をとらえる。銀河系の光点である。だが宇宙の巨大な広がりの中ではわれわれの銀河系は比較にならぬほどのぼろ大な島宇宙群の中の微小な一部分にすぎない。すなわち百五十万光年の半径内に約二十個の銀河系群を含むの

らいなのである。

本書は多数の人々の激励と協力なくして書かれるものではない。私は妻が理解してくれたことに感謝したい。彼女は過去数年間家庭で私に干渉しなかつたのだ。また友人のハンス・ノイナーにも感謝する。彼は数千マイルを共に旅した仲間であり、絶えず価値ある援助をしてくれたのである。その他感謝の意を表したい方々として、ヒューストン、ケープケネデー、ハンツビルの米航空宇宙局の全職員、ヴェルナー・フォン・ブラウン博士、ウィリー・レイ、バート・スラタリー、更に、援助と激励を寄せられた全世界の無数の男女の方々がある。

である。(一光年とは一年間に光が進行する距離である。つまり、 $186,000 \times 60 \times 60 \times 24 \times 365$  マイルなのである) しかもこのようなぼろ大な星群すらも、電波天文台で発見された無数の螺旋状星雲と比較すれば微小なものである。現在までに発見されているところからみて、私はそのように強調したい。というのはこの種の研究はまだ始まったばかりにすぎないからだ。

天文学者のハロー・シエブレの推測によ

れば、われわれの望遠鏡の視野内には10<sup>10</sup>の星があるという。シェプレーが、一惑星系を一千個の星々の中の唯一のものと考えれば、きわめて用心深い推測であるとみてよい。この推測にもとづいて考え続け、一千個の星の中の唯一の星のみに生命に必要な条件があると思ひ続けるならば、この推測はなおも10<sup>10</sup>という数字を生み出すのである。シェプレーは次のような疑問を發している。「この天文学的な数字において、一体どれだけ多くの星が生命に適した大気を持っているだろうか？」このことは生命にとって第一の要件を持つ星が10<sup>10</sup>あるという信じがたい数字を出すことになる。この数字から一千個目の惑星だけが生命を作り出したと仮定しても、やはり生命が存在すると推測してよい星が一億個はあることになる。この計算は現代の科学技術を応用した望遠鏡にもとづいているが、これは絶えず変わっていることを忘れてはならない。

### ○生命を持つ惑星存在の可能性

生化学者のスタンレー・ミラー博士の仮説によれば、生命にとって欠くべからざる条件は地球よりもこれらの惑星のどれかでもっと急速に發達していたかもしれない。この大胆な仮説を認めるとすれば、地球よりもっと進歩した文明が十萬個の惑星で發達していたかもしれない。

科学ものの高名な作家でヴェルナー・フォン・ブラウンの友人である故ウィリー・レイがニューヨークで次のように私に語ったことがある。「われわれの銀河系中の星の推定数だけでも三百億に達する。この銀河系が少なくとも百八十億個の惑星系を含んでいるという仮定は、現代の天文学者が認め得るものと考えられる。もし問題の数字をできるだけ減らそうとして、各惑星系間の距離がきわめて制限されているために百個の惑星系中の一個のみが太陽の周囲で軌道を描くと仮定しても、なおかつ生命維持の可能な一億八千萬個の惑星が残ることになる。更に仮定して、生命を維持するかもしれない百個の中の一惑星のみが実際に生命を持つとすれば、それでも生命を持つ百八十万個の惑星群が存在するということになる。更に仮定して、生命を持つ百個の各惑星の内、人間と同じ知的水準にある生物のいる惑星が存在するとしよう。するとこの最後の推測はわれわれの銀河系に一万八千個の人間の住む惑星がいるという結果を出すのである」

最新の計算によればわれわれの銀河系中には一千億の恒星があるというからには、レイ博士の推測をはるかに超えた高い確率が示される。

### ○イメージを高めよう

ファンタスティックな数字をあげたり、または未知の銀決系を考慮に入れたりしなくても、

われわれは地球の生命に類似した生命を持つ、地球に比較的近い惑星が一万八千個もあると仮定してよいだろう。しかもこの一万八千個の惑星のパーセントが実際に人間を住まわせているとしても、なおかつ百八十個の惑星が残ると推測してもよいのだ。

地球と同じような惑星——同じような大気の成分を持ち、同じような植物、同じような動物を持つ惑星群の存在については疑いの余地はない。しかし生命を維持する惑星群が地球のそれと同じような条件を持つことは欠くべからざることだろうか。

地上の条件下でのみ生命が栄え得るという考え方は、研究によつて時代遅れとなっている。水や酸素なしでは生命は存在できないと信ずるのは誤りである。われわれの地球上でさえも酸素を必要としない生命体があるのだ。それは嫌気性バクテリアと呼ばれる。一定量の酸素がそれに毒の働きをするのである。酸素を必要としない高度な生命体が存在してはならないということはない。

日々得られる新しい知識の圧力下で、われわれは自分のイメージを最先端にまでもつてゆかねばならない。ごく最近まで地球上で集約された科学的な調査の結果、われわれのこの惑星を理想的な惑星として賞賛している。暑からず寒からず、豊富な水を持ち、無限の酸素があり、有機的なプロセスが絶えず自然を若返らせている。

実際、地球と同じような惑星上にのみ生命が存在し発達し得るとすれば、それはおかしなことである。地球には二百萬種の生物が住んでいると考えられている。もちろん——これはあくまで推定だが——百二十萬種が科学的に「知られている」のだ。そして科学的に知られているこれらの生命体のなかには、現代の考え方に従えば当然生きることのできないものがなお数千種もいるのである。生命に対する種々の前提を考え直して新たに調査しなければならぬ。

たとえば、人は強い放射能を持つ水は細菌の影響を受けないと考えるだろう。しかし原子炉の周囲をとりまく致命的な水に自分を順応させ得るある種のバクテリアが実際にいるのである。生物学者のサンフォード・シーゲル博士によつて行なわれた実験は奇怪なものに見える。

彼は自分の研究室で木星の大気の状態を作り出し、この空気の中でバクテリアと小虫を培養した。この空気はわれわれがこれまで「生命」に対して考えてきた必要条件のいづれをも含んでいないものである。しかしアンモニア、メタン、水素などはバクテリアを殺さなかった。

### ○ブリュッセル大学の実験

ブリュッセル大学の昆虫学者ハワード・ヒント博士とブラム博士による種々の実験はともに驚くべき結果を出した。両科学者は摂氏百度の温度で数時間ブヨを乾燥させたのである。そし

てその後ただちに彼らは液体ヘリウム中にその「モルモット」を浸した。よく知られているようにその液体ヘリウムは、宇宙空間と同じほどに冷たいのである。強烈な光線をあてた後、彼らはブヨを普通の生きた状態にもどした。そのブヨは生物学的な生きた機能を持ち続け、完全に健康なブヨとなったのである。またわれわれは火山の中に住むバクテリアや石を食うバクテリア、鉄を生み出すバクテリアなどについても知っている。疑問の種はふえるばかりだ。

多くの研究センターでさまざまな実験が行なわれている。生命というものは生命体にとって全然必要条件ではないという新しい証拠が絶えず出ている。長い時代を通じて世界は地上の生命体を支配する諸法則や諸条件の周囲を回転しているように思われた。この確信はわれわれの物の見方をゆがめてぼかしてしまった。それは、宇宙を見るときの人間の思考の標準や大系などを遠慮なく受け入れていた科学研究者たちの目をふさいでしまったのである。画期的な思想家であるテイラー・ド・シャルダン、フアンタスティックなものだけが宇宙で真実であるチャンスを持つといっている。

われわれの考え方が別な工合に働くとすれば、別な惑星の知的生物は彼ら自身の生活条件を標準的なものとみなしていると言うようになるかもしれない。もし彼らが摂氏マイナス百五十度ないし二百度の温度下で生きるとすれば、われわれが知っているような生命にとって破壊

的なそのような温度が、別な惑星では生命にとって根本的に必要なのだと彼らは考えるだろう。それはわれわれが過去の暗黒を照らすのに必要な論理に釣り合うことになる。

### ○ユートピアは現実化する

われわれは理性的で客観的であるためには自尊心に頼っている。どうにかすると大胆な説がユートピアであるように見える。この多年のあいだ、なんと多くのユートピアが日常の現実になったことだろう。もちろんここで述べられる事例は最も不自然な可能性を指摘するつもりで書かれたものである。しかしわれわれが現在考えつくことさえできないような、ありそうもない物事がひとたび事実だと示されるや、障壁はくずれ、宇宙がいまだに隠しているものもろの不可能事に自由に近づけるようになるのだ。未来の世代は宇宙の中でまだ全然夢想もされなかったあらゆる種類の生命を見出すだろう。たといわれわれがそこにいて見なくても、彼ら世代は自分たちが宇宙において唯一の、しかも最も古い知的生物でないという事実を認めるだろう。

宇宙は八十億年ないし百十二億年の年齢を持つと推定されている。われわれの顕微鏡下にはイン石が有機物質の痕跡を示している。数百万年昔のバクテリアが目覚めて新生する。浮遊する胞子が宇宙を横断し、ときには惑星の引力に



よって捕えられる。数百万年のあいだ絶えまない創造のサイクルの中に新しい生命が発達を続けている。世界中のあらゆる種類のテストにより、地球の地殻は約四十億年前に形成されたことを証している。そうだ。科学が知っているのは人間らしきものが百万年前に存在したということだけである。その巨大な時の流れから、莫大な労力、多数の冒険、大変な好奇心をついやして、七千年の人類史という微小な小川をなんとかしてせきとめた。だが宇宙の悠久の歴史にくらべれば七千年の人類史は何だろう。

## ○未来の夢は宇宙にある

創造物の模範(?)であるわれわれ人間は、

# 第2章 われわれの宇宙船が他の惑星に着陸したとき……

あらゆるSF小説の祖父といわれるジュール・ヴェルヌは高名な作家となっている。彼の空想の産物はもはやSFではない。そして現代の宇宙飛行士たちは九十六分間で地球の周囲をまわるのである。八十日もかかるのではないのだ(注)ヴェルヌは「八十日間世界一周」の作者)。これからひとつ宇宙船による空想の宇宙旅行に出かけて、発生すると思われる出来事について語ることにしよう。しかもこの空想の旅

現在の状態、現在の発達に到達するのに四十年を要している。他の惑星が類似の人類の発達に必要な都合のよい条件をもっと与えてくれなかった理由を示す具体的な証拠を一体だれが作り出せるだろうか。地球人と同等かまたはそれ以上にすぐれた他の惑星上の「競争者」をわれわれは持つてはならないという何らかの理由があるのだろうか。われわれはこのような可能性を放棄する権利があるのだろうか。地球人は現在までその可能性を放棄してきたのだが――。

われわれの知恵という柱石が崩壊してホコリと化したことが何度あったことだろう。数百年ものあいだ人々は地球が平たいと考えた。太陽が地球の周囲をまわるといふ鉄壁の法則は数

百年間も真理とされてきた。そして今もなお人間は自分たちの地球こそ万物の中心であると確信している。しかるに地球は銀河系の中心から三万光年の取るに足りぬちっぽけなありきたりの星にすぎないことが立証されている。

今や無限の未探険の宇宙でもろもろの発見を行なうことよって、人間の取るに足りない存在を認める時が来た。そのときこそ、われわれは広大な宇宙の中のアリにすぎないことを悟るだろう。しかもわれわれの未来と多くのチャンスは宇宙の中に存在している。その宇宙こそ「神々」が約束された場所なのだ。

われわれが未来をのぞき込んでこそ初めて強く大胆になって、みずからの過去を正直に公平に探求するようになるだろう。

は、八十日間でやれる世界一周という当時としては途方もないヴェルヌの考え方を電光石火の九十六分間の旅に短縮するのに要した年月よりもっと少ない年月で可能となるだろう。しかしここではそんな短時間で考えないことにしよう。われわれの宇宙船は百五十年という時間で、ある未知の遠い太陽にむかって地球を発射するとしよう。

この宇宙船は現代の大汽船ほどの大きさがある

り、そのため九万九千八百トンの燃料を積んだ排水トン数約十万吨の重量をもつもので、結局、有効荷重は二百トンである。

不可能だと?

すでにわれわれは惑星の周囲の軌道にあるあいだ少しづつ宇宙船を組み立てることができた。だがこの組立作業も二十年もたたぬうちに不必要となるだろう。というのは月面上で打上げ用の巨大な宇宙船を準備することが可能にな

るからだ。おまけに明日のロケット推進の基礎的研究は今や進行の真最中なのだ。未来のロケット用モーターは主として核融合によって推進され、光速に近いスピードで進行するだろう。

大胆な新しい方法は——その可能性はすでに個の基本的な分野で物理的な実験によって示されている——光子ロケットなるだろう。光子ロケットに積み込まれる燃料によってこのロケットの速度は光速に近くなるので、相対性の効果、特に発射位置と宇宙船間の時間の差は十分に影響する。燃料は電磁放射線に変えられ、光のスピードを有する推進ジェットとして噴出される。理論的には光子推進エンジンをもち宇宙船は光速の九十九パーセントに達するはずである。このスピードならばわれわれの太陽系の各境界はぶち破られるだろう！

まったく気の遠くなるようなアイデアだが、新時代の入口にいるわれわれが忘れてならないのは、われわれの祖父たちが体験した科学技術の巨大な進歩は当時においてはまったくの驚きであったということである。鉄道、電気、電信、最初の自動車、最初の飛行機などがそうだ。われわれ自身は初めて放送による音楽を聴いた。そしてカラーテレビを見ている。最初の宇宙船の打上げを見だし、アメリカの宇宙飛行士たちが月面を歩くのも見た。また地球の周囲をまわる人工衛星からニュースや写真などを得ている。われわれの孫たちは宇宙旅行に出かけて宇宙探検をやるだろう。

## ○空想の宇宙船と相対性理論

さてわれわれの空想の宇宙船の旅に返ることしよう。その目標は遠い恒星である。その宇宙船の乗組員が宇宙旅行中に時間つぶしに何をやるかを想像するのは楽しいことだ。距離がどんなに広大でも、地球上に残されている人々にとって時間がどんなにのろく動いても、アインシュタインの相対性理論はやはり有効である。信じられないかもしれないが、ほとんど光速に近いスピードで飛ぶ宇宙船内の時間は、実際には地球上の時間よりもっとゆっくり動くのである。

たとえば宇宙旅行中に乗組員にとってわずかな十年間がすぎるあいだに、地上にいる人々には百八年がすぎるのである。宇宙旅行者と地球上にいる人々とのあいだのこの時間のずれは、アクレ教授が出した基本的ロケット方程式によって次のように計算することができる。

$$\frac{V}{W} = \frac{1 - (1 - t)^{2WC}}{WC \cdot 11 + (1 - t)^{2WC}} \quad (V = \text{速度, } W = \text{ジェット速度, } C = \text{光速, } t = \text{発射時の燃料積載量})$$

宇宙船が目標とする恒星に接近する瞬間、乗組員は間違いなく惑星群を調査し、その位置を定め、スペクトル分析を行ない、引力を測定し、軌道を計算するだろう。そして最後に地球に酷似した状態の惑星を着陸場所として選ぶだ

ろう。宇宙船が八十光年の旅行後エネルギー源が使い果たされたために船体の重量のみとなるならば、目標惑星で宇宙船の燃料タンクを核分裂物質で補充しなければならない。

## ○原始人に会う？

そこで次のようにしよう。着陸用に使われた惑星は地球に似ているとする。この仮定は全然不可能ではないと私はすでに述べた。更に次のように仮定しよう。到着した惑星の文明は地球の八千年前の状態と大体に同じ状態であるとする。もちろん、これは着陸時よりもかなり前に宇宙船内の各種装置ですべてたしかめられる。当然のことながら乗組員は核分裂物質が得られそうな所を着陸場所として選ぶ。装置類はどの山脈の中にウラニウムが発見されるかを急速に確実に示す。

着陸は計画どおり遂行される。すると乗組員は石器を作っている人間たちを見る。彼らは槍を投げてケモノをとっている。羊や山羊の群れが草原で草を食っている。原始的な陶工が単純な家庭用具類を作っている。乗組員たちにとってはめずらしい光景だ！

しかしそこへ着陸したばかりの奇怪な物体や、そこから出てくる人間たちを、この惑星の原始人たちは何と思うだろう？ だがわれわれも八千年昔には半未開人であったことを忘れてはならない。だからこのような出来事を体験す

る半未開人たちが地面に顔を伏せて目を上げようとしなくても驚くには足りない。今まで彼らは太陽や月を礼拝してきた。そして今は大地をゆるがすような大事件が発生した。「神々」が天空から降ってきたのだ！

## ○神々の出現

安全な隠れ場所からこの惑星の住民はわが宇宙旅行者たちを見ている。その旅行者たちは頭に棒のはえた奇妙な帽子をかぶっている（これはアンテナのついたヘルメットである）。彼らは夜が昼のように明るくなると仰天する（これはサーチライトである）。また、この奇妙な人間たちが無雑作に空中に上昇すると驚きおののく（これはロケットベルト）。そして不気味な未知の「動物たち」が空中に舞い上がり、ぶんぶんと唸り、荒い鼻息をたてると、またも頭を地面の中にうめる（これはヘリコプターや万能乗物である）。そして最後に恐るべき爆音とごろごろという音が山中から鳴り響くと、彼らは洞穴の安全な隠れ場所へ飛んではいる（これはテスト爆発）。たしかにわが宇宙旅行者たちはこの原始人にとって全能の神々のように見えるにちがいない！

連日のように宇宙旅行者たちは難儀な作業を続けるが、しばらくすると僧侶または魔術師たちの代表者団が「神々」とコンタクトしようとして乗組員たちの方へ近づいてくるだろう。彼

らは客人たちに敬意を表するために贈り物を持つてくる。乗組員たちはコンピューターの助けをかりて急速に住民の言葉をおぼえ、示される好意にたいして感謝する。しかし乗組員たちは相手の言葉を用いて「神々が着陸したのではなく、尊敬を受けるに価する高度に進歩した人間がやってきたのではない」と説明できるけれども、それは効果がない。わが原始人の友たちはまったくそれを信じない。この宇宙旅行者たちは他の星々から来たもので、それらは見たところすばらしい力と奇跡を演じる能力を持っている。相手は神であるにちがいない！ また何かの援助を差しのべようと説明してもむだである。それは恐ろしい侵略を受けたこの人々の理解力をはるかに超えているからだ。

着陸の日から起こるかもしれない物事すべてを想像することは不可能だけれども、次の諸点はあらかじめの計画で十分に想像することができ

る。住民の一部分を味方に引き入れて、地球へ帰るのに必要な核分裂物質を得るための爆発でできたクレーターを調査するのを手伝わせるように訓練する。

住民たちの中で最も頭のよい者を「王」に選ぶ。その者の権力の象徴として本人は無線機が与えられ、それによって本人はいつでも「神々」とコンタクトし、話しかけることができる。

宇宙旅行者たちは原住民に最も簡単な文明と

多少の道徳的な考え方を教え込む。これは社会秩序の発達を可能にするためである。特に選ばれた少数の女たちが乗組員たちによって受胎させられる。こうして自然の進化の段階をとり越えた新しい種族が誕生する。

この新しい種族が宇宙問題のエキスパートになるまでにどんなに長くかかったかは、われわれは自分たちの発達を通じて知っている。その結果、宇宙旅行者たちが地球への帰還飛行を始める前に、高度に進歩した科学技術による、数学的基礎をもつ社会の人間のみがはるか後代に理解できるという明瞭なシルシを残す。

## ○愚行をおぼえる

わが「子分」たちに、ふりかかろうとしている危険について警告しようとしても、それがうまくゆくチャンスはほとんどない。たといわれわれが地球の戦争や原爆などの最も恐ろしい映画などを彼らに見せても、地球人全体に対して戦争の燃える炎とたわむれることを現在やめさせることができないのと同様に、この惑星に住む住民たちに同じ愚行をやめさせることはできないだろう。

わが宇宙船が宇宙のモヤの彼方に消えてゆくあいだ、友人たちはこの奇跡について語る。――「神々がここへきたのだ！」彼らはそれを自分たちの言葉に翻訳して伝説とし、息子や娘たちに伝える。そして宇宙旅行者たちがあとに残



した贈り物や器具類やあらゆる物を聖なる遺物と化してしまふ。

### ○訪問は伝説となり聖化される

この友人たちが文字を書くことをおぼえたら、発生した出来事の記録を作るかもしれない。薄気味の悪い、不気味な、奇蹟的な事だった。次にその原本は——絵も加えられるだろうが——黄金の衣服を着た「神々」がすさまじい音を発しながら着陸した飛ぶ舟に乗ってやってきたと述べるだろう。また彼らは神々が海陸上を乗りまわした「戦車」や雷光のような恐ろしい武器についても書くだろう。そして「神々」がまた帰ってくると約束したと説明するだろう。彼らはかつて見たことのある物の絵を岩壁に彫りつけるだろう。頭にヘルメットと棒のついた形のない巨人たちが胸の前に箱をかかえている。何とも説明のしがたい人間たちの乗った

「玉」が空中を飛んでいる。まるで太陽から放たれるかのような光線を放射する棒状の物、巨大なコン虫に似た奇妙な形をしたある種の乗物など。

わが宇宙船の訪問の結果を想像すると果てしがない。われわれの遠い古代に地球を訪れた「神々」が過去の銘板に刻んだ跡を見ることにしよう。

わが宇宙船が訪れた惑星のその後の発達状態をスケッチするのはまったく容易である。住民たちはこっそりと「神々」を見ることによって多くの事を学んでしまった。宇宙船が静止していた場所は聖地と称され、巡礼の場所となり、そこで神々の英雄的な行為が歌でもって賞揚される。ピラミッドや寺院がそこに建てられる——もちろん天文学的法則にしたがって建てられるのである。しかしやがて人口がふえて、戦争により「神々」の場所が荒廃し、聖地を再発見して発掘する世代が現われ、遺跡を解読しよう

とする。

以上が、われわれが到達している段階である。われわれは月に人間を着陸させたからには、宇宙旅行にたいして心を開くことができるのだ。巨大な海洋航行船が、たとえば南海の島に突如出現して、その現住民たちにどのような影響を与えたかをわれわれは知っている。別な文明からきたコルテスのような人が南米にたいして与えたひどい影響についても知っている。そこでわれわれは、おぼろげながらも先史時代に宇宙船の到着によって起こったフアンタスティックな衝突がどのようなものを理解できる。

さてここで疑問の森を別な角度からながめてみることにしよう——説明のつかないミステリーの軍列である。それらは先史時代の宇宙旅行者の遺物として意味をなすだろうか？ われわれの過去に導き入れてくれて、しかも未来の計画とつながるだろうか？

## 第3章 説明のつかない物の満ちた、ありそうもない世界

われわれの歴史上の過去は間接的な知識から互いにつながり合っている。発掘、古文書、洞くつの絵、伝説、その他が、実際の憶測を組み立てるのに用いられた。こうした資料のすべてから、一つの印象的な面白いモザイクが作

られたが、それは先入観の産物であって、その中に各部分が常にはめ込まれるのである。ただし、ときには明瞭すぎるほどのセメントでもって貼りつけられることもある。こんなふうにして事件が発生したにちがいない。まさしくその

とおりである。そして、見よ——たといそれが学者たちの望むところであるにしても——そんなふうにして事件が起こったのだ。われわれは一般に認められている考え方や実際の憶測を疑う権利があるし、実際には疑うべきなのだ。

というのは既成の考え方が疑問視されないならば探究は終りとなるからだ。だからわれわれの歴史的な過去は相対的に真実であるにすぎないのである。もし新しい局面が現われるならば、古くからの実際的な憶測は、たといそれがどんなになじみ深いものになっても、新しい憶測と取り変えられねばならない。そして今や新しい憶測を導入して、過去の探求のまっただ中にそれを置かねばならない。

太陽系、宇宙、マクロコズム、マイクロコズム、科学技術と医学のすばらしい進歩、生物学と地質学、宇宙旅行の始まりなどに関する新知識——これらやその他多くの物事は、五十年もたたぬうちにわれわれの世界像を完全に変えてしまった。

今日、われわれは極端な寒暑に耐える宇宙服が作れることを知っているし、宇宙旅行がもはやユートピア的なアイデアでないことも知っている。われわれはカラーテレビの奇跡になれて、同様に光のスピードを測定したり相対性理論の結果を計算することもできるのである。

すでにほとんど凍結して静止してしまったわれわれの世界像は溶け始めている。生きた新しい憶測は新しい基準を必要とするのだ。たとえば未来においては考古学はもはや単なる発掘仕事ではない。発見物の単なる蒐集と分類だけではもう十分ではない。われわれの過去の信頼すべき実態を引き出すとするのなら、科学の他

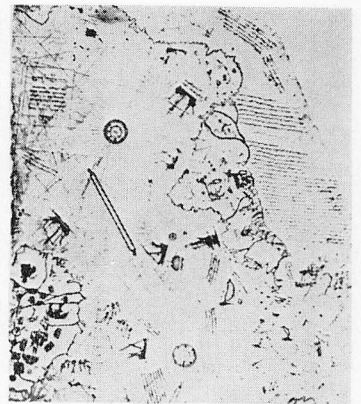
の分野にも出てもらってそれを応用しなければならぬ。

さあ、オープンマインドと溢れるばかりの好奇心をもって、新しい、ありそうもない世界にはいり込もうではないか！

### ○ピリ・レイスの不思議な地図

十八世紀の初頭に、トルコ海軍の将校であるピリ・レイス大將の所有物であった古代の地図がトプカピ宮殿内で発見された。また地中海と死海沿岸一帯の正確な複製が収めてある二冊の地図帳で、もとベルリン国立図書館に保存されていたものが、ピリ・レイスから出された。

これらの地図はみな検査のためにアメリカの地図製作家アーリントン・H・マラーに手渡された。するとマラーは注目すべき事実をたしかめた。つまりあらゆる地理学的なデータが載っているのだが、正しい位置に描かれていないのである。そこで彼は米海軍水路測量局の地図専門家ウォルターズ氏の援助を求めた。マラーとウォルターズはグリッドを組み立ててその地図類を球体にしたところ、驚くべき発見をしたのである。その地図類は完全に正確であったのだ。しかも地中海や死海に関するばかりではなく、北及び南アメリカの沿岸と、南極の輪郭さえもピリ・レイスの地図に正確に描かれていたのである。諸大陸の輪郭が再現しているばかりでなく内陸の地形まで示されているのだ！



ピリ・レイスの不思議な地図。  
 これには南北アメリカ、西アフリカ、南極大陸などがつながったように描かれている。

山脈、山頂、島々、河川、高原などがおそろしく正確に描かれていたのである。

地球観測年である一九五七年には、この地図類がウェストン天文台長で米海軍の地図専門家であるジェスイット派神父ライナムに手渡された。入念な検査の後、ライナム神父も地図が信じられないほど正確であることを確認した。現代でもまだほとんど探検されていないような地帯である。しかもレイスの地図に描かれている南極の山脈は一九五二年までは発見されなかった場所である。そこは数百年間氷で覆われていたし、現代の地図は反響装置の助けをかりて描かれたものである。

チャールズ・H・ハブグッド教授と数学者のリチャード・W・ストレーチヤンの最新の研究の結果は驚くべき情報をもたらした。人工衛星から撮影されたわが地球の写真と比較したところ、ピリ・レイスの地図のオリジナルは非常な高空から撮影された空中写真であったにちがいないことを示したのである！ これはどのような

に説明したらよいだろう。

カイロ上空にいる人工衛星がそのカメラをまっすぐ下に向けてとする。フィルムが現像されると次のような写真が現われるだろう。すなわちカイロから約五百マイルの半径内にあるあらゆる物が正確に再現するのであるが、これはそれらがレンズの真下にあるからである。しかし写真の隅の方へ行くにしたがって地形は次第にゆがんでくる。

これはなぜだろう。

地球が球体であるために、中心から離れていく大陸の地形は「下方へ沈む」からである。たとえば南アメリカは縦方向へ奇妙なふうにゆがんでくるが、まったくこれと同じ事がピリ・レイスの地図にも現われているのだ！ しかもアメリカの月ロケットから撮られた写真類にもまったく同じ状態が写っているのである。

### ○だれがこの地図を作ったか

ここで一、二の疑問が出てくるが、これはすぐに解答が得られる。たしかにわれわれの先祖がピリ・レイスの地図を作ったのではない。しかもこれはたしかに最新の科学技術を用いて空中から作られた地図にちがいないのだ。

これはどう説明すればよいだろう？ 神がその地図を高僧に与えたという伝説に満足すべきか。それともその地図がわれわれの心にあるこの世のイメージに合わないというので無視し

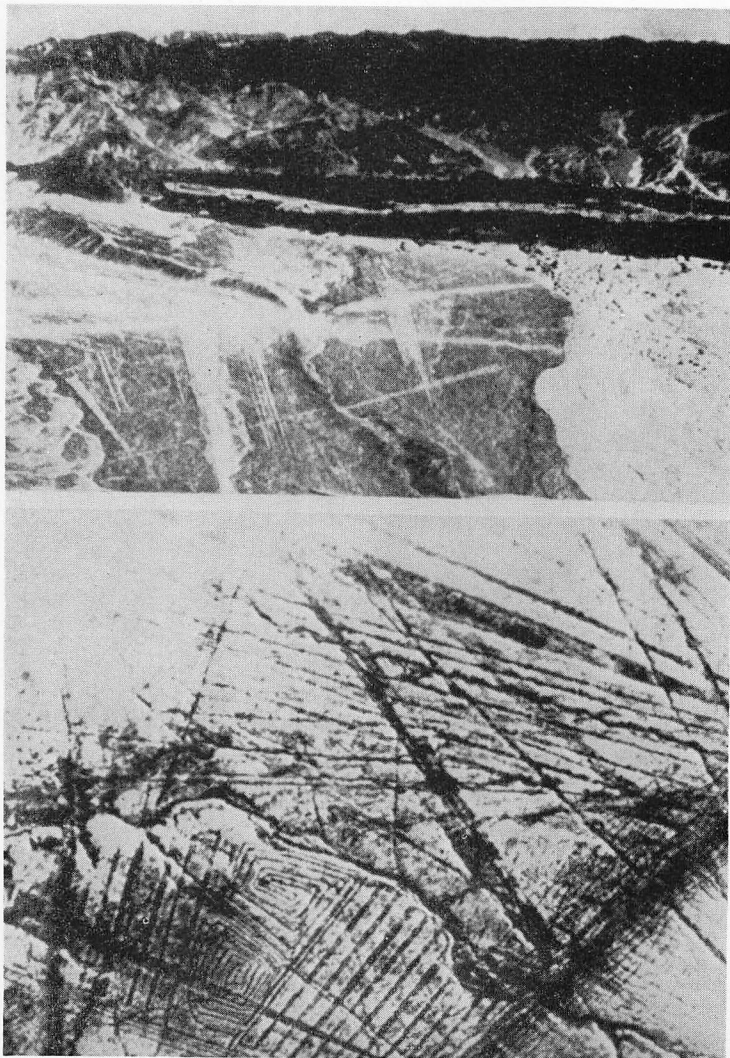
て、その「奇跡」を冷笑するべきか。それとも大胆にハチの巣をつついて、地球を描いたこの地図が高空を飛ぶ航空機または宇宙船によって作られたのだと主張するべきだろうか。

明らかにこのトルコの將軍の地図はオリジナルではない。それは何度もコピーされた結果、描かれたものである。しかしたといそれが発見された十八世紀から伝えられたものであるとしても、この事実はまったく説明のつかないことである。それをだれが作ったにしても空中を飛

んで写真を撮ることができたにちがいないのだ！

### ○ナスカの不可解な線形模様

ペルーのアンデス山脈中の海岸からほど遠からぬ所に、ナスカという古代の都市がある。バルバ溪谷には約三十七マイルの長さで一マイルの幅の細長い平坦な土地があり、さびた鉄の破片に似た石ころが散らばっている。住民たちは





この地域を草原と呼んでいるが、いかなる植物もまったく生長しない。この地域の上空を飛行機で飛ぶと、幾何模様を描いた巨大な線（複数）が引かれているのが見える。互いに平行になった線もあるし、交叉したのもあり、大きな台形の面積によって囲まれているものもある。

考古学者はこれをインカの道路といつている。何というバカげた考えだろう！ 互いに平行にしかれたり交叉した道路がインカにとって一体何の役に立つだろう。しかも草原の中に設けられて途中で切れている道路なのだ。

当然のことながら典型的なナスカの陶器類もここで発見されている。しかし幾何模様を描いた線（複数）をその理由だけでナスカの文化のせいにするのはあまりに単純にゆがめた考えである。

### ○古代の宇宙船発着場？

一九五二年まではこの地域で本格的な発掘は行なわれなかった。発見された物すべての正式な年表は作られていない。現在その線（複数）や幾何模様が測定されているにすぎない。その結果、各線は天文学的な計画にもとづいて設計されたという仮説をはっきりと証明した。ペルーの古代遺跡の専門家であるアルデン・マソン教授は一種の宗教のシルシが線形であらわされたのではないかと考えており、またおそらくカレンダーを意味しているとも推測している。

空中から見て筆者が受けた三十七マイルの長さを持つナスカの草原の明快な印象は、飛行場という感じであった。

この考えはひどく不自然だろうか？

調査されねばならぬ物が実際に発見されるまでは、研究（知識）は可能とはならない。だがひとたび発見されると、それはうむことなく磨かれ整えられて、現在のモザイクにびつたりとあてはまる一個の石になるだろう。正統的な考古学はインカ以前の人々が完全な測量技術を持っていたことを認めない。そして古代において飛行機が存在したかもしれないという説は彼らにとつては単なるたわごとにすぎないのである。

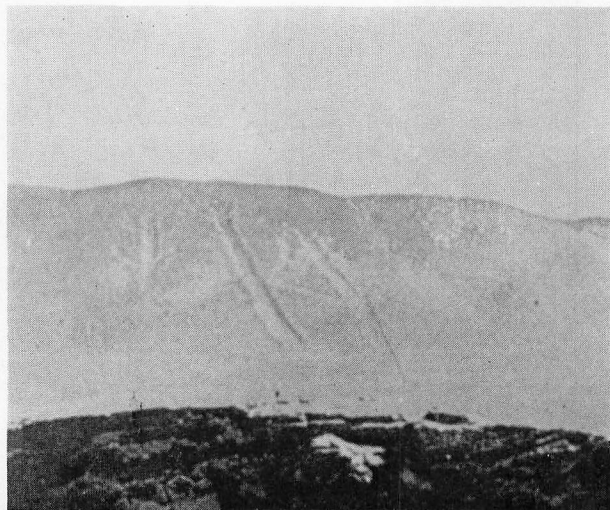
その場合、ナスカの線形模様はいかなる目的に役立ったのだろう。私の考え方にしたがえば、それはあるモデルをもとにして座標システムを用いることによつて、巨大なスケールにもとづいて設計されたものであろう。あるいはある航空機からの指示にしたがつて作られたものかもしれない。ナスカの平原が飛行場であつたかどうかを断言することはまだできない。もし鉄が使用されたとしても発見されることはあるまい。というのは先史時代の鉄は存在しないからだ。金属は数年間で腐蝕するが、石は腐蝕しない。その線形模様は「神々」に知らせるために敷設されたという考え方が何が悪いだろう。「ここへ着陸して下さい。あなたがたが命じられたとおり万事準備できています」その幾何

模様の建設者は自分たちが何をやっているかを知らなかったのかもしれない。しかしたぶん「神々」が着陸するために何を必要としたかはよくわかつていたことだろう。

### ○巨大な線画

空中を飛ぶ人間のためのシグナルとしか思えない巨大な線画がペルーの各地の山腹に見られる。

これらのなかで最も奇妙な線画の一つは、ピスコ湾の絶壁の高い赤い壁に刻まれたものである。船でそこへ到着すると十二マイル以上の距



離から八百二十フィート近くもある画像が見える。読者が「……のように見える」という言葉が好きならば、この彫刻師の作品は巨大な三叉の鉾または三本の枝のついたローソク台のように見える。そしてこの石のサインの中央の柱に一本の長いロープが見られるのである。これは過去の振子として役立ったのだろうか？

正直にいうと、これを説明しようとするれば、われわれは暗黒の中で手探りしている状態であることを認めねばならない。これを意味深長なものとして現行の各ドグマの中に含めることはできない。しかもこれは、学者がこのような現象をも一般の考古学的な考え方のようなモザイクの中に巧みにはめ込んでしまうようなトリックが存在しないという意味ではない。やはりトリックはあるかもしれないのである。

しかし一体何者がインカ以前の人々にナスカのこのファンタスティックな線形模様すなわち着陸地を建設させたのだろうか？ いかなる狂気によって彼らはリマの南の赤い崖に八百フィートの高さの石のサインを作ったのだろうか？

### ○空飛ぶ物体用のサイン？

現代の機械装置を用いないのであれば、このような仕事には数十年を要したことだろう。彼らの努力によるこの作品が非常な高空から接近しようとする「人間」たちに対するサインとして作られたものでないとするれば、その仕事はす

べて無意味なものとなる。そうするとここで一つの刺激的な疑問が起こってくる。空中を飛ぶ人間が実際に存在したということを製作者たちが知らなかったとすれば、なぜ彼らはこのような物を作ったか、ということである。

この遺跡の正体はもはや考古学上だけの問題ではない。各研究分野の科学者から成る調査団がこのナゾの解答をもたらすかもしれない。意見の交換や討論などによって明るい見通しが出てくるだろう。科学者連はこのような問題の提議をまじめに取り上げないので、研究しても確実な結論に達しないだろうという危険性がある。時間という灰色のモヤに包まれた宇宙旅行者なのだろうか？ これはアカデミックな科学者にとっては承認しがたい問題である。そのような疑問を発する人は精神病医にみてもらわなくてはなるまい。

しかし数多くの疑問がある。しかも有難いことにこの疑問類は、解答が与えられるまでは宙に浮いているという不適切な性質を帯びている。しかもそのような多くの承認しがたい疑問があるのだ。たとえば、春秋分、天文学的な各シーズン、各時間ごとの月の位置と月の運動などを示す一種のカレンダーがあったとすれば、人々は何というだろう。

### ○ティアウアナコの奇妙なカレンダー

これは単なる憶測による質問ではない。この

カレンダーは存在するのである。ティアウアナコの乾いた泥の中にそれは発見された。それはわれわれを当惑させるような発見物である。それはそのカレンダーを作って応用した人々がわれわれよりも高度な文化を持っていたという反論の余地のない事実と証拠を示しているのである。

### ○グレートアイドルのなぞ

まったくファンタスティックな発見物がもう一つあるが、それはグレート・アイドルである。この単純な赤石のかたまりは二十四フィート以上もあり、二十トンの重量がある。これはオールド・テンブルで発見された。ここでもわれわれはそのアイドル（偶像）全体に刻まれた数百の紋様のすぐれた技術と正確さと、それを収容した建築物に応用された原始的な技術との矛盾を見出すのである。実際にはそれは原始的な技術のためにオールド・テンブルと呼ばれている。

H・S・ベラミーとP・アランはその共著「ティアウアナコのグレート・アイドル」の中でその紋様のかなりうがった解説結果を載せている。彼らは、その紋様がぼう大な天文学的知識を記録したもので、たしかに球体の地球にもとづいたものであると結論している。しかもその記録はアイドルが発見された年の五年前の一九二七年に刊行されたヘルビガーの「衛星の

理論」に完全に合致していると述べている。この理論は一個の衛星が地球によって捕えられたと仮定している。それが地球の方へ引っばられるにつれて地球の自転速度を落とし、ついに分解して月になったというのである。

## ○2万7千年前の記録!?

その紋様は右の理論に合致する天文学的な現象を正確に記録している。すなわち過去の一時期において一年間を二百八十八日としたところにこの衛星が地球の周囲を四百二十五回転していたというのである。兩名はこのアイドルが二万七千年前の天空の状態を記録していると結論せざるを得なかった。彼らは次のように述べている。「全体的にみて、このアイドルの紋様は後代のための記録としてもくろまれたという印象を与えている」

ここにもたしかに「太古の神」とする以上の良い説明を必要とする大昔の物体がある。もしこの紋様の解説が正しい性質のものであるとすれば、われわれは次のように質問したい。「このアイドルに刻まれた天文学的知識は、はたして建築に関してもっと多くの事柄を知る必要のあった人々が刻んだものか、それとも地球以外のどこからきたらされたものか?」いずれの場合にしても、二万七千年前の洗練されたこのような知識の存在は驚くべき事である。

## ○神秘に満ちたティアウアナコ

ティアウアナコの町は神秘で満ちている。その町は一万三千フィート以上の高地にあり、どこからかなり離れている。クスコを出発すれば汽車と船で数日間の旅の後にその町と発掘現場に到着する。その高原は未知の惑星上の風景のように見える。現住民以外の人にとって手仕事は苦痛である。大気圧は海面のその約半分、したがって大気中の酸素も少ない。それにもかかわらず大きな都市がこの高原に存在するのだ。

ティアウアナコに関するほんとうの伝統はない。この場合、そのたしかな解答は伝統的なオーストドックスな学問という支えに頼っては得られないことを感謝すべきだろう。信じられないほどに古い廃虚全体に、過去、未知、神秘のモヤがかかっている。この廃虚がどんなに古いのかはまだわからない。

百トンも重量のある砂岩のブロック類の上に別な六十トンもあるブロックがのせられて壁となっている。おそらく正確なミゾのついたためらかな表面が、銅のハシバミで互いにつながれた巨大な四角石と接している。しかも、あらゆる石細工がすばらしくきれいに作られているのだ。八フィートの長さの穴(複数)が——その目的はまだわからない——十トンもあるブロック類の中に見られる。また一個の石から切り取

られた十六フィート半の長さの古びた敷石も、ティアウアナコが隠しているミステリーの解決に役立つていない。長さ六フィート、幅一・二フィートの石造の水道管が、オモチャのように地面に散らばっているのが見られる。明らかにすさまじい大変動によるものだ。当時の住民の正確な技術によるこうした発見物はわれわれを驚かせるのである。こうした物とくらべると現代のコンクリートの水道管がまるで不器用者の製品としか思えないような正確さをもつ水道管を作りながらティアウアナコの住民は年月をすごすこと以外になすべがなかったのだろうか。

現在復旧されている庭の中には、石像がごたまぜになっている。よく見るとこれらはきわめて多数の種族から成っているように思われる。それらの顔のなかには薄いくちびる、ふくれたくちびる、長い鼻、カギ鼻、優美な耳、厚い耳、おだやかな顔つき、角ばった顔など、さまざまである。また頭に奇妙なヘルメットをかぶったものもある。こうしたわけのわからぬ石像群は、頑固さと偏見によって理解が妨げられているけれども、結局はわれわれが現在も今後も理解できないメッセージを伝えようとしているのだろうか。

## ○驚くべき太陽の門

南米の大きな考古学上の驚異の一つは、ティ



アウアナコ一枚石の「太陽の門」である。これは高さ約十フィート、幅十六フィート半ある巨大な彫刻で、一個のブロックから刻まれたものである。この石細工の重さは十トン以上もあると推定されている。三列にならんだ四十八フィート平方の像（複数）が、一人の空飛ぶ神をあらわした人間のそばに立っている。



神秘的なティアウアナコの廃墟に関して伝説は何を語っているだろうか？

それは星々からやって来た一機の黄金の宇宙船について語っているのである！ それに乗ってオルヤナという名の一人の婦人が、地球のグレート・マザーになる仕事を遂行するために来たというのだ。オルヤナは四本の指しか持っておらず、それはもつれていた。グレート・マザ

ーたるオルヤナは七十人の地上の子を生み、それから星々へ帰ってしまった。

たしかにティアウアナコには四本の指を持つ人間たちの岩に刻まれた線画が見られる。その時代はわからない。われわれに知られているいかなる時代の人といえども、ティアウアナコが廃墟にならない頃の状態を見た人はないのだ。

一体どんな秘密がこの都市に隠されているのだろうか？ 他の世界からもたらされたいかなるメッセージが、このポリビヤの高原で解決を待っているのだろうか？ この文化の始まりや終りに対するもつともらしい説明はない。もちろん、このことはこの廃墟の遺跡が三千年前のものであると考古学者たちが大胆な自信に満ちた断言をすることを妨げるものではない。彼らは二個のつまらぬ小さな粘土の像からこの年代を割り出しているが、これはたぶん一枚石の年代と何の関係もないだろう。彼らは二、三個のこわれた古い陶器の破片をくっつけ合わせたり、二、三の隣接した文化を調査したり、修復された発見物にラベルをはったりする。そうすると、またもあらゆる物が見事に一般の通念にあてはまるのである。しかしこの方法は、不思議な技術があったのかもしれないという考え方、遠い過去に宇宙旅行者が来たのかもしれないという考え方をあえて起こすことよりも、はるかに簡単なことである。それは不必要に問題を複雑にすることになるだろう。

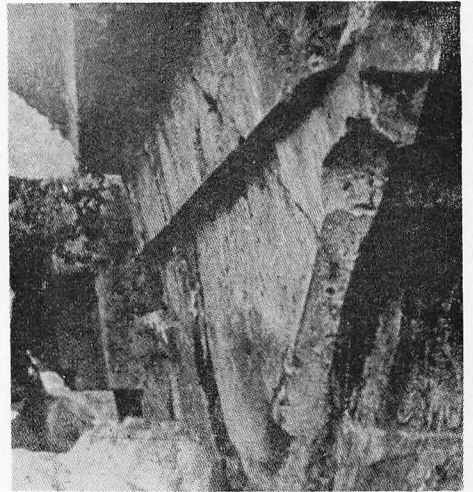
## ○サクサウアマンの巨石のナゾ

またわれわれはサクサウアマンを忘れてはならない！ といって私は現在のクスコに数フィートそそり立つすばらしいインカの堡塁のことをいうのではないし、また百トン以上もある一枚石のブロック群や、旅行者が前に立って記念撮影をやっている長さ千五百フィート、幅五十四フィート以上もあるテラス壁のことをいうのではない。私がいうのは、よく知られたインカの城塞からわずか半マイルのところにある未知のサクサウアマンなのである。

われわれの想像力では、祖先たちが石切場から百トン以上もある一枚岩を切り出してそれを運び、遠い場所でそれを工作するのに、どんな技術を用いたかを考えることは不可能である。しかしわれわれが推定二万トンの重量の岩に出会うとき、現代の技術的進歩によってなれてしまったわれわれの想像力は大ショックを受けるのである。サクサウアマンの城塞から帰る途中、数百ヤード彼方の山腹のクレーターの中で見物人は奇怪な物に出会う。それは四階建の家ほどの大きさの単体岩石である、それはまったく見事な技術によって非の打ちどころのないほどに仕上げられているのだ。それには階段や傾斜路がついており、ら施状の線や穴などで装飾されているのである。どうみてもこの先例のない石ブロックの作りは、インカ人たちの単なる

遊び仕事ではない。どうみてもそれは説明のつかない目的のために使用されたとは思えないのである。ナゾの解決をもっとむつかしくするのは、この巨大な岩全体がさかさに立っていることである。したがって階段は頂上から下方についており、手りゅう弾の刻み目みたいに多くの穴が異なる方向にあいているし、イスのような形の奇妙なくぼみ類が空間に浮かんでいるように見えるのである。人間の手によって、人間の努力によって、このブロックを掘り出して運び、仕上げたとは、一体だれが想像できるだろう。いかなる力がこれをひっくり返したのか？ 何の目的で？

この石の怪物で仰天しているうちに、見物人は約九百ヤード彼方で岩が一種のガラス化したものを見るが、これは非常に高温で石の溶解したものとしか思えない。驚いている見物人はその場でこの岩が氷河によってできたものだと言明されるが、これはバカげた話である。流れ行くかたまりに似た氷河ならば理論上は一方へ行くだろう。この特性がガラス化が発生した当時に変化したとはとてもありそうもないことで



ある。とにかく、氷河が一万八千平方ヤードの地域一帯にかけて六種類の異なる方向に流れたとは、ほとんど想像できないことである！

サクサウアマンとティアウアナコは多くの先史時代のミステリーを秘めており、それに対して浅薄な、しかもまったく納得のゆかない各種の説明が流れている。その上、ゴビ砂漠とイラクの古い考古学的遺跡付近には、砂のガラス化したものも発見されている。この砂のガラス化物質がネバダ砂漠の原爆実験によって生じた物質と似ている理由を説明できる人がいるだろう

か。

いつになったらこの先史時代のナゾに対する納得のゆく解答を与えるための決め手が出てくるだろうか。ティアウアナコには大きすぎて不格好な丘があり、その頂上は八千平方ヤード近くの面積にわたって完全な平面がある。その下に建築物が隠されていることは容易に考えられることである。今までこの一連の丘にトレンチが掘られたことはないし、ミステリーを解くための作業も行なわれてはいない。明らかに金がとぼしいのである。ところが旅行者はときどき何か役立つ仕事はないかと手持ぶたさでいる兵隊や将校などを見る。この兵隊たちに専門家の監督のもとに発掘をやらせてもわるくはないだろう。

金というものはこの世で多くの物を得るのに役立つ。未来のための調査はきわめて重要である。われわれの過去が未発見であるかぎり、未来のための入口はブランクのまま残っている。技術的な解決はすでに太古に存在したからというので、過去はその解決にわれわれが到達するのを助けてはくれないのだろうか。





ヤマモト

# サテライト天体望遠鏡

## 新発売

### 60mm 屈折径緯台

#### MODEL A-7

定 価 26,000円

荷造送料 1,500円



#### ●光学的性能

有効径 60mm  
焦点距離 700mm  
集光力 73倍  
分離能 2.0秒  
極限等級 10.7等

#### ●付属品

接眼鏡 (倍率)  
SR-5mm 140倍 (280倍)  
R-20mm 35倍 (70倍)  
〔( )内はバーローレンズ使用〕  
2倍バーローレンズ  
5倍ファインダー  
天頂プリズム  
地上用正立プリズム  
サングラス

#### ●格納箱

発泡スチロール入り木箱

ヤマモトの天体望遠鏡は海外で絶賛を博しております。

●上記の他各種あります。詳しくは115円切手同封の上カタログを御請求下さい。

株式  
会社

## 山本製作所

東京都板橋区大原町 5 - 3  
電話 966-2408 郵便番号 174



# ★光学器通信販売のお知らせ

## 《取扱商品》

天体望遠鏡・地上望遠鏡  
双眼鏡・顕微鏡・拡大鏡  
付属品及び部品類  
カメラ交換レンズ  
フィルター類  
—— 1年間完全保証 ——

## 《取扱メーカー》

旭光学  
アストロ  
エイコー  
カートン

Kenko  
五藤光学  
ニコン  
ミザール

## お問い合わせは

- ※商品の説明カタログをほしい方は切手180円を同封して申しこんでください。
- ※カタログを見て希望の商品を申しこんでください。
- ※送料、荷造費、全国どこでも無料です。



**Fujiメガボン**

光学部 K 係

〒150 東京都渋谷区道玄坂2-29-7(道玄坂センタービル1F) TEL 03(464)4556

## ● UFO 目撃報告と写真を募集

UFO (未確認飛行物体) の目撃報告と写真を募集します。左に掲げた各項目を参考に、なるべく正確な詳細な報告をお送り下さい。掲載された分には薄謝を呈します。写真の場合はできればネガもいっしょにお送り下さい。ただし本誌に掲載後に偽作であることが判明してトラブルが生じた場合、本誌は一切の責任を負いませんので、その点をあらかじめご了承下さい。その他、各種新聞雑誌などに掲載された UFO 関係の記事・写真類の切抜きも歓迎します。

## ● UFO 目撃報告用参考事項

- (1) 目撃者——住所氏名(できれば本人の写真添える)、年令、職業(学生の方は学校名・学年)、電話番号(匿名を希望の場合は本名明記の上、その旨を付記すること) 同時目撃者の有無、その他。
- (2) 目撃場所——地名、付近略図、時刻、天候、目撃継続時間、その他。
- (3) 物体——飛行物体の形(スケッチを添えること)、大きさ、色、その他。
- (4) 飛行状態——仰角、方向、飛行中の形態の変化、飛行中の色の変化、飛行中の光度の変化、推定速度及び高度、その他。
- (5) 観測機器——使用の場合はその機器名、性能その他を付記する。
- (6) 撮影用具——カメラを使用の場合はカメラ名、使用フィルム、レンズ名、絞り、シャッタースピードその他のデータを付記する。

送り先 東京都台東区秋葉原三の三、アキバビル

コスモ出版社 UFO 資料調査部

●目撃報告とは別に、次号より「読者の声」欄を設けます。本誌に対する感想、UFO 問題に関する所感等をふってご投稿下さい。宛先は「コスモ出版社、読者の声係」

## 編集後記

◎わが国最初の UFO 情報専門誌に誕生！ まずはめでたしというところですが、UFO 研究態勢の遅れている日本でこの雑誌一つを出すにしても並大抵ではなく、手放しでよろこんでいるわけにもゆきません。情報資料集め、整理検討等、問題が山積しています。読者の皆様のご協力をお願いする次第です。

◎次号以後は UFO 問題に宇宙科学の記事も加えて科学面でも充実した内容にするつもりです。ご期待下さい。  
◎夏は UFO 観測に絶好のシーズン。皆様のすばらしい目撃報告をお待ちしています。(K)

## UFO と宇宙 コスモ

一九七三年七月—八月号

(第一巻第一号)

編集発行人——久保田八郎

発行所——株式会社 コスモ出版社

〒110 東京都台東区秋葉原三の三、アキバビル

電話(二五五)八七八四、七〇一九

振替 東京 119478

印刷所——大日本印刷株式会社

昭和四十八年七月二十日発行

(隔月刊・奇数月二十日発行)

定価三〇〇円・送料八五円

年々め購読料送料共二二〇〇円

(地方の書店で入手できない場合は本社へ直接ご注文下さい)

●本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます。



# 創業50周年謝恩第一回特売セール

ダウエル光学が製作から販売まで直接皆さんの手元に届きます  
この道50年の誠実と信頼出来る望遠鏡のキャリアで卸値提供です  
レンズは最優秀、マウンテング、三脚鏡筒等も頑丈に出来ており安心です

6cm級屈折遠望鏡



**TX62**  
特売 ¥13,500  
荷造送料 ¥1,000



**TS62**  
特売 ¥9,500  
荷造送料 ¥1,000

光学的性能★ハードコーテッド増透処理済

| 種類    | 対物レンズ   |
|-------|---------|
| 対物レンズ | 2枚合せ色消し |
| レンズ径  | 62mm    |
| 焦点距離  | 700mm   |
| 集光力   | 73×     |
| 分解能   | 1.93秒   |
| 極限等級  | 10.7等星  |

| 種類    | 対物レンズ   |
|-------|---------|
| 対物レンズ | 2枚合せ色消し |
| レンズ径  | 62mm    |
| 焦点距離  | 700mm   |
| 集光力   | 73×     |
| 分解能   | 1.93秒   |
| 極限等級  | 10.7等星  |

接眼鏡の交換は自由です。

| 種類    | 対物レンズ   |
|-------|---------|
| 対物レンズ | 2枚合せ色消し |
| レンズ径  | 62mm    |
| 焦点距離  | 700mm   |
| 集光力   | 73×     |
| 分解能   | 1.93秒   |
| 極限等級  | 10.7等星  |

| 種類    | 対物レンズ   |
|-------|---------|
| 対物レンズ | 2枚合せ色消し |
| レンズ径  | 62mm    |
| 焦点距離  | 700mm   |
| 集光力   | 73×     |
| 分解能   | 1.93秒   |
| 極限等級  | 10.7等星  |

鏡筒  
マウンテイング  
接眼部  
接脚  
附属品

ジュラルミン管白色塗装  
ヨーク式 フレキシブル付  
上下水平微動装置付経緯台  
ラックピニオン繰出二重調節装置  
木製三脚二段伸縮65~140cm  
接眼鏡..... 3  
ハイゲンス H 20mm..... 1  
ミッテズエー HM 12.5"..... 1  
" HM 6"..... 1  
ファインダー 口径15mm 5×..... 1  
天頂用ダイヤゴナルプリズム..... 1  
サングラス..... 1

鏡筒  
マウンテイング  
接眼部  
接脚  
附属品

ジュラルミン管白色塗装  
ヨーク式 経緯台  
ラックピニオン繰出二重調節装置  
木製三脚二段伸縮65~140cm  
接眼鏡..... 2  
ハイゲンス H 12.5mm..... 1  
ミッテズエー HM 6"..... 1  
ファインダー 口径 15mm 5×..... 1  
天頂用ダイヤゴナルプリズム..... 1  
サングラス..... 1



**TD62**  
特売 ¥17,500  
荷造送料 ¥1,500



**TL62**  
特売 ¥15,500  
荷造送料 ¥1,200

光学的性能★ハードコーテッド増透処理済

| 種類    | 対物レンズ   |
|-------|---------|
| 対物レンズ | 2枚合せ色消し |
| レンズ径  | 62mm    |
| 焦点距離  | 1000mm  |
| 集光力   | 73×     |
| 分解能   | 1.93秒   |
| 極限等級  | 10.7等星  |

| 種類    | 対物レンズ   |
|-------|---------|
| 対物レンズ | 2枚合せ色消し |
| レンズ径  | 62mm    |
| 焦点距離  | 1000mm  |
| 集光力   | 73×     |
| 分解能   | 1.93秒   |
| 極限等級  | 10.7等星  |

接眼鏡の交換は自由です。

| 種類    | 対物レンズ   |
|-------|---------|
| 対物レンズ | 2枚合せ色消し |
| レンズ径  | 62mm    |
| 焦点距離  | 800mm   |
| 集光力   | 73×     |
| 分解能   | 1.93秒   |
| 極限等級  | 10.7等星  |

| 種類    | 対物レンズ   |
|-------|---------|
| 対物レンズ | 2枚合せ色消し |
| レンズ径  | 62mm    |
| 焦点距離  | 800mm   |
| 集光力   | 73×     |
| 分解能   | 1.93秒   |
| 極限等級  | 10.7等星  |

鏡筒  
マウンテイング  
接眼部  
接脚  
附属品

ジュラルミン管白色塗装  
上下水平微動装置付経緯台  
ラックピニオン繰出二重調節装置付  
二段伸縮木製三脚65~140cm  
接眼鏡..... 4  
ハイゲンス H 20mm..... 1  
ミッテズエー HM 12.5"..... 1  
" HM 9"..... 1  
" HM 6"..... 1  
ファインダー 口径20mm 8×..... 1  
天頂用ダイヤゴナルプリズム..... 1  
サングラス..... 1

鏡筒  
マウンテイング  
接眼部  
接脚  
附属品

ジュラルミン管白色塗装  
上下水平微動装置付経緯台  
ラックピニオン繰出二重調節装置  
二段伸縮木製三脚65~140cm  
接眼鏡..... 4  
ハイゲンス H 20mm..... 1  
ミッテズエー HM 12.5"..... 1  
" HM 9"..... 1  
" HM 6"..... 1  
ファインダー 口径20mm 8×..... 1  
天頂用ダイヤゴナルプリズム..... 1  
サングラス..... 1

● 望遠鏡工作材料各種在庫豊富 総合カタログ33版66頁 200円封入申し込み下さい。

創業50年の業歴ある光学専門メーカー

ダウエル  
光学器械製作所

株式会社 成東商会

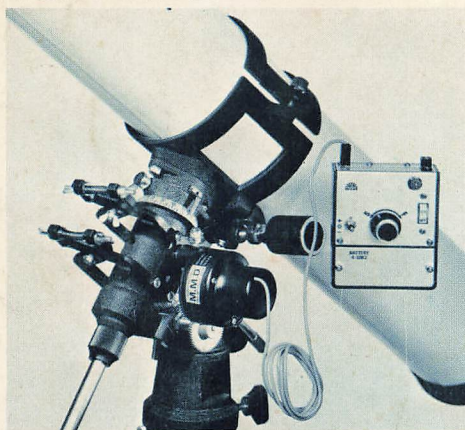
郵便番号113  
東京都文京区西片2丁目12番地  
電話(811)2367・7035 (813)1578  
振替口座 東京4605



# 今夜もらくらく観測!! 2分弱で組立てられるコンパクト設計。



**M.M.D** ¥15,000  
ミザール・モーター・ドライブ装置  
2電源方式〈乾電池・家庭電源〉



M.M.DをP-100型に着装

**新発売**  
反射赤道儀100mm・電動化可能  
**P-100型** ¥43,000  
D=100mm・f=1000mm  
K20mm(50倍)・HM9mm(111)・HM5mm(200倍)

新設計のピラー脚・マウンテングに泣きどころなし…

- 観測の際に生じる脚ブレ・震動皆無なので高性能発揮
- 移動の時の組立て分解—わずか2分間で完了

- 望遠鏡のお求めはデパート、光学品扱い店で。
- カタログがご希望の方は、右下の申込券と、切手50円を同封して本社宛申込みください。

- 天体望遠鏡のガイドブック  
「望遠鏡の早わかり」¥45+〒25 (切手70円)

**ミザール望遠鏡**



**日野金属産業株式会社**

本社・営業所/〒152 東京都目黒区碑文谷1-10 ☎711-7751(代)